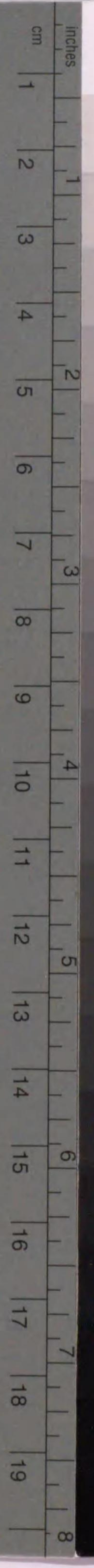
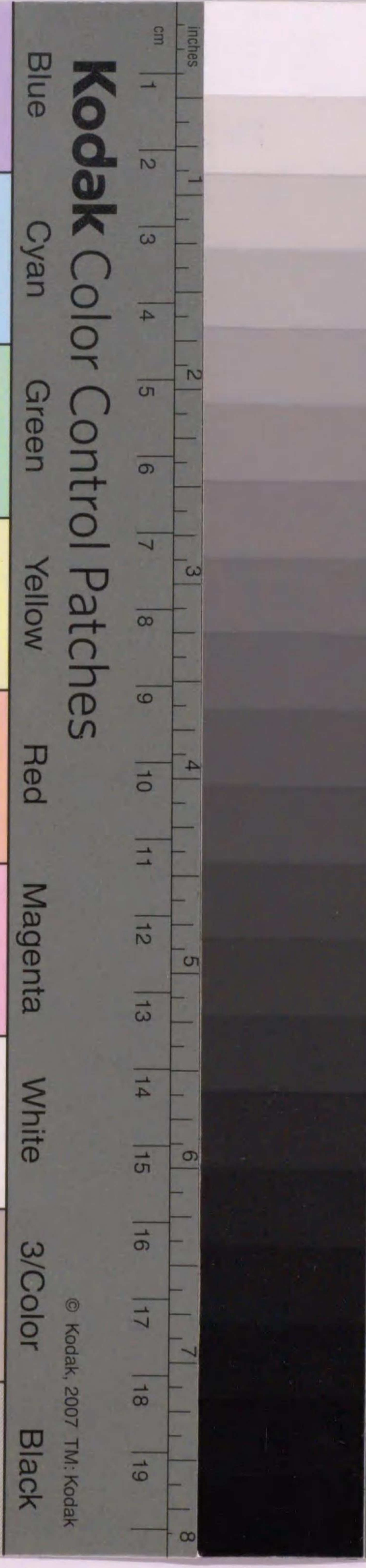
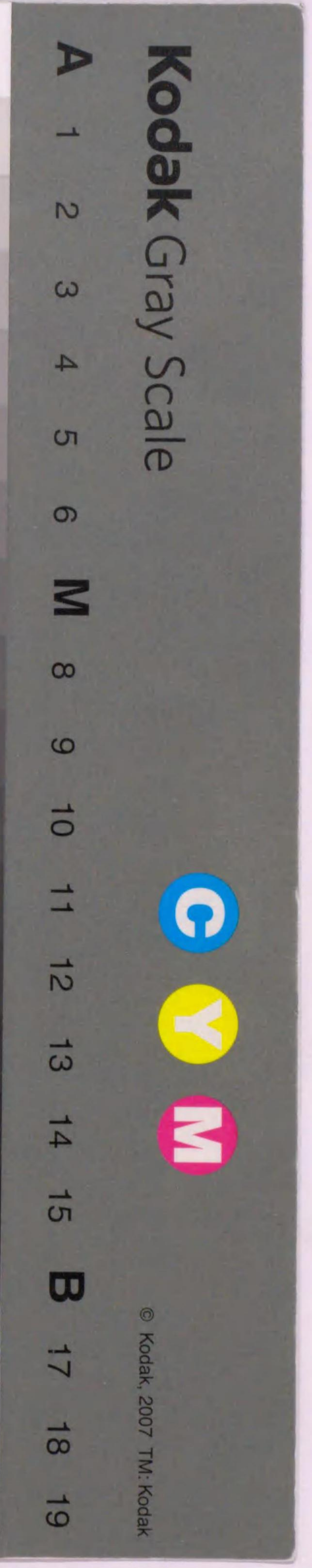


654
56

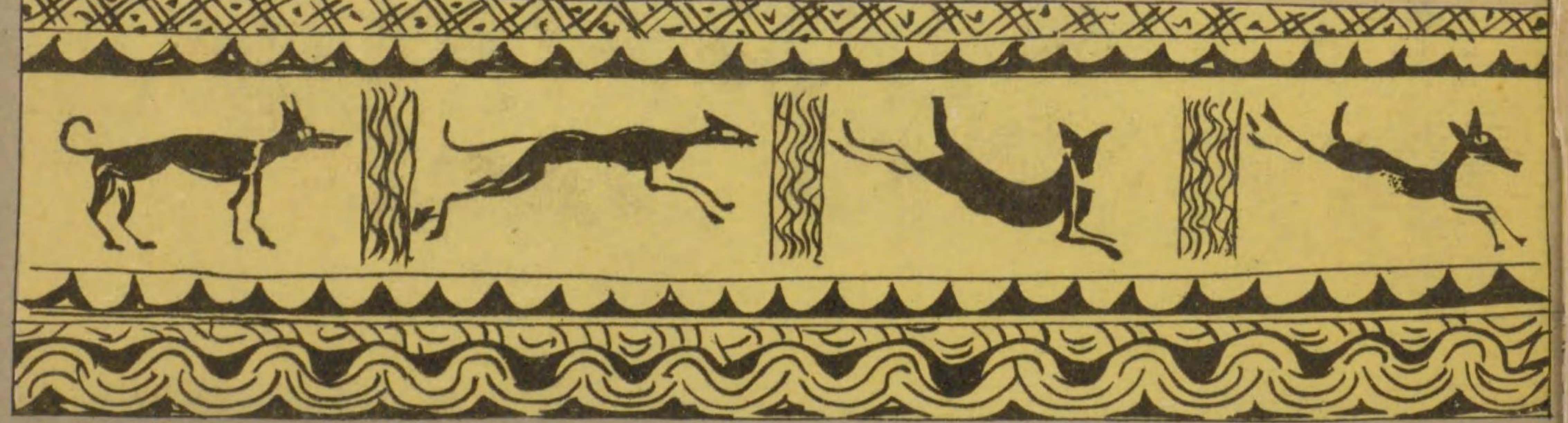


654-56
1200501571114



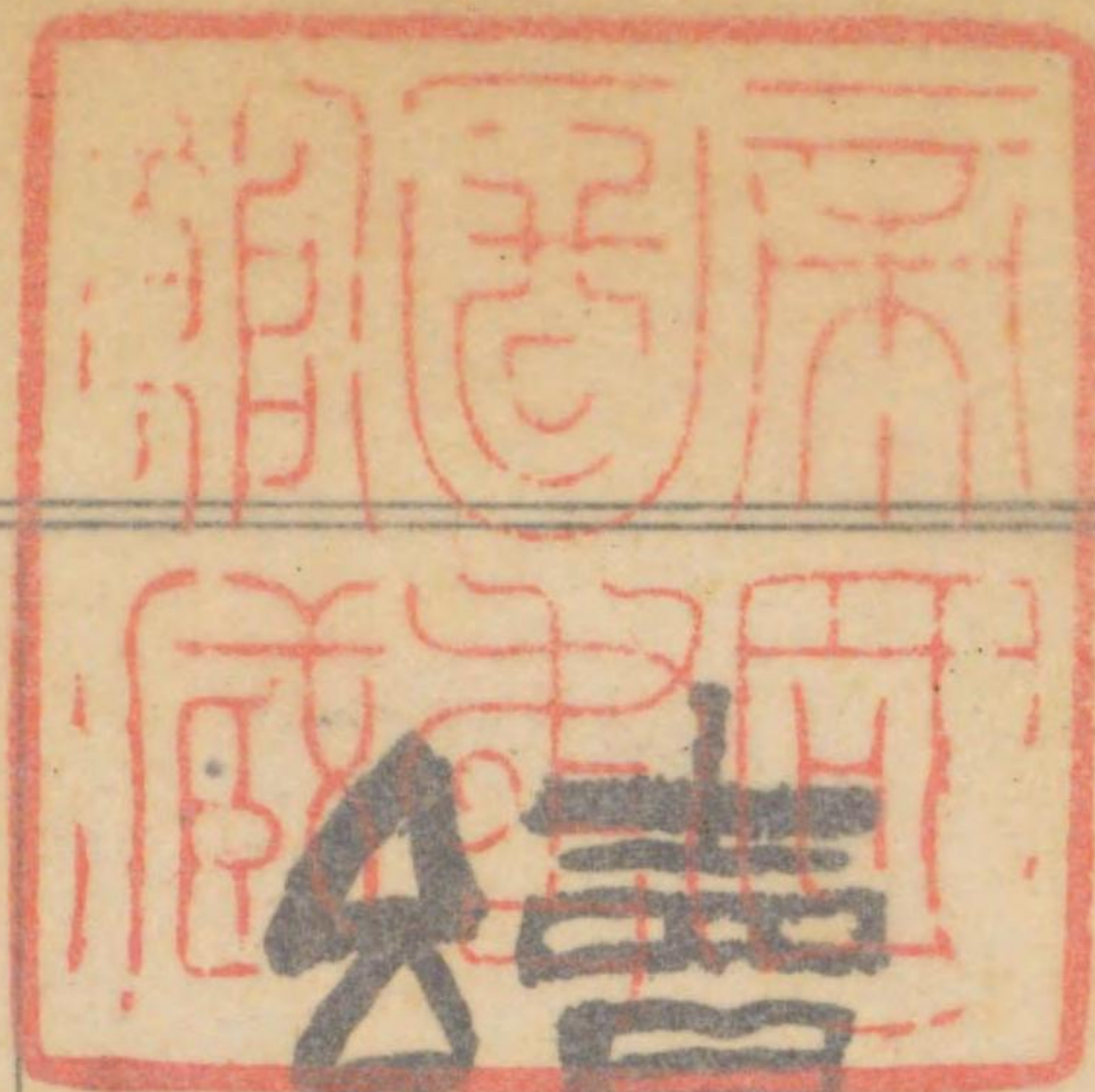
内務省
4.6.12
正本

172

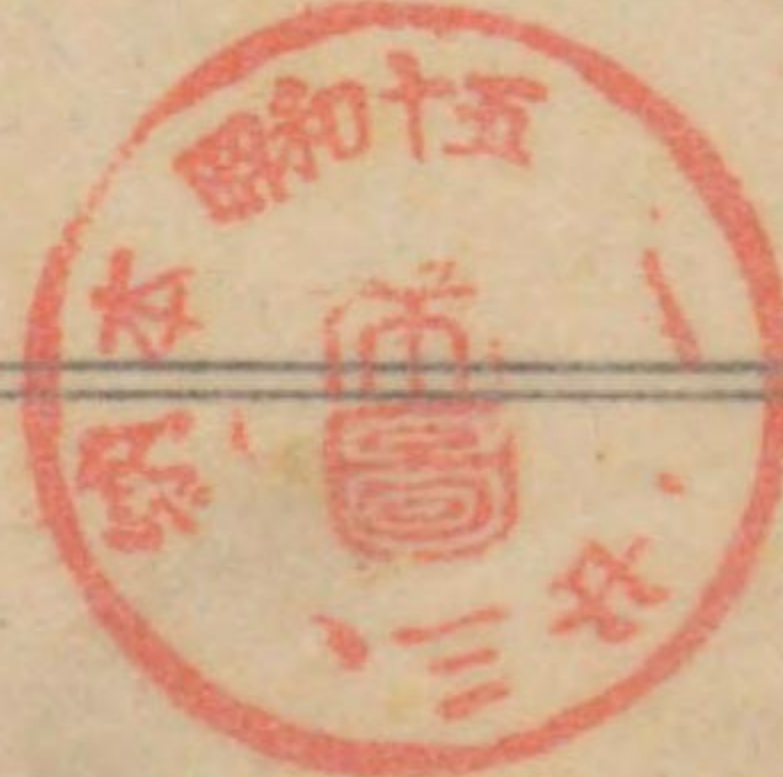


文学
2474
保存





續國譯漢文大成



文學部
第十三卷
蘇東坡詩集
第一卷



續國譯漢文大成



文學部
第十三卷
蘇東坡詩集
第一卷

654
56

蘇東坡詩集第一卷目次

總說.....一—七

卷一

古今體詩

郭 綸.....	一
初發嘉州.....	三
隄爲王氏書樓.....	四
過宜賓見夷牢亂山.....	六
夜泊牛口.....	七
牛口見月.....	九
戎 州.....	三
舟中聽大人彈琴.....	三
~~~~~	
泊南井口期任遵聖長官到晚不及見復來.....	一五
過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符 二首.....	一六
渝州寄王道矩.....	一七
入 峽.....	一八
江上看山.....	二二
涪州得山胡次子由韻.....	二四
留題仙都觀.....	二五
仙都山鹿.....	二七

目次

一

蘇東坡詩集第一卷目次



江上值雪效歐陽體次子由韻	二六
嚴顏碑	三三
屈原塔	三三
望夫臺	三六
竹枝歌	三七
八陣碛	四三
諸葛鹽井	四四
白帝廟	四五
永安宮	四九
過木樨觀	四九
巫山	五〇
巫山廟上下數十里有烏鳶無數取食於行舟之上	五五
神女廟	五七

卷二

過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟	二六
昭君村	三六
新灘	三六
新灘阻風	三五
黃牛廟	三七
蝦蟆培	三六
出峽	三九
遊三遊洞	三七
遊洞之日有亭吏乞詩	三九
寄題清溪寺	三七
留題峽州甘泉寺	三七
夷陵縣歐陽永叔至喜堂	三八

古今體詩

息壤詩	八三
荊州十首	八五
渚宮	九六
荊門惠泉	一〇一
次韻答荊門張都官維見和惠泉詩	一〇三
涇陽早發	一〇四
夜行觀星	一〇六
漢水	一〇七
襄陽古樂府三首	一〇九
野鷹來	一〇九
上塔吟	一一一
襄陽樂	一一三
峴山	一一五

萬山	一七
隆中	一八
竹葉酒	二〇
鯿魚	二一
食雉	二二
穎大夫廟	二四
新渠詩并敘	二五
雙鳧觀	二九
許州西湖	三〇
阮籍嘯臺	三三
大雪獨留尉氏有客入驛呼與飲至醉	三四
黃河	三五
朱亥墓	三七



次韻水官詩.....二六

卷三

古今體詩

辛丑十一月十九日既與子由別於鄴州西門外.....二四

和子由澠池懷舊.....二四

次韻劉京兆石林亭之作.....二四

和劉長安題薛周逸老亭.....二五

驪山三絕句.....二五

次韻子由岐下詩并序.....二五

北亭.....二五

橫池.....二五

短橋.....二五

軒窗.....二五

曲檻.....二五

雙池.....二五

荷花.....二五

魚.....二五

牡丹.....二五

桃花.....二五

李.....二五

杏.....二五

梨.....二五

棗.....二五

櫻桃.....二五

石榴.....二五

樗.....二六

槐.....二六

松.....二六

檜.....二六

柳.....二六

次韻子由除日見寄.....二六

壬寅二月有詔減決囚禁記所經歷寄子由.....二七

太白山下早行至橫渠鎮書崇壽院壁.....二八

留題延生觀後山上小堂.....二八

留題仙遊潭中興寺東有玉女洞.....二八

石鼻城.....二八

礮溪石.....二八

鄜塢.....二八

樓觀.....二八

題寶雞縣斯飛閣.....二八

壬寅重九不預會獨遊普門寺僧閣有懷子由.....二九

客位假寐.....二九

九月二十日微雪懷子由弟二首.....二九

病中聞子由得告不赴商州三首.....二九

病中大雪數日未嘗起觀號令趙薦以詩相屬.....二九

歲晚三詩寄子由.....二九

饋歲.....二九

別歲.....二九

守歲.....二九

讀開元天寶遺事三首.....二九

卷四



古今體詩

和子由踏青	二二一
和子由蠶市	二二三
次韻子由論書	二二五
記所見開元寺吳道子畫佛滅度以答子由	二二八
和子由寒食	二二二
次韻和子由欲得驪山澄泥硯	二二三
次韻和子由聞予善射	二二四
次韻子由彈琴	二二五
中隱堂詩 五首	二二六
鳳翔八觀并序	二二一
石 鼓	二二三
詛楚文	二四一
王維吳道子畫	二四三
維摩像唐楊惠之塑在天柱寺	二四七
東 湖	二五〇
真興寺閣	二五四
李氏園	二五六
秦穆公墓	二六一
和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書	二六四
將往終南和子由見寄	二六七
讀道藏	二七〇
真興寺閣禱雨	二七一
七月二十四日久不雨出禱磻溪	二七三
二十六日五更起行至磻溪天未明	二七五
是日自磻溪將往陽平憩於翠麓亭	二七六
二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺	二七八

是日至下馬嶺憩於北山僧舍	二八〇
撻雲篇	二八三
姤佳月	二八六

卷 五

古今體詩

和子由記園中草木 十首	二九三
紀 夢	三〇五
次韻子由種菜久旱不生	三〇六
大老寺竹間閣子	三〇七
周公廟	三〇八
戲作賈梁道詩	三〇〇
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	三一二
重遊終南子由以詩見寄次韻	三二四
自清平鎮往返四日得十一詩	三三五
樓 觀	三二五
五 郡	三二六
授經臺	三二八
大秦寺	三二九
僊游潭	三二九
南 寺	三三〇
北 寺	三三一
馬融石室	三三二
玉女洞	三三三



愛玉女洞中水……………三四  
 自僊游回至黑水……………三五  
 南溪有會景亭……………三七  
 凌虛臺……………三九  
 竹 籬……………三一  
 溪陂魚……………三三  
 十二月十四日夜微雪……………三五  
 九月中會題二小詩於南溪竹上……………三六  
 司竹監燒葦園……………三六

卷 六

古今體詩

次韻柳子玉見寄……………三五  
 送曾子固倅越得燕字……………三六  
 王頤赴建州錢監求詩及草書……………三六

和子由木山引水 二首……………三四  
 和子由苦寒見寄……………三五  
 寄題興州晁太守新開古東池……………三七  
 華陰寄子由……………三九  
 和董傳留別……………四一  
 西蜀楊耆二十年前見之甚貧今見之亦貧……………四一  
 夜直祕閣呈王敏甫……………四三  
 謝蘇自之惠酒……………四五

秀州僧本覺靜照堂……………三五  
 石蒼舒醉墨堂……………三六  
 送安惇秀才失解西歸……………三六

送任佖通判黃州兼寄其兄孜……………三七  
 次韻子由初到陳州 二首……………三九  
 次韻子由綠筠堂……………三七  
 送劉放倅海陵……………三七  
 送錢藻出守婺州得英字……………三七  
 送呂希道知和州……………三八  
 次韻王誨夜坐……………三八  
 送文與可出守陵州……………三九  
 送劉道原歸觀南康……………三九  
 出都來陳所乘船上有題小詩八首和之……………四一  
 次韻張安道讀杜詩……………四一  
 送張安道赴南都留臺……………四二  
 傅堯俞濟源草堂……………四二  
 陸龍圖詵挽詞……………四三  
 胡完夫母周夫人挽詞……………四四

目 次

次韻柳子玉過陳絕糧 二首……………四一  
 穎州初別子由 二首……………四二  
 歐陽少師令賦所蓄石屏……………四二  
 陪歐陽公燕西湖……………四三  
 十月二日將至渦口五里所遇風留宿……………四三  
 出穎口初見淮山是日至壽州……………四四  
 壽州李定少卿出餞城東龍潭上……………四五  
 濠州七絕……………四七  
 塗 山……………四七  
 彭祖廟……………四八  
 逍遙臺……………四九  
 觀魚臺……………四九  
 虞姬墓……………五〇  
 四望亭……………五一  
 浮山洞……………五二



發洪澤中途遇大風復還……………四三四  
 十月十六日記所見……………四三六  
 廣陵會三同舍各以其字爲韻仍邀同賦……………四三六

卷七

古今體詩

遊金山寺……………四四七  
 自金山放船至焦山……………四五〇  
 甘露寺……………四五三  
 次韻子由柳湖感物……………四六〇  
 次韻楊褒早春……………四六三  
 初到杭州寄子由二絕……………四六五  
 次韻柳子玉二首……………四六七  
 地爐……………四六七  
 紙帳……………四六八

劉貢父……………四三六  
 孫巨源……………四四一  
 劉莘老……………四四二

臘日遊孤山訪惠勤惠思二僧……………四七〇  
 李杞寺丞見和前篇復用元韻答之……………四七二  
 再和……………四七六  
 遊靈隱寺得來詩復用前韻……………四七九  
 戲子由……………四八二  
 送蔡冠卿知饒州……………四八六  
 嘲子由……………四九〇  
 越州張中舍壽樂堂……………四九一  
 姚屯田挽詞……………四九四

送岑著作……………四九五  
 雨中明慶賞牡丹……………四九七  
 吉祥寺賞牡丹……………四九八  
 吉祥寺僧求閣名……………四九九  
 和劉道原見寄……………五〇〇  
 和劉道原咏史……………五二〇  
 和劉道原寄張師民……………五〇三  
 送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作……………五〇五  
 和子由柳湖久涸忽有水二首……………五〇六  
 雨中遊天竺靈感觀音院……………五〇九  
 贈上天竺辯才師……………五一〇

卷八

古今體詩

焦千之求惠山泉詩……………五四三

和蔡準郎中見邀遊西湖三首……………五一  
 六月二十七日望湖樓醉書五絕……………五六  
 七月一日出城舟中苦熱……………五九  
 宿餘杭法喜寺後綠野堂……………五二  
 宿臨安淨土寺……………五三  
 自淨土寺步至功臣寺……………五六  
 遊徑山……………五九  
 自徑山回得呂察推詩……………五四  
 宿望湖樓再和……………五三六  
 夜泛西湖五絕……………五三七

答任師中次韻……………五四六



沈諫議召遊湖不赴明日得雙蓮於北山下……………五七七  
 和歐陽少師會老堂次韻……………五九八  
 題永叔會老堂……………五五一  
 和歐陽少師寄趙少師次韻……………五五二  
 監試呈諸試官……………五五四  
 望海樓晚景五絕……………五六一  
 試院煎茶……………五五四  
 孫莘老求墨妙亭詩……………五五七  
 李公擇求黃鶴樓詩……………五七一  
 八月十日夜看月有懷子由并崔度賢良……………五七四  
 催試官考較戲作……………五七六  
 八月十七日復登望海樓自和前篇 五首……………五七九  
 秋 懷 二首……………五八三  
 哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻……………五八七  
 梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻……………五八九

和沈立之留別 二首……………五九〇  
 和陳述古拒霜花……………五九二  
 次韻孔文仲推官見贈……………五九三  
 朱壽昌郎中少不知母所在求之五十年……………五九七  
 湯村開運鹽河中督役……………六〇一  
 是日宿水陸寺寄北山清順僧 二首……………六〇四  
 鹽官部役戲呈同事兼寄述古……………六〇六  
 鹽官絕句 四首……………六〇八  
 南寺千佛閣……………六〇八  
 北寺悟空禪師塔……………六〇九  
 塔前古檜……………六一〇  
 僧爽白雞……………六一〇  
 六和寺沖師開山溪爲水軒……………六一一  
 冬至日獨遊吉祥寺……………六一二  
 後十餘日復至……………六一三

戲 贈……………六二四  
 和人求筆迹……………六二五  
 將之湖州戲贈莘老……………六二六  
 鴉種麥行……………六二八  
 送張軒民寺丞赴省試……………六三〇  
 和致仕張郎中春晝……………六三二  
 再用前韻寄莘老……………六三四  
 畫魚歌……………六三六  
 吳中田婦歎……………六三八

卷 九

古今體詩

元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作……………六三七  
 正月九日有美堂飲醉歸徑睡……………六五九  
 次韻答章傳道見贈……………六六一

和邵同年戲贈賈收秀才 三首……………六三一  
 遊道場山何山……………六三六  
 贈孫莘老七絕……………六三九  
 莘老葺天慶觀小園有亭北向……………六四四  
 至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老……………六四六  
 秀州報本禪院鄉僧文長老方丈……………六四九  
 王復秀才所居雙檜 二首……………六五一  
 宋叔達家聽琵琶……………六五四  
 法惠寺橫翠閣……………六六七  
 祥符寺九曲觀燈……………六七〇  
 上元過祥符僧可久房蕭然無燈火……………六七一



正月二十一日病後述古邀往城外尋春……七三三  
 有以官法酒見餉者……六七四  
 飲湖上初晴後雨 二首……六七六  
 往富陽新城李節推先行……六七八  
 風水洞二首和李節推……六八一  
 獨遊富陽普照寺……六八四  
 自普照遊二庵……六八五  
 富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎 二首……六八七  
 新城道中 二首……六九〇  
 山邨五絕……六九二  
 癸丑春分後雪……六九七  
 湖上夜歸……六九八  
 曾元恕游龍山呂穆仲不至……七〇一  
 寒食未明至湖上太守未來兩縣令先在……七〇二  
 次韻孫莘老見贈時莘老移廬州因以別之……七〇四

贈別……七〇六  
 次韻代留別……七〇七  
 月兔茶……七〇八  
 薄命佳人……七〇九  
 吉祥寺花將落而述古不至……七一  
 述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦……七一  
 李鈐轄坐上分題戴花……七二  
 於潛令刁同年野翁亭……七四  
 於潛女……七四  
 自昌化雙谿館下步尋溪源 二首……七六  
 於潛僧綠筠軒……七二  
 與臨安令宗人同年劇飲……七四  
 寶山晝睡……七五  
 僧清順新作垂雲亭……七六  
 五月十日與呂仲甫等同泛湖游北山……七九

會客有美堂周邠長官與數僧同泛湖 二首……七三一  
 席上代人贈別 三首……七三五  
 留題徐氏花園 二首……七三六  
 唐道人言天目山上俯視雷雨……七三九

追和子由去歲試舉人洛下所寄 五首……七四〇  
 過廣愛寺見三學演師 三首……七四五  
 韓子華石淙莊……七四八



## 蘇東坡詩集總說

唐賢の詩は、率ね溫柔敦厚であつて、所謂古詩三百篇の遺意が存して居る。降つて唐季五代になると、詩風が纖佻薄弱に流れた。宋興つて詩壇に西崑體（略して崑體ともいふ。）が行はる。西崑體といふのは、楊億、劉筠、錢惟演の徒が、唐の李商隱の詩に倣つて、故事を用ひ、専ら鮮麗ならんことを力めたもので、其の弊は、ただ好看な文字のみを剪裁して、商隱に擬し得たりと爲すに至つたのである。嗣いで蘇舜欽は、豪放を以て自ら異にし、筆を下すこと縦横である。梅堯臣は、高淡を以て宗となし、思を運らすことが精微である。何れも新意を出して一時に振ひ、相共に崑體一派の詩弊を矯めやうとしたが、惜しいかな、其の方足らざるの憾があつた。

蘇東坡出づるに及んで、其の天才の宏放なる、其の學問の淵博なる、其の識見の高絶なる、波瀾を巻いて小詩に入れ、一世を風靡した觀がある。東坡の詩壇に於ける地位は、獨、當時の第一人者たるのみならず、有宋三百年、其の右に出づるものを見ない。其門人黃庭堅、秦觀、秦觀、陳師道の徒、東西に木鐸し、宋の詩風がここに一變した。

宋人の詩に於ける縦横自在、意の到る所、筆隨ふの一境を拓いて、其の用墨を新にしたが、東坡の詩は、其の最も至れるものである。東坡の文章は、縦横意の如くに運んで、筆端の到る所、自ら天下



の至文を成すといはれて居るが、其の詩も亦、飄逸清廓である。天分が既に古今得易からざる奇才である上に、其の身世も亦波瀾の盡くるなきに遭つた。幽囚の苦、遷謫の厄、驚くべきもの、哀しむべきもの、怒罵すべきもの、冷笑すべきものがあると共に、江山風月、塵埃の外に逍遙し、忽にして莊語、忽にして諧謔、議論となり、譬喩となり、直敘し、側寫し、行く雲の如く、流るる水の如く、千言萬語、實に天下の偉觀である。

東坡の詩、既に飄逸清廓である。詩は飄逸清廓でなければ、韻が高くない。東坡の波瀾多き生涯を通じての豊功偉節は、其の忠厚正大の意が外に發したものである。詩に忠厚正大の意がなければ、風雅の旨でない。東坡の卓然として一家を成し、有宋に冠絶せる所以のもの、決して偶然でない。唐宋詩醇に、

軾の器識學問は、政事に見られ、文章に發す。史に稱す、言は以て其の猷あるを達するに足り、行は以て其の爲すあるを遂ぐるに足り、節義は以て其の守あるを固むるに足る。皆、志と氣と之を爲すなり、惟詩も亦然り、地負海涵、一體を名けずして、其の旨要の在る所を核ぬ。我詩雖云、拙、心平聲韻和といへるが如きは、此れ軾が自ら其詩を評せるものなり。作詩熟讀毛詩・國風・離騷、曲折盡在是とは、此れ軾が自ら其の人を教ふる所以を謂へるものなり。

且夫れ精深華妙とは、則ち蘇轍之を稱せるなり。公如三大國楚、吞五湖三江とは、則ち黃庭堅之を稱せるなり。天才宏放、宜與日月爭光とは、則ち蔡條(字は約之、百衲居士と號す)之を稱

せるなり。屈注天潢、倒連滄海、變眩奇怪、終歸渾雅とは、敖陶孫(字は器之、曜庵と號す)之を稱せるなり。之を前にしては、曹劉陶謝、之を後にしては、李杜韓白、學ばざる所なし。亦、工ならざる所なし。同時の歐陽王黃、猶ほ俱に遜謝す。洵なるかな、千古に獨立して、一代一人の詩にあらざるなり、

と。清の趙雲松が東坡の詩を評する二三の例をいふと、坡詩の人に絶する處は、議論英爽、筆鋒精銳にして、重きを擧ぐることに輕きが若きに在り。之を讀むに、甚しくは力を用ひざるに似て、而も力は已に十分に透る。此れ天才なり。坡詩は鍛鍊を以て工となさず。其の妙處は、心地空明、自然に流出し、一に全く力を著げざるに似て、而して自然に心脾に沁入するに在り。此れ其の獨絶なり。

坡公は莊・列諸子及び漢・魏・晉・唐諸史に熟す。故に遇ふ所に隨つて、輒ち典故あり、以て其の援引に供ふ。此れ臨時檢書者の能く辨する所にあらざるなり。詩人、成語佳對に遇へば、必ず肯て放過せず。坡公は尤も剪裁に妙なり。工巧と雖も、而も纖佻に落ちず。其の才分の大なるに由るなり。

東坡は大氣旋轉、句法字法の中に層層たらずと雖、而も筆力の到る所、自ら創格を成す。心地空明、自然に流出すといひ、自然に心脾に沁入すといふのは、よく坡詩の特長を説いて居る。沈德潛も評して、



蘇子瞻は胸に洪爐あり、金銀鉛錫、皆鎔鑄に歸す。其筆の超曠、天馬の羈を脱するに等しく、飛遷遊戯、窮極變幻、而して意中の出さんと欲する所に適如たり。韓文公の後、又一境界を開闢せり、と。坡詩は長篇短章、筆が暢びて心持がよい。筆勢の赴く處は、まことに大空を破つて來た天馬の羈細すべからざるが如きものがある。而して其の比喩に工なる、たとひ陳腐の言でも、一たび坡公の洪爐に入れば、忽ち清新の文字と化し去る。

褰衣步月踏花影。烟如流水涵青蘋。

我行西北隅。如渡二月半弓。

永嘯來天風。千山動鱗甲。萬谷酣笙鐘。

風過如呼吸。雲生似吐含。

夢雲忽變色。笑電亦改容。

青山偃蹇如高人。常時不肯入官府。

治生不復求富。讀書不求官。譬如飲不醉。陶然有餘歡。

欲知垂盡歲。有似赴壑蛇。修鱗半已沒。去意誰能遮。

一方漫到坡詩を評論した人の中で、張舜民の如きは、

仔細檢點不無利鈍。

と言ひ、楊時も、風雅の意を知らないと言つた。即ち龜山語録に、

文を爲る、溫柔敦厚の氣あるを要す。人主に對する語言及び章疏は、文字溫柔敦厚、尤も無かるべからず。子瞻が詩の如きは、譏玩する所多くして、殊に惻怛君を愛するの意なし。

凡そ詩は必ず之を言ふものは罪なく、之を聞くものは、以て戒しむるに足らしむ。此れ諷諫を尙ぶ所以なり。東坡の詩の如きは、則ち之を言つて安んぞ罪なきを得ん。而して之を聞いて、豈以て戒しむるに足らんや、

とある。恐らくは皆、篤論ではなからう。

東坡は既に譬喩に工である。又、能く諧謔嘲笑に長じ、幾んど一種の天才である。爲に語言を以て禍を買ひ、仕宦に浮沈した。又禪を好み、往往禪を借りて談話をなす。故に瀟洒の詩、雋逸の詩に富んで居る。

然れども坡老の本色は、窮通利達を見ること雲煙の如く、人生を渺視し、萬世を大觀する所に在る。

形骸一塵垢。貴賤兩草木。

我生涉世本爲口。一官久已輕尊鱸。

天倫の至情、亦、坡詩に於て之を見る。

百川日夜逝。物我相隨去。惟有宿昔志。依然守故處。

近別不改容。遠別涕霑胸。咫尺不相見。實與千里同。



人生無二離別。誰知二恩愛重。

與君今世爲二兄弟。又結來生未了因。

杜少陵を詩聖と稱する所以は、其詩の萬有を包涵して、神力が之に加はつて居るからである。併し、其の沈痛悲壯の辭は、時艱に遭遇し、道塗に倥傯し、皇皇として席の暖まるに暇がなかつた爲であらう。故に其の詩は、益々苦んで益々工となつたものである。

東坡も亦然りて、其の沈鬱豪邁の音は、皆、窮蹇艱難の際に發したものである。東坡の詩に於ける才力は、決して少陵に減じない。故に窮して益々巧みとなる。鳳翔に筮仕してより、語言を以て禍を買ひ、仕途に浮沈があつて、風霜塵土の中に顛躓した。かくて開封府の推官を以て杭州に通判となり、而して密州、而して徐州、而して湖州、而して黄州、而して登州、潁州、揚州、定州、惠州、儋州と轉轉したのである。其の間、再び朝命を被り、殿廷に召されたが、其多くは外に出でて不遇の境に在つた。是が其の詩の神境に進んで、其詩をして不朽ならしめた所以である。少陵と東坡とは、世を異にして頽頽する兩詩聖である。

宋詩が行はれて、東坡の詩が尤も盛に誦誦された。併し、坡詩は、以て唐詩となすべきものである。ただ唐詩を學ぶものは、白雲萬里、關山明月、其の字を陳腐にし、風調を以て格を立てる嫌がある。宋詩を學ぶものは、鶴閣虬戶、篠簜魄戶、強ひて其の語を新奇にし、雕刻を以て致を取る弊がある。皆、眞の唐詩、眞の宋詩ではない。鶴閣虬戶といふのは、昔、徐彥伯が文を爲るに、多く新を求め、

鳳閣を鶴閣となし、龍門を虬戶となした所から起つたさうである。坡詩を讀むもの、李杜の詩と合せて之を讀み、其の菁を括み其の華を抜いて、誦誦し、世の唐詩を學ぶもの、宋詩を學ぶものの弊風を一掃せば、ここに眞詩を得るに庶いであらう。

其の詩を頌し、其の書を讀み、其の人を知らずして可ならんやであるから、宋史に據りて東坡の傳を敘べる。

蘇軾、字は子瞻、眉山(今の四川眉州)の人。(老蘇の長子、進士の第に中り、再び制科優等に中る。仁宗・英宗・神宗・哲宗に事へて、官は禮部尚書、兼端明殿、翰林侍讀の二學士に至る。)幼にして穎悟、見識があつた。冠する比、博く經史に通じ、賈誼・陸贄・莊子等の書を好む。仁宗の嘉祐二年(皇紀一七二七年、西曆一〇五七年)禮部に試せられたが、試官歐陽修は之を第二に賞いた。復、春秋を以て對策し、第一に居る。殿試には、乙科に中つた。後、書を以て歐陽修に見ゆ。修は梅聖俞に語つて、

歐公、梅聖俞に與ふる語

老父當下避此人、出一頭地上。と言つた。五年、福昌主簿に調せらる。復、制策に對して三等に入る。宋より以來、制策三等に入るは、ただ吳育(卒して正肅と諡す、集五十卷あり。)と軾とあるのみ。大理評事簽書鳳翔府の判官に除せらる。英宗の治平二年(皇紀一七二五年、西曆一〇六五年)、入りて登聞鼓院に判となつた。



韓魏公、言を知る

英宗は、藩邸に在る比より其の名を聞き、唐の故事を以て、召し入れて翰林知制誥となさうとした。宰相韓琦曰く、

軾は遠大の器なり。他日、自ら當に天下の用を爲すべし。朝廷に在りて之を培養するを要す。今、驟に之を用ひなば、則ち天下の士は、未だ必しも以て然りとなさじ。適以て之を累はすに足る。と。且つ請うて軾を召し、試二論に及んだが、復、三等に入り、直史館を得た。軾は琦の前言を聞いて、

韓公は人を愛するに徳を以てす、

と喜んださうである。父の喪が除いたので、朝に還る。

適王安石政を執る。素より軾の己に異なるを惡み、以て官告院（宋史職官志に、官告院、主管官一員、掌三吏兵・勳封・官告云云）に判たらしめた。既にして、安石は科擧を變じて學校を興さうとした。兩制三館（史館・昭文館・集賢院を三館といふ。皆、崇文院に寓す）に詔があつて之を議せしむ。軾が議を上ると、神宗は即日召對された。軾曰く、

陛下天縱文武、明かならざるを患へず、勤めざるを患へず、斷せざるを患へず。但患ふる所は、治を求むる太だ急に、言を聽く太だ廣く、人を進むる太だ銳きことなり。願くは鎮むるに安靜を以てし、物の來るを待ちて、然して後、之に應じたまへ、と。帝は悚然として、

神宗を諫む

朕當に之を熟思すべし、

と宣ふ。安石はもとより悦ばない。命じて軾を開封府推官に權たらしめ、將に事を以て之を困しめやうとした。然るに、軾は決斷精敏であるから、聲聞がますます遠きに及んだ。安石が新法を創めると、軾は上書して之を論じた。軾は安石の帝を贊けるに獨斷を以てし、帝専ら之に信任したまふを見、開封府の試官と爲つたので、因りて進士を試するに、

策問

晉武の吳を平ぐるや、獨斷じて克ち、苻堅の晉を伐つや、獨斷じて亡ぶ。齊桓は、専ら管仲に任じて霸となり、燕噲は、専ら子之に任じて敗る。事同うして功異なる、

といふ策問を發した。安石はますます怒り、御史謝景溫（字は師直、王安石と善し）をして其の過を論奏せしめ、窮治して見たが、得る所がなかつた。

治河

軾は遂に外を請ひ、杭州に通判となり、徙つて密州に知となり、又、徐州に徙る。河水が曹村に決れて泛溢し、城下を漚り、漲ると思ふ間もなく洩れて、城が將に敗れやうとした。軾は武衛營に至り、卒長を呼んで、爲に力を盡くしたのである。卒長は、

太守も猶ほ塗潦を避けな。吾が儕小人は、當に命を效すべきである、と言つて、其の徒を率ゐる畚鍤（畚はモッコ、土を盛る器。鍤はスキ、土を起す農具）を持ちて出で、遂に東南に長堤を築いた。けれども雨が日夜止まないで、城が沈まないこと三版（高さ二尺を版となす）復、朝に請ひて故城を増築して、木岸を爲つた。水の再び至るを慮つて、其の備へをなし



室を築く

王安石を見る

たのである。徙つて湖州に知となる。  
御史李定・舒亶・何正言等は、軾の謝表の語を撫め、諷詩に託して訕謗をなすと媒蘖し、逮へて臺獄に赴かしめ、之を死に寘かうとした。

帝は、獨、之を憐みたまひ、黃州團練副使として其州に安置された。(黃州は今の湖北黃州府) 軾は幅巾芒屨、田父野老と谿谷の間に從ひ、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す。

帝、嘗て宰相王珪・蔡確に語り、蘇軾に命じて國史を成さしむ。珪に難色があつたので、帝は軾を不可といふのであれば、姑く曾鞏を用ひよと仰せられた。そこで鞏は太祖總論を進めたが、帝は意に允さなかつた。手札して軾を汝州に移す。軾は未だ汝に至らないで、上書して自ら言ふ、一家二十口、饑寒の憂迫る。常州に薄田あれば、之に居らんことを願ふと。

朝に奏して、夕には可を報せらる。道中、金陵を過り、王安石を見て、大兵大獄は、漢唐滅亡の兆なり。今、西方は連年兵を用ひ、東南は數大獄を起す。公、獨一言以て救ふなきか、

と言つた。安石曰く、  
二事は皆、惠卿が之を啓いたもの。安石は外に在り、何ぞ敢て言はん、  
と。又曰く、

人は須らく是れ一の不義を行ひ、一の不辜を殺して、天下を得るとも、爲さざるを知つて、乃ち

可なるべし、  
軾は戯れて、

今の君子は、半年の磨勘(宋の中世、磨勘院を置き、文武官吏の在職年限によりて、進級せしむることを掌る)を減ずるを争つて、人を殺すと雖、亦之を爲す、

と言つた。安石は笑つて言はない。  
哲宗立ちて、起居舍人(天子の言動を記すを掌る)に擢でらる。元祐元年(皇紀一七四六年、西曆一〇八六年)中書舍人に遷る。朝廷、范純仁の言を以て復、青苗(植附の時に農民に錢を貸して利息を取る)を散す。司馬光請うて抑配の禁を申嚴す。抑配といふのは、政府が利息を取る爲に、人民に金を貸し付け、又、人民にわりつけて金を出さしめ、或は夫役に從はしめることをいふ。軾は繳奏し、光は軾の議を是とし、對を請うて遂に止む。

初、祖宗差役を行ふ。差役とは、民家を九等に分ち、上の四等より公用の工夫を徵發し、下の五等は之を免除する課役の法である。然るに役に充つるもの、多く習はず。又、之を虐使して、終歲息むことを得ざるものもあつた。安石は改めて免役となし、戸は高下を差等し、錢を出して雇役せしむ。然るに法を行ふものが、過取して民病をなしたので、光は差役を復せんとした。軾曰く、差役・免役は、各利害がある、と。光曰く、君に於ては何如と。軾曰く、

法、相因らば、則ち事成り易く、事、漸あれば、則ち驚かず。三代の法は、兵農一たり。秦に至

差役、免役



り、始めて分れて二となる。唐の中葉に及び、府兵を變じて長征の卒となす。是より農は穀帛を出して、以て兵を養ひ、兵は性命を出して、以て農を衛る。聖人復起ると雖、易ふる能はざるなり。今、免役は實に大に此に類せり。公、驟に免役を罷め、差役を行はんと欲す。正に長征を罷め、民兵を復するが如し。蓋し未だ易からざるなり、

と。光は以て然りと云はない。軾又、政事堂で陳べると、光は忿然とした。軾曰く、昔、韓魏公、陝西の義勇を刺す。公、諫官となつて、争ふこと甚だ努め、韓公は樂しまない。公も亦顧みなかつた。豈、今日相となつて、軾の盡言を許さざるか、と。尋で翰林學士に除せられ、二年には、侍讀をも兼ねた。嘗て祖宗の寶訓を讀み、因りて時事に及ぶ。軾、歴言すらく、

今、賞罰明かならざれば、善惡勸沮する所なし。又、黄河の勢、方に北流し、而して之を彊ひて東せしめ、夏人入りて鎮戎に寇し、數萬人を殺掠せしも、帥臣掩蔽し、以て聞せず。每事此の如くんば、恐くは寢く衰亂の漸をなさん、

金蓮燭を徹して送る

と。軾嘗て禁中に鎖宿し、便殿に召對す。宣仁后(宣仁聖烈皇后、神宗の母)曰く、卿の官、遽に此に至るは、乃ち先帝の御意である。先帝、卿の文章を誦する毎に、必ず歎じて、奇才奇才と仰せられた。但、未だ卿を進用するに及ばなかつたまでである。軾は覺えず哭して聲を失した。宣仁后も哲宗も泣き、左右も皆感涕した。已にして坐を命じ茶を賜ふ。御前の金蓮燭(天子の御殿にと

杭を治む

もす燈)を徹し、送つて院に歸へらしむ。四年、軾は當軸のものに容れられないのを度り、遂に外を請ひ、龍圖閣學士に拜されて杭州に知となる。未だ行かざるに、諫官に論せられて嶺南に遷さる。軾、密に疏す、朝廷宜しく深く罪すべからず、仁政の累をなさんと。宣仁后は、心に其の言を善いとせられたが、用ひることは出来なかつた。既にして軾は杭に至る。大旱であつて、饑疫が竝に作る。軾は本路の上供米を減せんことを請ひ、又、價を減じて常平米(常平倉の米)を糶し、多く饘粥藥劑を作つたので、活きるものが多かつた。

蘇公堤

杭は本、江海の地、水泉が鹹苦で、居民は稀少。唐の刺史李泌、始て西湖の水を引いて、六井を作り、民、水に足る。白居易に及んで、又、西湖の淤水を浚ひて、漕河に入れ、河より田に溉ぐ千頃、民以て殷富であつた。湖水に葑が多いので、宋では廢てて治めなかつたが、葑積んで田となり、水が幾もなくなつた。漕河は湖水の利を失ひ、給を江湖に取る。六井も亦、幾んど廢した。軾は茅山の一河、専ら江湖を受け、鹽橋の一河、専ら湖水を受くるを見、遂に二河を浚つて、漕に通じた。後、堰牒を造つて、潮水蓄洩の限となし、餘力を以て復、六井を完うした。又、葑田を取つて湖中に積むこと、南北徑三十里、長堤を爲り、以て行く人を通せしめた。堤が成つて、芙蓉楊柳を其の上に植う。之を望むに畫圖のやうで、杭人は之を蘇公堤と名けた。浙江の潮は、海門より東來して、勢、雷霆の如くである。而して浮山が江中に峙ち、漁浦諸山と犬



牙の如く相交はり、洄洑激射し、年年公私の船を敗ることが計へきれない。軾は江の上流地、石門と名くる處より漕河を鑿ち、慈浦より北折し、小嶺に抵り、古河を浚ひて浮山の險を避けしめやうとした。

軾は復、言ふ、

三吳の水、濬して太湖の水となり、溢れて松江となり、以て海に入る。慶曆以來、松江に挽路を築いて扼塞す。故に今、三吳の水が多い。挽路を鑿ちて十橋となし、以て江勢を汎がんと欲す、と。俱に用ひるを果さないで、世人は以て恨となした。軾は再び杭に莅み、民に徳があつたので、家毎に畫像がある。飲食には必ず祝し、生祠を作つた。

六年召して吏部尙書となしたが、未だ至らず。弟轍を右丞に除し、翰林承旨に改む。數月、復、讒を以て外を請うたから、龍圖閣學士を以て潁州に知たり。七年には、揚州に徙る。未だ歳を閱しな

いに、召して兵部尙書兼侍讀となし、郊祀には鹵簿使たらしむ。皇后及び大長公主が犢車に乗り、儀仗を避けなかつたから、軾は之を劾奏した。駕が廻り、皇后に詔して迎調するなからしめた。禮部尙書に遷り、端明殿翰林侍讀兩學士を兼ね。高麗、使を遣はして書を請うたから、朝廷は故事を以て之を許した。軾曰く、

漢の東平王、諸子及び太史公に書を請ひしとき、猶ほ肯て予へなかつた。今、高麗の請ふ所、此

より甚しきあり。其れ予ふべけんや、と。それは聽かれなかつた。

八年、宣仁后が崩れて、哲宗、政を親らしたので、軾は外に補せんことを乞うた。兩學士を以て定州に知たらしむ。時に國事將に變せんとし、軾は入りて辭することが出來ないから、既に行いて上書した。定州の軍政は壞弛して居つたから、春に會して大に關す。軾、命じて舊典を擧げしに、帥は常服して張中を出で、將吏は戎服して事を執り、敢て慢するものもなかつた。定人は言ふ、韓琦より後、此禮を見ないで、今に至ると。

初、宣仁后在しし時、侍御史賈易・監察御史董敦逸・黃慶基等、先後して軾及び弟轍の作つた文詞が先朝を譏斥すと論ず。三人のもの皆、坐して黜けらる。紹聖(哲宗の年號)の初に及び、御史復言をなし、軾を謫して英州に知たらしむ。未だ至らずして寧遠軍節度副使に貶せられ、惠州に安置された。居ること三年、又、瓊州別駕に貶せられて、昌化に居る。昌化は故の儋耳の地で、人の居る所ではない。食飯具はらず、藥餌も得られない。

初、官屋を僦ふ、有司なほ不可といふ。軾は遂に地を買ひて室を築く。僧人は甍を運び、土を舂して之を助く。屋を爲る三間、人は其の憂に堪へない。軾は獨、幼子と菜を食ひ水を飲み、書を著はして樂んで居た。

徽宗の時、連に永州に徙り、三大赦を更て還る。玉局觀に提舉(管理)となり、朝奉郎に復す。

地を買ひて室を築く



軾は元祐より以來、未だ嘗て歲課を以て乞はない。故官を遷して此に止まる。未だ幾ならぬで、常州に卒す、年六十六。

軾、轍と文章を爲る、俱に其の父を師とする。弱冠、父子兄弟、京師に至る。一日にして聲名赫然として四方に動く。軾嘗て自ら謂ふ、

文を作る行  
雲流水の如し

文を作る、行雲流水の如し。初より定質なし、但、常に當に行くべき所に行き、止らざるべからざる所に止る。嬉笑怒罵の辭と雖、皆書して之を誦すべし、

と。其の體は、渾涵光芒、百代に雄視し、文章ありて以來、蓋し亦鮮い。洵は晩にして易傳を作り、未だ究めなかつたので、軾に命じて其の志を述べしめた。軾は易傳を成し、復、論語説を作る。後、海南に居つて書傳を作る。又、東坡集、奏議内外制、和陶詩等がある。一時の文人、黃庭堅、晁補之、秦觀、張耒、陳師道の如き、舉世未だ之を識らなかつたが、軾は之を待つこと朋儔の如く、未だ嘗て師資を以て自ら與へなかつた。舉子となつてから、侍從に出入するに至るまで、必ず君を愛するを以て本となして居る。挺挺たる大節は、毎に小人の爲に忌惡せらる。身後にも、猶ほ名を元祐黨に編せられ、文集の刊行するものを毀たる。

御製序を賜ふ

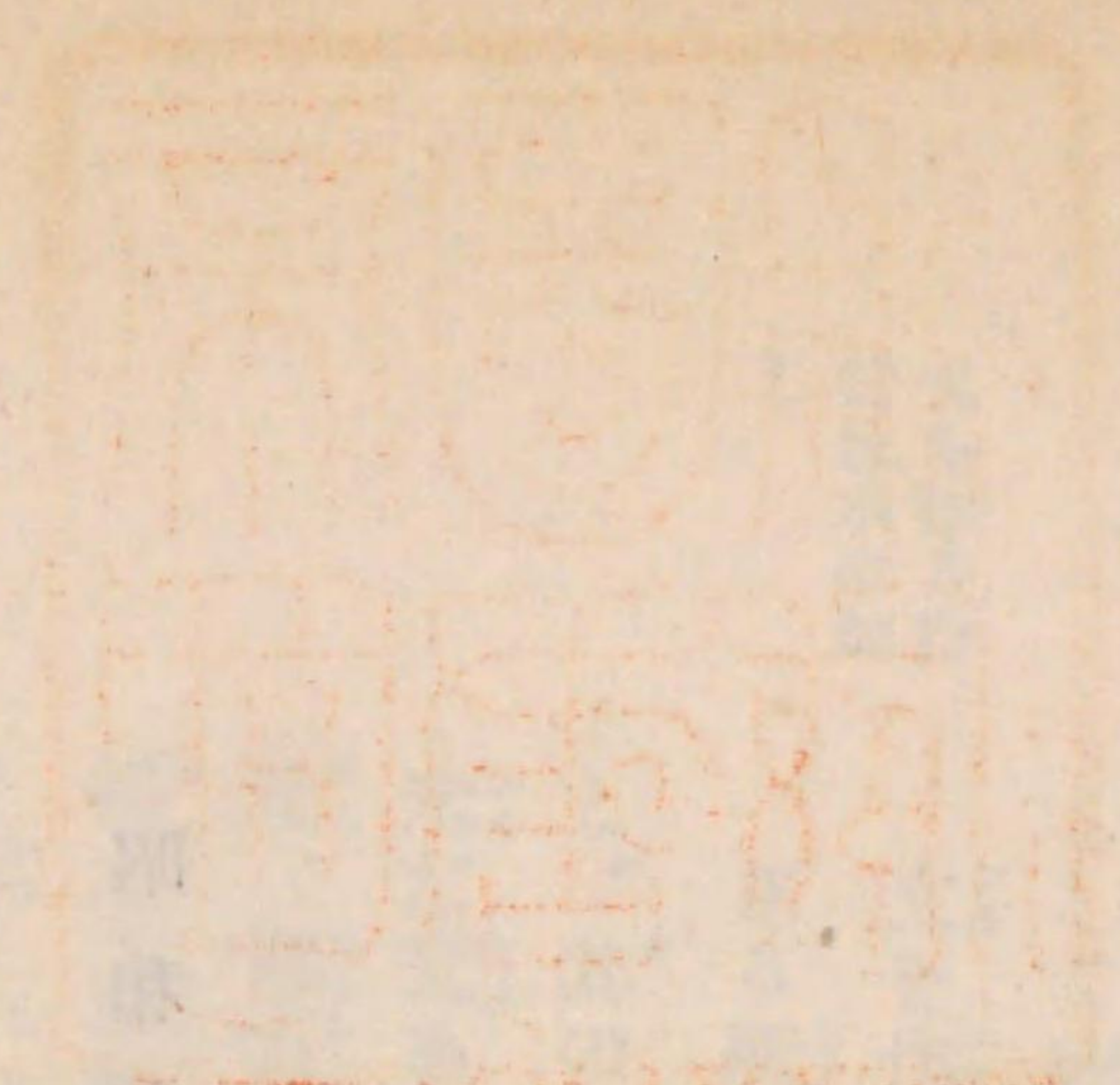
高宗即位し、資政殿學士を贈り、其の孫符を以て禮部尙書となし、又、其の文を左右に眞き、之を讀んで倦むことを忘る。親ら集の贊を製して、曾孫嶠に賜ひ、遂に太師を崇贈し、文忠と諡す。三子邁・迨・過、俱に善く文を爲る。

詩人は窮して益、巧なりとせば、坡公が窮、謫艱難の際に於ける吟咏は、其の順境の日に成つた諸篇に優ること萬萬であらう。坡公が生平の豊功亮節と、夫の兄弟朋友過從離合の跡及び一時新法の廢興、時事の變遷とは、悉く詩集に見はれて居る。而して其の正言讜議、時に合はなくても世に阿らず、禍を買つても權に諛びない、夷險一節といふ態度は、まことに士君子の儀表と仰ぐに足るものがある。坡詩を諷誦するもの、諷誦しないもの、共に之を思はなければならぬ。

昭和三年七月

岩 垂 憲 德 識

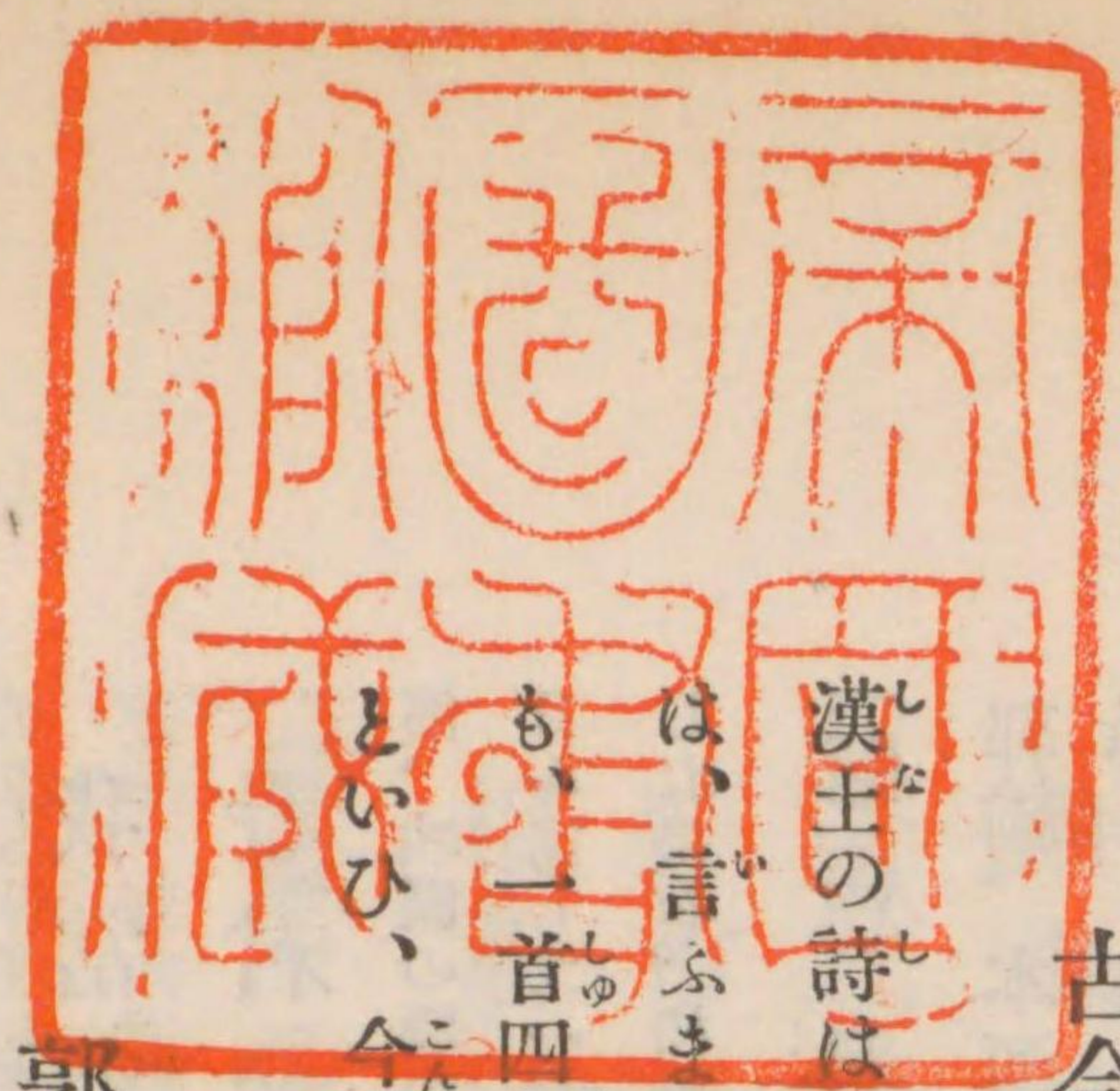




蘇東坡詩集 卷一

岩垂憲德譯解

古今體詩 四十二首



漢王の詩は、上古は概ね四言であつたが、中古は、五言若くは七言で、句に定つた數がない。五言とは、言ふまでもなく、五字一句のものをいひ、七言とは、七字一句のものをいふ。五言でも、七言でも、一首四句なるものを絶句といひ、八句なるものを律詩といふ。律詩や絶句は、之を今體又は近體といひ、今體に對して、字數や句法の定まらないのを古體、古詩、又は古風と稱する。

郭綸 郭綸

河西猛士無人識。  
日暮津亭閱過船。  
路人但覺驄馬瘦。

古今體詩 郭綸

【字解】  
【一】猛士 強く勇ましい士、史記高祖紀に、安得猛士守四方。  
【二】津亭 わたしは、津は行旅の往還の渡し場。亭は驛亭の意。陸上のうまつきに比していつたのである。  
【三】驄馬 青馬、後



不知鐵槩大如椽。 知らず鐵槩大さ椽の如きを。

因言西方久不戰。 因て言ふ西方久しく戦はず、

截髮願作萬騎先。 截髮願くは萬騎の先とならんと。

我當憑軾與寓目。 我當に軾に憑つて與に寓目すべく、

看君飛矢集蠻氍。 君が飛矢の蠻氍に集るを看む。

傳、城濮の戰の條に、君馮軾而觀之、得臣與寓目焉とある。君(晉侯を指す)は軾に憑つて見物され、拙者得臣に於ても相伴仕り、目を寓して一見物致したい。軾は車前の横木。車上に立つて、胸下に當るから、手を掛けるに便利である。【七】蠻氍 えびすで製した毛布。桂海虞衡志に、蠻氍出西南諸蕃。蠻人晝披夜臥、無貴賤一人有二氍。

【題義】郭綸の功あるも賞されず、憔悴して他郷にあるに同情して寄せた作である。東坡の自註に、郭綸、本河西弓箭手、屢戰有功不賞、自黎州都監、官滿貧不能歸、今權嘉州監稅とある。黎州は、今の四川清溪縣。都監、官名。宋は兵馬都監を置く。嘉州は、今の四川樂山縣。

【詩意】河西の勇士郭綸は、志を得ないで、一小官吏となつて、渡し場に、往來船を檢べて居る。(此の二句は、英雄の失路を寫し出したのである。)人はただ仕途に窮する彼を見て、其の武勇の彼を見ない。彼は言ふ、西方今や風雲惡し、(仁宗の康定元年九月、西賊入寇し、郭綸固守す)髪を斷つて信となし。萬騎の先驅をなさんと。我も兵車に上つて一見物仕らうぞ。そして君の飛ばした矢のえびす軍に達する御手竝を拜見致さう。

【餘論】五句の處、力が少いといふ批評もある。

初發嘉州

初めて嘉州を發す

朝發鼓闐闐、西風獵畫旂。

朝に發して鼓闐闐、西風畫旂を獵かす。

故鄉飄已遠、往意浩無邊。

故郷飄として已に遠く、往意浩として無邊。

錦水細不見、蠻江清可憐。

錦水は細にして見えず、蠻江は清うして憐むべし。

奔騰過佛脚、曠蕩造平川。

奔騰して佛脚を過ぎ、曠蕩して平川に造る。

野市有禪客、釣臺尋暮煙。

野市禪客あり、釣臺暮煙を尋ね、

相期定先到、久立水潺潺。

相期す定先づ到るを、久しく立つ水の潺潺たるに。

【字解】【一】闐闐 鼓の聲、詩、小雅に、伐鼓淵淵、振旅闐闐。【二】獵 震かす。【三】錦水 錦江、又、蜀江と名く。【四】蠻江 青衣江。【五】佛脚 開元中、僧海通は、石に鑿して彌勒大像を爲る。【六】曠蕩 ひろびろとした貌。【七】造 平川 造は進みいたる意。杜詩に、秦川對酒平如掌。【八】定 かならずと期する辭、杜詩に 定卜瀼西居とある。【九】潺潺 水の流れる貌。白居易の詩に、有石白磷磷、有水清潺潺とある。

【題義】仁宗の嘉祐四年(皇紀一七一九年、西曆一〇五九年)東坡は、弟子由と、父老泉に侍し、舟で楚に行く。此詩は其時の作。



【詩意】朝に四川の嘉州を出發したときは、太鼓の聲が闐闐と音たて、西風は燕の尾のやうな旗を動かした。故郷は遠く隔て、行く先は遙かである。蜀江の水も見えなくなり、(嘉州は成都を距る三百餘里、故にいふ。)蠻江の流れも面白く、奔流して佛脚の處を過ぎ、ひろびろと進んで平川に至る。禪僧が暮煙を罩める比、魚釣臺を尋ねて、到るといふ堅い約束をしたので、我は暫く水の潺湲と流れる處に佇んで居た。(問)我今何適、天台訪石橋の意である。自註に是日期郷僧宗一會別釣魚臺下)【餘論】氣韻洒脫、格律謹嚴、東坡の少年未縦筆時の作だと評されて居る。

健爲王氏書樓

健爲王氏の書樓

樹林幽翠滿山谷。  
樓觀突兀起江濱。  
云是昔人藏書處。  
磊落萬卷今生塵。  
江邊日出紅霧散。  
綺窗畫閣青氛氤。  
山猿悲嘯谷泉響。

樹林幽翠山谷に滿ち、  
樓觀突兀として江濱に起つ。  
云ふ是れ昔人藏書の處と、  
磊落萬卷今生塵を生ず。  
江邊日出でて紅霧散ず、  
綺窗畫閣青くして氛氤。  
山猿悲嘯し谷泉響く、

【字解】

【一】樓觀 高樓門觀、  
觀は遠方を望む意から起つたのである。  
【二】突兀 高くねきんで立つ、  
韓愈の詩に、突兀便高三百尺。  
【三】磊落 多い貌。後漢書に、連衡者、方印磊落。文心雕龍に、磊落如環玕之圃。  
【四】氛氤 氣の盛なる貌。白樂天の詩、桑麻青氛氤。  
【五】嘯 鳥の鳴く聲。  
【六】借問 試に問ふ意。  
【七】先登、斬級 敵の首を斬ること。樊噲傳に、先登斬首二十三級。  
【八】三墳 古書の名。

野鳥嘯巖花春。

野鳥嘯巖花の春。

借問主人今何在。

借問す主人は今何くに在る、

被甲遠戍長苦辛。

被甲遠く戍りて長く苦辛す。

先登搏戰事斬級。

先登搏戰斬級を事とす、

區區何者爲三墳。

區區何すれぞ三墳を爲むる。

書生古亦有戰陣。

書生古亦戰陣あり、

葛衣羽扇揮三軍。

葛衣羽扇三軍に揮ふ。

古人不見悲世俗。

古人は見ず世俗を悲しむを、

回首蒼山空白雲。

首を回せば蒼山空しく白雲。

【題義】

健爲郡にある王齊萬の書樓を詠じたのである。齊萬は蜀の人、時に武昌縣に寓居す、即ち書樓の主人である。

【詩意】

樹林や修竹が山谷に滿ち、奥深くて青い。(王昌齡の詩に、深篁引幽翠とあるも思ひ合さる。)高く聳える高樓門觀も江上に見える。ここに昔の人の文庫があつて、澤山な書物も塵に埋もれて居る。既にして江邊に朝日が上つて霧も消え、美しい窓や、畫いた閣は、如何にも心地よい。猿悲み、泉響いて、野鳥嘯づる谷間の花、書見には尤も適つて居る。試に問ふ、主人は今、何處に、それは武

其の内容は伏羲・神農・黃帝の書をいふとも、三王の書をいふとも諸説がある。【九】葛衣羽扇 諸葛武侯、獨乘素輿、葛巾毛扇、指揮三軍。



装して戦地に在り、先登や搏戦や斬級を事として居る。こせこせ古書と首引して居る時ではない。書生でも亦、戦陣に臨んで、葛衣羽扇で大軍に指揮すべきである。併し、古人は此の末世の悲しみを見ない。首を回せば、蒼山空しく白雲の棚曳くを見、浮世の塵が厭はれる。

過宜賓見夷牢亂山

宜賓を過ぎ夷牢の亂山を見る

江寒晴不知遠見山上日。

江寒うして晴るることを知らず、遠く見る山上の日。

朦朧含高峯。晃蕩射峭壁。

朦朧として高峯を含み、晃蕩として峭壁を射る。

横雲忽飄散。翠樹分歷歷。

横雲忽ち飄散す、翠樹分れて歷歷。

行人挹孤光。飛鳥投遠碧。

行人孤光を挹む、飛鳥遠碧に投ず。

蠻荒誰復愛。穠秀安可適。

蠻荒誰か復愛せん、穠秀安んぞ適くべけん。

豈無避世士。高隱鍊精魄。

豈世を避くるの士なからんや、高隱精魄を鍊る。

誰能從之遊。路有豺虎迹。

誰か能く之に従つて遊ばん、路に豺虎の迹あり。

【字解】

【一】夷牢 唐宋詩醇には夷中に作る。夷牢山は、戎州に在り、州内に四縣あり、宜賓は其の一である。(今、四川、永寧道に屬す)一説にいふ、夷牢とするは謬。  
【二】朦朧 おぼろなる貌、旭が高峯に含まれたさまをいふ。  
【三】晃蕩 光の定まらない貌、朝日の山上に見られたさまをいふ。  
【四】峭壁 斷崖。  
【五】歷歷 分明に見ゆる。  
【六】孤光 日光。  
【七】蠻荒 宜賓を指す。

【題義】

年譜を按ずるに、東坡は二十一で、進士に擧げられ、蜀から京師に入り、仁宗の嘉祐二年(皇紀一七二七年、西暦一〇五七年)禮部に赴き、進士に及第し、其の年の四月、成國太夫人(東坡の北堂)が亡くなつて、訃至る。東坡は服喪蜀に歸る。四年、東坡は年二十四、服を除き、冬、南の方楚に適く、此詩は其の時の作である。

【詩意】

四川の宜賓の地は、江水の邊にあるので、水蒸氣のために常に陰霾(つちぐもり)であつて、晴れるといふことを知らない。遠く見える山上の日も峯に含まれて、兎角おぼろがちである。併し、日が漸く上ると、光が斷崖を射る。かくて横雲も拂はれ、翠の樹も分明に見える。旅行く我は、ただ前進して恰も日光を挹むやうなさまであり、飛ぶ鳥も、高く遠く、青空に其の影を失つてしまふ。宜賓は、かかる穠秀として、こまやかに秀でたる絶勝の地であるが、蠻荒の地であるから、誰も行いて愛するやうなものはない。だが、景勝の山中のことであるから、世を避ける高隱の士があつて、觀法や養生などして、只管、精魂を鍊つて居るものがあるであらう。一體、誰が此の人に從つて遊ぶであらう。殊に此邊には恐ろしい豺や虎の足跡さへある。容易に往き從ふことが出来ようぞ。

【餘論】

起六句、寫景自好、結の處、字句勁健、極めて力がある言ひ表し方である。

夜泊牛口

夜牛口に泊す

日落江霧生。繫舟宿牛口。

日落ちて江霧生ず、舟を繫ぎ牛口に宿す。



居民偶相聚。三四依古柳。  
負薪出深谷。見客喜相售。  
煮蔬爲夜殮。安識肉與酒。  
朔風吹茅屋。破壁見星斗。  
兒女自咿嘍。亦足樂且久。  
人生本無事。苦爲世味誘。  
富貴耀吾前。貧賤獨難守。  
誰知深山子。甘與麋鹿友。  
置身落蠻荒。生意不自陋。  
今予獨何者。汲汲強奔走。

居民偶相聚。相聚まり、三四古柳に依る。  
薪を負うて深谷を出で、客を見て喜び相售る。  
蔬を煮て夜殮を爲す、安んぞ識らん肉と酒と。  
朔風茅屋を吹き、破壁星斗を見る。  
兒女自ら咿嘍、亦樂み且久しきに足る。  
人生本事無し、世味の爲に誘はるるを苦しむ。  
富貴吾前に耀く、貧賤獨守り難し。  
誰か知らん深山の子、麋鹿と與に友たるを甘んず。  
身を置きて蠻荒に落つ、生意自ら陋ならず。  
今予獨何する者ぞ、汲汲強ひて奔走す。

【字解】一 朔風 北風、朔は北方をいふ。二 咿嘍 啞者の辭定まらない貌。こゝは幼兒の聲を狀したもの、字面は、東方朔の傳に見ゆ。三 麋鹿 麋は馴鹿、鹿の大なるもの。

【題義】此詩も前の詩と同じやうに、仁宗の嘉祐四年、東坡が嘉州から宜賓を過ぎ、其の途中で、牛口に泊つた時の作である。

【詩意】日暮れて、霧が江上を籠めたので、舟を繋いで牛口村落に泊つた。たまたま村民三四人、古柳の下に相聚る。山の奥から薪木を負うて出て来たので、客を見て喜んで之を賣る。食事は野菜を煮て、夕食とする。肉も味はないし、酒も飲めない。(村民生活のさまが略々窺はれる。)家屋は茅葺で、烈しい北風に吹かれ、壁の破れから空の星が見える。併し兒女のなく聲は、楽しく聞えて居る。人生は、本來何事も無い。然るに世味とて、富貴の爲に誘はれ、汲汲として功名に奔走して居る。富貴が吾前に輝いて來れば、兎角、貧賤に安んじては居られないやうである。此村民、深山の子等は、これと異なる。身を蠻荒の地に落し居るも、其の生意は自然に陋くはない。我等は此村民にも劣つて居る。心が名利の爲に使はれて、わざわざ蜀の郷里を立ち出で、かかる淺ましいことに奔走して居るのは歎はしい。

【餘論】全篇を四段に分つて見ると、起十二句を一段とする。其の中、日落云の四句は、牛口村落をいひ、負薪云は、村民の生活を寫し、朔風云は、村民の屋内をいふ。人生四句を二段とする。誰知四句を三段とする、今予二句を四段とする。二段三段四段の十句は、東坡自ら感慨を興したものである。人生を達觀した處、僅僅二十四歳の青年の口占とは見えない。

牛口見月

牛口に月を見る

掩窗寂已睡。月脚垂孤光。

掩窗寂として已に睡る、月脚孤光を垂る。



披衣起周覽。飛露灑我裳。  
 山川同一色。浩若涉大荒。  
 幽懷耿不寐。四顧獨徬徨。  
 忽憶丙申年。京邑大雨霧。  
 蔡河中夜決。橫浸國南方。  
 車馬無復見。紛紛操棧郎。  
 新秋忽已晴。九陌尚汪洋。  
 龍津觀夜市。燈火亦煌煌。  
 新月皎如晝。疎星弄寒芒。  
 不知京國喧。謂是江湖鄉。  
 今來牛口渚。見月重淒涼。  
 却思舊遊處。滿陌沙塵黃。

衣を披て起つて周覽すれば、飛露我が裳に灑ぐ。  
 山川同一色、浩として大荒を渉るが若し。  
 幽懷耿として寐せず、四顧獨徬徨。  
 忽ち憶ふ丙申の年、京邑大に雨霧。  
 蔡河中夜に決し、國の南方に横浸す。  
 車馬復見るなく、紛紛たり操棧郎。  
 新秋忽ち已に晴れ、九陌尚ほ汪洋。  
 龍津に夜市を觀る、燈火亦煌煌たり。  
 新月皎として晝の如く、疎星寒芒を弄す。  
 知らず京國の喧しきを、謂ふ是れ江湖の郷。  
 今牛口渚に來る、月を見て重ねて淒涼。  
 却つて舊遊の處を思へば、滿陌沙塵黃なり。

【字解】 一 掩窗 閉ちた窗、掩は閉づる意。 二 月脚 月光の下射すること。 三 大荒 大空、韓愈の詩に、翩然下大荒。 四 幽懷云云 幽懷は幽襟といふに同じ。心の底に潛める思ひ。韓愈の詩に幽懷不可寫。耿不寐 耿は心の安んぜざる貌、詩、

却風柏舟に、耿耿不寐、如若有隱憂。 五 徬徨 彷徨と同じ、さまよふ。 六 丙申年 仁宗の嘉祐元年を指す。 七 霧 滂 都城の大道、楊巨源の詩に、九陌華軒爭道路。 八 操棧郎 水夫。棧は筏に同じ。大を棧といひ、小を桴といふ。 九 九陌 適の詩に、猶言日尙早、更向九龍津。 一〇 寒芒 さむげなる星の光、芒は光芒。晏子春秋に、變星有芒。 【題義】 仁宗の嘉祐元年（皇紀一七一六年、西曆一〇五六年）東坡、進士に擧げられ、扶風を過ぐ、明年、成國太夫人の憂に丁り、蜀に歸る。四年冬、老蘇公に侍して再び京に入る。此詩は其の時の作。 【詩意】 窗を閉ちて寂として已に眠に就いたが、月の光が牙えて居るので、衣を披て起つて見渡すと、夜露は落ちて我が裳を濡はす。山も川も一つ色に白く、大空を渉るやうである。心の底の思ひは、遣る瀬がなくて寐られない。あたりを見廻してさまよひ歩く。忽ち憶ひ出すのは、仁宗皇帝の嘉祐元年である。亡き母を追慕して堪へられない。又、あの年は、京邑に大雨があつて、蔡河は夜半に決れて、國都の南方に横浸した。地上は一面に河となつて、車も馬も見えなく、無數の筏が縦横するのみである。秋に入つて空も晴れたが、都の大路は、水が尙ほ退かない。水郷に夜店が開かれて、燈光は煌いて居る。新月は晝のやうに明るく、星は光を奪はれてまばらに寒げな色である。京師の喧しさを餘所にして、是れ江湖の郷といふ。（忽憶丙申年の句より此に至る、皆、京中の事を追憶する。）今、牛口渚に來つて、月を見て重ねてすさまじく感ぜらるる。却て舊遊の處を思ふと、滿都も沙塵で黄色になつて居る。

【餘論】 起八句佳佳、以下殊乏鎔鍊と評した人もある。



戎州

戎州

亂石圍古郡。市易帶羣蠻。  
瘦嶺春耕少。孤城夜漏間。  
往時邊有警。征馬去無還。  
自頃方從化。年來亦款關。  
頗能貪漢布。但未脫金環。  
何足爭強弱。吾民盡玉顏。

亂石古郡を圍み、市易羣蠻を帶ぶ。  
瘦嶺春耕少く、孤城夜漏の間。  
往時邊に警あり、征馬去つて還るなし。  
自頃方に化に従ふ、年來亦關を款き、  
頗る能く漢布を貪る、但未だ金環を脱せず。  
何ぞ強弱を争ふに足らん、吾が民は盡く玉顏。

【字解】

【一】戎州 今の四川敘州の地。【二】夜漏 漏は漏刻。【三】征馬 馬に乗つて旅する。江淹の別賦に、驅征馬而不可顧。【四】款關 關門を叩く。【五】漢布 布は錢のこと、分布流行の義から言つたのであらう。【六】金環 金の指環、こゝは耳飾。

【題義】

宋の政和四年に、戎州を改めて敘州とす。犍爲縣より敘州に至る百五十里。此詩は、其の風俗を述べたのである。

【詩意】

戎州の地は、四方亂石で圍まれ、其の民は羣蠻と市易して居る。瘦嶺のあたり、春耕するもの少く、孤城も夜半に聳えて居る。昔は國境も物騒で、征馬も還らないこともある。此頃は方に教化され、數年このかた、關門を叩いて交易を求め、頻に漢製の布を欲しがらる。併しまだ金の耳飾などに目を付けない。かかる蠻人と強弱を争ふべきではない。吾が中國の民は、ことごとく玉の如き顔である。

るぞ。(猿(西南の夷)人の瘠陋(容貌凶惡)に對して玉顏の二字を下したのである。)

舟中聽大人彈琴

舟中に大人の彈琴を聽く

彈琴江浦夜漏永。  
斂衽竊聽獨激昂。  
風松瀑布已清絕。  
更愛玉珮聲琅璫。  
自從鄭衛亂雅樂。  
古器殘缺世已忘。  
千年寥落獨琴在。  
有如老仙不死閔興亡。

世人不容獨反古。  
強以新曲求鏗鏘。

【字解】【一】大人 子、父を稱して大人といふ。始て家語に見ゆ。【二】激昂 ふるひ立ちて氣をばらる。獨激昂、或はいふ、三字、不似聽琴。且與下文不貫。古の秦聲、酒後耳熱歌呼するもの、即ち激昂。【三】琅璫 佩びた玉の聲。【四】鄭衛亂雅樂 鄭や衛の音聲は淫猥で、人の耳を悦ばしめ、正しい音樂を亂る。論語陽貨篇に、惡鄭聲之亂雅樂。【五】鏗鏘 琴の聲。禮記に、君子之聽レ音、非下聽其鏗鏘而已也。【六】笙簧 笙のふえの舌。【七】渺茫 ひろくばるか、韋莊の詩に、扶桑已在渺茫中。【八】夜闌 夜の半すぎ。【九】文王 文王操、琴曲の名。琴操に、紂爲無道、諸侯皆歸文王、



微音淡弄忽變轉。 微音淡く弄して忽ち變轉、

數聲浮脆如笙簧。 數聲浮脆如笙簧の如し。

無情枯木今尙爾。 無情の枯木今尙ほ爾り、

何況古意墮渺茫。 何況古意の渺茫に墮つるを。

江空月出人響絕。 江空しく月出でて人響絶え、

夜闌更請彈文王。 夜闌にして更に請うて文王を彈ず。

其後有二鳳凰一衛書於郊、文王乃作此歌。

【題義】此詩は、嘉祐四年の作、古樂知るべからずと雖も、古聲は終に變ずることが出来ない意。

【詩意】夜深けて、江浦に響く琴の音には、思はず袷を斂め耳を澄して、いたく感じた。音色は、風をうけたる松の聲、落ち下る瀑の音のやうで、清絶といふべきである。又、佩びた玉の聲の如き琴の音は、更に愛すべきである。一體、鄭衛の淫風が正樂を亂してから、古への樂器も殘缺して千年も久しく世に忘れられたのに、琴だけが昔ながらに行はれて居るのは、恰も年老いたる仙人が死なないで、世の興亡を閱するがやうである。世の人は古に反るを喜まない、強ひて新曲をなしては、古樂に代へる。微音は淡く傳へて忽ち變轉、聲は脆く流れて笙の笛の舌のやうに響く。無情の枯木朽株である琴でも、斯の如くである。何ぞ況んや古道の渺茫に墮ちるのを思ふときは、まことに感慨に堪へない。江空しく月出でて人聲も絶え、夜も半ば過ぎたが、更に請うて、一層高尚なる文王操の一曲を彈じてもらつた。

泊南井口期任遵聖長官到晚不及見復來

南井口に泊し、任遵聖長官に期し晚に到る、見るに及ばずして復來る

江上有微徑。深榛煙雨埋。 江上に微徑あり、深榛煙雨に埋む。

崎嶇欲取別。不見又重來。 崎嶇別を取らんと欲す、見ずして又重ねて來る。

下馬未及語。固已慰長懷。 馬を下りて未だ語るに及ばず、固より已に長懷を慰む。

江湖浩渺。安得與之偕。 江湖浩渺を渉る、安んぞ之と偕にするを得む。

【字解】一 任。任。字は遵聖、眉山の人、文學氣節を以て郷里に推重さる。累官、光祿大夫に至る。遵聖は曾て平原の令となる、故に長官といふ。或はいふ、平原當に平泉に作るべしと。二 深。深。深榛煙雨。韋應物の詩に、一郡荆榛寒雨中。三 崎。崎。山路のけはしきこと。四 欲。欲。取別。杜詩に、取別何草草。五 長懷。鮑照の詩に、長懷無終極。

【題義】宋は、南渡の後、江安縣の東北に、南井監を置く。東坡、南井口に泊したとき、任遵と面會を約して行違ひとなつたので此の作がある。

【詩意】江の畔に、草木や煙雨に埋れた小徑がある。路のけはしきをも厭はないで、行いて別を斂べようとしたが、逢へなかつた。又重ねて來り、馬を下りてまだ言葉を交へないが、思を晴らした。長官は遠く江湖を渉るので、何處までも伴ふ譯にはならない。名殘が惜まれるのである。



過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符云此山乃張道陵所寓 二首

安樂山を過ぎ、山上の木葉に文、道士の篆符の如きあるを聞く。云ふ、此山は乃ち張道陵の寓せし所と、二首あり

天師化去知何在。天師化し去る知る何在る、(在の字、疑ふ)

玉印相傳世共珍。玉印相傳へて世共に珍とす。

故國子孫今尙死。故國の子孫今尙ほ死す、

滿山秋葉豈能神。滿山秋葉豈能く神ならんや。

【字解】【一】安樂山 瀘州合江縣に在る。(今の四川永寧道内) 【二】玉印相傳 張真人、名は道陵、張良八世の孫。遺す所の符章印劍は、子孫世々之を守る。

【題義】葛洪の神仙傳に據るに、張道陵は、沛國の人。本、大學の書生で、博く五經に通じたが、歎じて曰く、此れ年命に益なしと、遂に長生の道を學んだ。蜀人教化し易く、蜀地に名山が多いと聞いて弟子と蜀に入る。後、天に沖して去るといひ傳ふ。

【詩意】張真人は化し去つて何處に在る。其の遺した玉印は、相傳へて珍として居る。不老不死の仙術を傳へた筈であるのに、故國の子孫は、神通を得ないで、今尙ほ死する。滿山の秋葉は、神力がない。

眞人已不死。外慕墮空虛。

眞人已に死せず、外慕空虛に墮つ。

猶餘好名意。滿樹寫天書。

猶ほ餘す好名の意、滿樹天書を寫す。

【字解】【一】眞人 莊子大宗師に、古之眞人不知死生、不知惡死。史記封禪書に、李少君病死、天子以爲化去不死。

【詩意】眞人は已に死なないが、外を慕うて虚空に墮ちた。猶ほ名を好むの心持があつて、滿樹に天書を寫して居る。(宋史に據るに、眞宗の大中祥符元年(皇紀一六六八年、西曆一〇〇八年)春正月、黃帛が承天門の南に曳く。有司以聞す。上、羣臣を召して朝元殿に拜迎し、天書と號したことが見え居る。)

渝州寄王道矩 渝州にて王道矩に寄す

曾聞五月到渝州。曾て聞く五月渝州に到る、

水拍長亭砌下流。水は長亭を拍つて砌下に流ると。

唯有夢魂長繚繞。惟夢魂の長く繚繞たるあり、

共論唐史更綢繆。共に唐史を論じて更に綢繆。

舟經故國歲時改。舟は故國を経て歲時改まり、

霜落寒江波浪收。霜は寒江に落ちて波浪收まる。

【字解】【一】渝州 今の四川巴縣治。【二】王道矩 青神の人。青神は今の四川建昌道。【三】長亭 十里一長亭、五里一短亭。亭は驛亭。【四】砌 階下の登。【五】繚繞 まつぱりめぐる。【六】綢繆 もつれあふ、詩唐風に、綢繆束新。【七】更籌 夜の時を計る器、庚肩吾の詩に、燒香知夜漏、刻燭驗更籌。



歸夢不成冬夜永。歸夢成らずして冬夜永く、  
厭聞船上報更籌。厭ひ聞く船上更籌を報ず。

【題義】渝州は、渝水に因つて名く。吳船錄に所謂恭州は即ち渝州。懷を王君に寄せた詩である。

【詩意】曾て五月の比、渝州に到ると、水は長亭を拍つて階下の砌を流れると聞く。ただ夢魂のみは長くまつはり繞り、共に唐史を論じては更に纏れあふ。今、船は故國を経て、四季改まり、霜は寒江に下りて波も起たない。ながながしい冬の夜、歸夢も成らないをりには、船上の時を報らせる時計の音まで氣になつて堪まらない。

入峽

峽に入る

自昔懷幽賞。今茲得縱探。

昔より幽賞を懷ひ、今茲縦に探るを得。

長江連楚蜀。萬派瀉東南。

長江、楚蜀に連り、萬派東南に瀉ぐ。

合水來如電。黔波綠似藍。

合水來つて電の如く、黔波綠にして藍に似たり。

餘流細不數。遠勢競相參。

餘流細にして數へられず、遠勢競うて相參る。

入峽初無路。連山忽似龕。

峽に入れば初路なく、連山忽ち龕に似たり。

縈紆收浩渺。蹙縮作淵潭。

縈紆して浩渺を收め、蹙縮して淵潭をなす。

風過如呼吸。雲生似吐含。

風過ぎて呼吸するが如く、雲生じて吐含するに似たり。

墜崖鳴窸窣。垂蔓綠氍毹。

崖より墜ちて鳴いて窸窣、蔓を垂れて綠氍毹。

冷翠多崖竹。孤生有石楠。

冷翠崖竹多く、孤生石楠あり。

飛泉飄亂雪。怪石走驚驂。

飛泉亂雪を飄へし、怪石驚驂を走らす。

絕澗知深淺。樵童忽兩三。

絶澗深淺を知り、樵童忽ち兩三。

人煙偶逢郭。沙岸可乘籃。

人煙偶々郭に逢ふ、沙岸籃に乗すべし。

野戍荒州縣。邦君古子男。

野戍州縣荒れ、邦君は古の子男。

放衙鳴晚鼓。留客薦霜柑。

衙を放つて晚鼓を鳴らし、客を留めて霜柑を薦む。

聞道黃精草。叢生綠玉蓂。

聞道く黃精草、叢生す綠玉蓂に、

盡應充食飲。不見有彭聃。

盡く應に食飲に充つべきも、彭聃あるを見ず。

氣候冬猶煖。星河夜半涵。

氣候冬猶ほ煖に、星河夜半ば涵す。

遺民悲昶衍。舊俗接魚蠶。

遺民昶衍を悲しみ、舊俗魚蠶を接ふ。

板屋漫無瓦。巖居窄似菴。

板屋漫にして瓦なく、巖居窄くして菴に似たり。

伐薪常冒險。得米不盈甌。

薪を伐りて常に險を冒し、米を得て甌に盈たず。



歎息生何陋。劬勞不自慚。  
 葉舟輕遠泝。大浪固嘗諳。  
 矍鑠空相視。嘔啞莫與談。  
 蠻荒安可住。幽邃信難耽。  
 獨愛孤棲鶴。高超百尺嵐。  
 橫飛應自得。遠颺似無貪。  
 振翮游霄漢。無心顧雀鷄。  
 塵勞世方病。局促我何堪。  
 盡解林泉好。多爲富貴酣。  
 試看飛鳥樂。高遁此心甘。

歎息す生何ぞ陋く、劬勞自ら慚ぢざるを。  
 葉舟輕うして遠く泝る、大浪固より嘗て諳んず。  
 矍鑠空しく相視て、嘔啞與に談ずることなげん。  
 蠻荒安んぞ住まるべけん、幽邃信に耽み難し。  
 獨愛す孤棲の鶴、高く百尺の嵐に超え、  
 橫飛應に自得すべく、遠く颺りて貪ることなきに似て、  
 翮を振ひて霄漢に遊び、雀鷄を顧るに心なきを。  
 塵勞世方に病む、局促我何ぞ堪へん。  
 盡く林泉の好きを解するも、多くは富貴の酣を爲す。  
 試に看よ飛鳥の樂、高く遁れて此心甘んずるを。

【字解】 一 峽 山陷して水を夾むを峽といふ。 二 幽賞 しづかにほめ味ふ、李白の春夜宴桃李園序に、幽賞未已、高談轉清。一本に清賞に作る。 三 合水來如電 李白の望瀑布水詩に、歎如飛電來。 四 點波 黔水をいふ。 五 蠶寺の塔。 六 綵紵 めぐりまつける、班固西都賦に歩道以綵紵。 七 風過如呼吸 莊子刻意篇に、吹呼吸吐故納新。 八 率率 安からざる聲の形容。 九 斲斲 樹の枝などの細長く垂れる貌。 一〇 石楠 酉陽雜俎に、石楠花有紫碧白三色、大如牡丹。 一一 邦君古子男 荆楚及び夔子は、皆古の子男の國。 一二 開道 開説と同じ、きくならくと訓む、きくなるの延言。

【三】 黃精 卽ち青精飯、之を食すれば、年を延ぶ。 【四】 玉參 梁簡文帝の詩に、斜柯挿玉簪、簪は參と同じ。 【五】 彭聃 彭祖と老聃、共に長壽。 【六】 昶衍 孟昶と王衍、東坡の自註に、孟昶從此入觀、王衍亦蜀主。 【七】 魚蠶 李白の詩に、蠶叢及魚鳧、開國何茫然。魚鳧蠶叢の先祖は蜀主である。 【八】 願 小嬰。 【九】 劬勞 骨折りて病む。詩小雅、蓼莪に哀哀父母、生我劬勞。 【一〇】 矍鑠 老いて勇健なること、後漢書馬援傳に、矍鑠哉此翁。 【一一】 嘔啞 小兒の語る聲。 【一二】 耽 般樂の意。 【一三】 鶴 アサナキ鳥、鳩の屬。 【一四】 翮 羽莖。 【一五】 鷄 音アン、鶴の屬。 【一六】 局促 器量の小さい貌、白居易の詩に、磊落常許君、局促應笑予。 【一七】 林泉 山林泉石。

【題義】 蜀江、百川を會して直下すること千里、峽をなす所三處、之を三峽といふ、卽ち西陵峽・歸鄉峽・巫峽である。

【詩意】 余は昔から靜に山水を清賞したいと懷つて居たが、今年、十分に探ることが出来た。大江は源を蜀の岷山から發し、東、漢口と合し、萬派争ひ流れて東南に瀉いで居る。江水は又、東北して巴郡に至る。合水は浴浴として、飛電の來るかと思はれる。黔水の波は縁で藍に似、餘流は數へられない。其の遠い流は競うて相參はる。峽に入れば初は路がなく、兩岸の連山は、佛龕のやうである。流は、めぐりまつて水の浩渺を收め、蹙まつて淵となり潭となる。風の行くは、呼吸するやうであり、雲は吐いたり含んだりする。崖より墜ちて悲鳴をあげることもある。細長く蔓草は垂れ、崖には青い竹が多く、石楠などもある。瀑の落ちるは亂雲のやうであり、怪石の立てるは馬の驚くやうである。深山の谷間にも、人の住むなるべく、樵の小供兩三見ゆ。山村の郭に逢うたのである。沙の岸は籃輿に乗ることも出来る。蜀より楚に至る、郡を過ぐる十一、縣は二十六。州縣も荒廢に歸した。楚



の地も夔の地も、古の子男の國であつた。役所も晩の鼓を鳴らし客を留めて蜜柑を饗應する。聞き及ぶ所では、黄精草、之を食へば、年を延ばすことが出来る。綠玉簪も同じ效能、之も叢生した。盡く食飲に充てても、古の彭祖や老聃のやうに長壽でない。氣候は冬なほ煖かに、天の河も夜半涵して居る。遺民は今尚ほ昔の孟昶や王衍を悲しむ。孟昶は此地から入觀し、王衍も蜀の君である。土地の習はしは、蜀の先祖と傳へて居る魚鳧氏や蠶叢氏を忘れない。板屋で死もなく、巖居は菴のやうである。險を冒して薪を伐り、米を得ても小甕には満たない。如何にも生活は陋く、勞作しても愧ぢない。一葉の舟に棹さして遠く浜る。大浪の打つは、固より諳んじて居る。老いて勇健なるも、與に談ずることが出来ない。かかる蠻荒の地には留まられないし、かかる里離れた處では樂しみを得られない。ただ愛することは、朝鳴き鳥の高く百尺の空に颺り、雲間に飛び遊び、雀や鶉を顧る心がないのである。浮世の塵にこせつくことは、どうしても堪へられない。皆人は山林泉石の樂を解するも、多くの場合、富貴の人の酣樂をなすに過ぎない。試に看よ、飛鳥の樂しく高く遁れて、此心の甘んじて居るのを。

【餘論】 長江の六句は總挈をなし、入峽の十二句は、峽中の景物をいひ、絶澗の十二句は峽中の人事をいひ、氣候の八句は、峽に居る人の勞をいひ、歎息の八句は、峽に入るの勞をいひ、獨愛以下十句の中、前六句は、孤鶻横飛自得の樂をいひ、後六句は、自己の局束塵勞の態を寫して居る。高超の樂を知れば、則ち高邁の甘きを知る。詩醇の評に、一篇章法明燿、如觀遠岫列秀青青とある。

江上看山

江上山を見る

船上看山如走馬。

船上山を看れば走馬の如く、

倏忽過去數百羣。

倏忽として過ぎ去る數百羣。

前山槎牙忽變態。

前山は槎牙として忽ち態を變じ、

後嶺雜沓如驚奔。

後嶺は雜沓して驚奔する如し。

仰看微逕斜繚繞。

仰いで微逕を看れば斜に繚繞し、

上有行人高縹緲。

上に行人あり高うして縹緲。

舟中舉手欲與言。

舟中手を舉げて與に言はんと欲すれば、

孤帆南去如飛鳥。

孤帆南に去つて飛鳥の如し。

【字解】(一) 倏忽 すみやか、

莊子應帝王篇に、南海之帝爲儻、北海之帝爲忽、儻は倏と同じ。(二)

槎牙 木の枝のかどち入りくむ。

(三) 雜沓 ことごとこみ合ふ、雜選と同じ。(四) 縹緲 まつぱりめぐる。(五) 縹緲 高く遠い、杜詩に山風吹游子縹緲。

【詩意】 船上から山を看ると、走馬のやうで、見る間に數百羣も過ぎ去る。前なる山は、木の枝のかどち入りくむやうであり、後なる嶺もごたごたこみ合ふ。仰いで山上の小徑を看ると、斜にまつぱりめぐり、上に行く人は高くして遙かである。舟中、手を舉げて、與に言はうとすれば、生憎や、孤帆は南を指して飛鳥の如くである。

【餘論】 此詩の起句は、杜少陵の隔河見胡騎、倏忽數百羣の二語を用ひて居り、結局は、獨孤及の



詩、風帆若鳥飛一から來る。

涪州得山胡次子由韻

涪州に山胡を得、子由の韻に次す

終日鎖筠籠。回頭惜翠茸。

終日筠籠に鎖され、頭を回して翠茸を惜む。

誰知聲嘯嘯。亦自意重重。

誰か知らん聲嘯嘯、亦自ら意重重。

夜宿煙生浦。朝鳴日上峯。

夜宿煙浦に生じ、朝鳴日峯に上る。

故巢何足戀。鷹隼豈能容。

故巢何ぞ戀ふに足らん、鷹隼豈能く容れんや。

【字解】一 涪州 古の巴國、漢の涪陵（今の重慶）。

二 筠籠 たけかご、杜甫の詩に、野人相贈滿筠籠。

三 翠茸 翠羽。禰衡の鸚鵡賦に、閉以雕籠、翦其翅羽。

四 嘯嘯 叫び呼ばはる。

五 重重 深く心に思ふ貌、隋の煬帝の詩に、遠意更重重。

【題義】舟が涪州を過ぎて得たのであるから、涪州得山胡と題したのである。山胡は、鸚鵡をいふ。東坡の自註に、善鳴出黔中一とあるが、涪州といふも、黔中といふも同じである。元和郡縣志に、巴之南鄙、秦黔中也。

【詩意】一日中、竹籠に閉ぢ込められ、美しい翠羽も、そこなはれるやうである。併し、呼び叫ぶ聲のうちにも、亦自ら深く心に思ふ所がある。煙が浦邊に生ずる比の夕暮となると、宿を求め、日が峯に上る朝は、聲朗らかに鳴く。故に巢など、決して戀しくはない。鷹や隼は、容れないのである。

留題仙都觀

仙都觀に留題す

山前江水流浩浩。

山前江水流れて浩浩、

山上蒼蒼松柏老。

山上蒼蒼として松柏老ゆ。

舟中行客去紛紛。

舟中行客去つて紛紛、

古今換易如秋草。

古今換易秋草の如し。

空山樓觀何崢嶸。

空山樓觀何ぞ崢嶸、

真人王遠陰長生。

真人王遠陰長生、

飛符御氣朝百靈。

符を飛ばし氣に御して百靈を朝す、

悟道不復誦黃庭。

悟道復黃庭を誦せず。

龍車虎駕來下迎。

龍車虎駕來りて下り迎ふ、

去如旋風搏紫清。

去ること旋風の紫清を搏つが如し。

真人厭世不回顧。

真人は世を厭ひて回顧せず、

世間生死如朝暮。

世間の生死朝暮の如し。

學仙度世豈無人。

仙を學び世を度る豈人なからんや、

【字解】一 仙都 鄧都縣平

都山に在り（今の四川東川道）

二 浩浩 屈原懷沙賦に、浩浩沅湘兮

分流汨兮とある。

三 崢嶸 山峻

しき貌。

四 王遠 列仙傳に、王

方平、名遠、知天下盛衰之期、九州吉

凶之事。

五 陰長生 新野人、漢

皇后之親屬、不好榮貴、後入青城

山中、白日昇天。

六 飛符 顧況

の詩に、飛符超羽翼。

七 黃庭

黃庭經、道家の書。

八 龍車虎駕

茅君傳に、斑龍輿素虎駟。列仙傳に、

寶子明釣得白龍、解放之三年、龍

來迎去。

九 紫清 李白の詩に

深宮高樓入紫清。張祐の笛詩に、紫

清人一管、吹在月堂中。

十 厭世 莊子天地篇に、千歲厭世去而上仙、

乘彼白雲、至於帝鄉。

十一 學仙 史記の封禪書に、黃帝且戰且學

仙。十二 餐霞絕粒 孫綽の游



餐霞絕粒長苦辛。

安得獨從逍遙君。

冷然乘風駕浮雲。

超世無有我獨存。

超世無有 晉書阮修傳に、超世高逝莫知其情。

霞を餐ひ粒を絶ち長く苦辛。

安んぞ獨逍遙君に從うて、

冷然風に乗りて浮雲に駕し、

超世無有我獨存することを得ん。

天台山一賦に、絶粒茹芝者云云。莊子逍遙遊篇に、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。【三】冷然乘風、冷然は飄然と同じ、輕妙の貌。莊子逍遙遊篇に、列子御風而行、冷然善也。【四】

【題義】東坡は英宗の治平三年（皇紀一七二六年、西曆一〇六六年）喪を載せて蜀に歸り、四年四月、家に到る。其の再び仙都觀を過ぎたのは、同じく四年のことである。仙都觀は唐の時代に建てたもので、宋には景德觀と改め、又、白鶴觀と名く。

【詩意】見渡せば、山前の江水は浩浩として流れ、山上の大きな松柏は青青として居る。併し舟中の旅客は紛紛として去つてしまひ、古今の移り行くも秋草のやうである。空山の樓觀は、高く聳えて居り、王方平だの陰長生などいふ真人は此山に在つて道を學び仙を得たものである。符を飛ばし氣に御して百靈を朝せしめる。大道を悟つて、また黃庭經など道家の書を誦しない。龍が下り迎へ、毎に之に乗つて往來する。其の去ることの速かなるは、旋風の天空を搏つがやうである。真人は人世を厭ひて回顧しない。人間の生死するは、朝暮の代謝するやうに思つて居る。仙術を學び、人世を渡らうと欲する我は、霞を餐ひ、粒食を絶ちて長く苦辛する。どうか、飄然として風に御し、雲に駕し、絶對的廣漠の世界に逍遙したいものである。

仙都山鹿

日月何促促。

塵世苦局束。

仙子去無蹤。

故山遺白鹿。

仙人已去鹿無家。

孤棲悵望層城霞。

至今聞有遊洞客。

夜來江市叫平沙。

長松千樹風蕭瑟。

仙宮去人無咫尺。

夜鳴白鹿安在哉。

仙都の山鹿

日月何ぞ促促、

塵世局束を苦しむ。

仙子去つて蹤なく、

故山白鹿を遺す。

仙人已に去つて鹿に家なく、

孤棲悵望す層城の霞。

今に至り遊洞の客あるを聞く、

夜江市に來り平沙に叫ぶ。

長松千樹風蕭瑟、

仙宮人を去つて咫尺なし。

夜鳴の白鹿安くにあるや、

【字解】【一】促促、あくせくする、魏文帝の着舒詠に、促促百年。

【二】白鹿、任昉の述異記に、鹿千年化蒼、又五百年化為白。明皇別錄に、芙蓉園得一白鹿、山人王旻曰、此漢時鹿也。果於三角際雪毛中得一銅牌、刻曰宜春苑中白鹿、上目之曰仙客、命國人善蓄之。

【三】悵望、なげきのぞむ。

【四】層城霞、孫綽の遊天台山賦に、荷台嶺之可攀、亦何羨於層城。また、赤城霞起而建標。

【五】蕭瑟、ものさびしき貌。宋玉の賦に、秋之爲氣也蕭瑟兮、草木搖落而變衰。

【六】行迹、韋應物の詩に、落葉滿空山、何處尋行迹。



滿山秋草無行迹

滿山の秋草行迹なし。

【題義】老泉の詩敘によると、鄂都縣に至り、將に仙都觀に遊ばんとし、知縣李長官を見る。云、固より君の將に至らんとするを知る。それは此山に老鹿があるが、猛獸も獵人も、之をどうすることも出来ない。客が來遊すると、鹿が輒ち夜鳴く、常に此を以て、之を候して、未だ嘗て失敗がなかつたと。此異聞によつて東坡も此詩を作つたのである。

【詩意】日月何ぞ促促として過ぎ行く。浮世の塵に局束されるのが嫌である。仙人去つて其の友として居つた白鹿だけが山に遺つて居る。仙人が居ないと、鹿に家がない。孤で層城の霞を望んで懐いて居る。今でも遊洞の客があると、鹿は鳴いて江市にも平沙にも聞える。長松千樹、風もものさびしく、仙人の家には人も居ない。さて夜鳴いた白鹿は何處にある。滿山これ秋草で尋ぬるに由がない。

江上值雪效歐陽體限不以鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞之類爲比仍不使皓白潔素等字次子由韻

江上雪に値ひ、歐陽の體に效ひ、限るに鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞の類を以て比をなさず、仍ほ皓白潔素等の字を使はず、子由の韻に次す

縮頸夜眠如凍龜

頸を縮めて夜眠る凍龜の如く、

【字解】一縮頸 史記龜策

傳に、神龜縮頸而卻。浩無際。列子力命篇に、竊然無際。

雪來惟有客先知。江邊曉起皓無際。樹杪風多寒更吹。青山有似少年子。一夕變盡滄浪髭。方知陽氣在流水。沙上盈尺江無漸。隨風顛倒紛不擇。下滿坑谷高陵危。江空野闊落不見。入戶但覺輕絲絲。沾裳細看若刻鏤。豈有一一天工爲。霍然一揮徧九野。

雪來つて惟客の先づ知るあり。江邊曉に起れば浩として際なく、樹杪風多くして寒更に吹く。青山は少年子に似たるあり、一夕變じ盡す滄浪の髭。方に知る陽氣流水に在り、沙上尺に盈ち江漸くるなし。風に隨つて顛倒紛として擇ばず、下坑谷に満ちて高陵危し。江空しく野闊く落ちて見えず、戸に入りて但覺ゆ輕く絲絲。裳を沾して細に看れば刻鏤の若く、豈一一天工の爲あらんや。霍然一揮九野に徧し、

古今體詩 江上值雪效歐陽體次子由韻

- 【一】滄浪 水色、陸機の詩に、垂影滄浪泉。
- 【二】盈尺 左傳隱公八年に、平地盈尺爲大雪。謝惠連の雪賦に、盈尺則呈瑞於豐年。後漢書王霸傳に、河水漸無船不可濟。
- 【三】若刻鏤 世説に、羣公對雪、尙隆之曰、麪推金井、誰調湯餅。吳永素曰、玉滿天山、難刻佩環。坐間服其韻精。
- 【四】霍然一揮 霍然は、にはかに消え失せる貌。司馬相如の大人賦に、霍然雲消。こゝは、にはかに雪をまき散らす意。
- 【五】九野 呂氏春秋に、天有九野。



吁此權柄誰執持。  
 世間苦樂知有幾。  
 今我幸免沾膚肌。  
 山夫只見壓樵擔。  
 豈知帶酒飄歌兒。  
 天王臨軒喜有麥。  
 宰相獻壽嘉及時。  
 凍吟書生筆欲折。  
 夜織貧女寒無幃。  
 高人著屐踏冷冽。  
 飄拂巾帽眞仙姿。  
 野僧斫路出門去。  
 寒液滿鼻清淋漓。  
 灑袍入袖溼靴底。

吁此の權柄誰か執持する。  
 世間苦樂知る幾かある、  
 今、我幸に膚肌を沾すを免る。  
 山夫只見る樵擔を壓するを、  
 豈知らんや酒を帶び歌兒を飄すを。  
 天王軒に臨んで麥あるを喜び、  
 宰相壽を獻じて時に及ぶを嘉す。  
 凍吟の書生、筆折れんと欲し、  
 夜織の貧女寒うして幃なし。  
 高人屐を著けて冷冽を踏み、  
 巾帽を飄拂して眞に仙姿。  
 野僧路を斫りて門を出でて去り、  
 寒液鼻に満ちて清うして淋漓。  
 袍に灑ぎ袖に入り靴底を溼す、

【七】帶酒 李義山の詩に、帶酒玉  
 崑崙。

【八】喜有麥 朝野僉載に、要宜麥  
 見三白。

【九】宰相獻壽 宋の大明中、元日  
 雪花降る。右衛將軍謝莊殿を下り、  
 雪が衣に集つて還り白す、上以て瑞  
 となし詩を賦す。

【一〇】高人著屐 齊の東郭先生は  
 貧困飢寒、衣は敝れ、履は完からず  
 して雪中を行く。

【一一】眞仙姿 晉の王恭嘗て鶴整裘  
 を披て雪中を行く。孟昶、之を見て  
 曰く、眞に神仙中の人と。  
 【一二】淋漓 したたる貌。

亦有執板趨堦墀。  
 舟中行客何所愛。  
 願得獵騎當風披。  
 草中咻咻有寒兔。  
 孤隼下繫千夫馳。  
 敲冰煮鹿最可樂。  
 我雖不飲強倒卮。  
 楚人自古好弋獵。  
 誰能往者我欲隨。  
 紛紜旋轉從滿面。  
 馬上操筆爲賦之。

亦板を執りて堦墀に趨くあり。  
 舟中の行客何の愛する所、  
 願くは獵騎を得て風に當つて披かん。  
 草中咻咻寒兔あり、  
 孤隼下に繫け千夫馳す。  
 氷を敲き鹿を煮て最も樂しむべし、  
 我飲まずと雖も強ひて卮を倒す。  
 楚人は古より弋獵を好む、  
 誰か能く往くものぞ、我隨はんと欲す。  
 紛紜旋轉從て面に滿つ、  
 馬上筆を操つて爲に之を賦す。

【三】執板 吳志朱治傳に、每進  
 見、孫權常親迎、執板交拜。

【四】堦墀 堦は階に同じ、墀は階  
 上の地。

【五】咻咻 呼吸する聲。

【題義】歐陽修が嘗て客を會して詩を賦したとき、玉月梨梅練絮白舞鶴銀等の字を用ひることを禁  
 じたといふ話がある。歐陽公の原作は、聚星堂雪詩の後に載せてある。東坡の此詩は、歐陽公の原作  
 に效ひ、弟子由の韻に次したものである。



【詩意】寒いので頸を縮めて眠る形は、凍えた龜のやうである。雪が降つても、内に在つては氣付かない。外から来た客が先づ知る。そこで早起して江上を見ると、浩として際がなく、稍は風で、寒さが一層加はる。見渡せば青い山も、一夕にして滄浪の髭となる。少年の忽ち老い易きに似て居る。陽氣は、流れる水にも見れる。さて、平地の尺に盈つるは大雪で、爲に江水も断けぬ。雪は風のまにまに紛紛として散る。それが積り積つて坑谷に満ち、高陵も危い。江もかくれて見えなく、野も廣くなつたのは雪のためである。戸に入りて、雪は軽く飛んで居る。裳を沾すも構はないで、細に看ると、雪の形は六出であつて、刻刀を用ひたやうである。天工と雖も、一一雕琢を加へる譯にはゆかない。霍然雪を撒き散らすと世界に徧し。ああ誰が此の權柄を掌る。人間に苦樂は多いが、今、我は幸に肌を沾すを免れた。降る雪は樵夫の肩に積るを見るも、簾を垂れて美酒に寒を忘れ、筵を掃うて巧に妬む回鶯の袖を知らない。正月元日雪花を見る、天王は豊年を喜び、宰相は瑞兆と賀し奉る。苦學の書生は、筆の凍るを歎き、貧しい織女に憐はない。昔、東郭先生は、飢寒に迫り、衣は敝れ履は完からずして雪中を行き、雪中弊裘を披た晋の王恭は孟昶に神仙中の人と褒められた。野僧は門を出で雪に路つけ、寒液が鼻に滿つ。朝士の袍も袖も靴も雪に溼はされ、笏を執つて階陛に趨く。舟中の行客が願ふ所は何ぞ、獵騎を驅つて雪中を披かん、草中に寒兔の聲がするから、じつとしては居られない。隼を繫けて千夫は獵場に馳せる。獲物は多い。氷を敲き、鹿を料理して、酒を飲む。楚人の弋獵は昔から名高い。ああ獵に行く人があれば、我も隨はん。雪は紛紛、風が加はつて旋轉し、顔に一杯になつた。馬上筆を操つて之を賦したのである。

た。馬上筆を操つて之を賦したのである。

嚴顔碑

嚴顔の碑

先主反劉璋。兵意頗不義。  
孔明古豪傑。何乃爲此事。  
劉璋固庸主。誰爲死不二。  
嚴子獨何賢。談笑傲礎几。  
國亡君已執。嗟子死誰爲。  
何人刻山石。使我空涕淚。  
吁嗟斷頭將。千古爲病悻。

先主劉璋に反く、兵意頗る不義なり。  
孔明は古の豪傑、何ぞ乃ち此事を爲す。  
劉璋は固より庸主、誰か爲に死して二かざらん。  
嚴子獨り何ぞ賢なる、談笑して礎几に傲る。  
國亡びて君已に執へらる、嗟子死して誰が爲にする。  
何人か山石に刻する、我をして空しく涕淚せしむ。  
吁嗟斷頭將、千古病悻となる。

【字解】【一】嚴顔。劉璋の爲に巴郡を守つて居つたが、張飛に擒にせらる。飛呵して曰く、何ぞ降らざると、顔曰く、我州、ただ斷頭將軍あつて降將軍なしと。【二】先主。蜀漢の劉備。【三】劉璋。曹操、璋を振威將軍となす。張松、璋に説いて先主を迎へしむ。先主、成都を圍み、璋出で降る。璋を南郡に遷す。【四】不二。二心なきをいふ。【五】礎几。樵鐵の意、古の刑具。

【題義】東坡の自註によると、嚴顔の碑は忠州（今の四川東川道）に在る。巴郡の太守嚴顔の節義を詠じたのである。



【詩意】蜀の劉備が劉璋に反いたのは、徳義に於て宜しくない。諸葛孔明が居つてなせ此事をする。劉璋の凡庸であるのは、言ふまでもないから、之が爲には命を棄てるものもなからう。ただ嚴顔は賢で、張飛に擒にされても屈しない。樞鎖の上に立ちてびくともしない。其國が亡び、其君が執へられたのに、嚴將軍は誰が爲に死する。之を山石に刻したのは何人である、我をして涕涙を覺えざらしめる。ああ斷頭將軍は、千古、人をして悸かしめる。

屈原塔

屈原の塔

楚人悲屈原。千載意未歇。

楚人屈原を悲しむ、千載意未だ歇まず。

精魂飄何處。父老空哽咽。

精魂飄として何れの處、父老空しく哽咽。

至今滄江上。投飯救饑渴。

今に至るまで滄江の上、飯を投じて饑渴を救ふ。

遺風成競渡。哀叫楚山裂。

遺風競渡を成し、哀叫楚山裂く。

屈原古壯士。就死意甚烈。

屈原は古の壯士、死に就く意甚だ烈。

世俗安得知。眷眷不忍決。

世俗安んぞ知るを得ん、眷眷として決するに忍びず。

南賓舊屬楚。山上有遺塔。

南賓は舊楚に屬す、山の上に遺塔あり。

應是奉佛人。恐子就淪滅。

應に是れ佛を奉ずるの人、子の淪滅に就くを恐れてなるべし。

此事雖無憑。此意固已切。

此事は憑るなしと雖も、此意は固より已に切なり。

古人誰不死。何必較考折。

古人誰か死せざらん、何ぞ必しも考折を較せん。

名聲實無窮。富貴亦暫熱。

名聲實に窮りなく、富貴亦暫く熱す。

大夫知此理。所以持死節。

大夫は此理を知る、死節を持する所以なり。

【字解】一 屈原 名は平、楚懷王の左徒たり。懷沙の賦を作り、汨羅に投じて死す。

二 精魂 たましひ、李華の弔古戰場文に、弔祭不至、精魂何依。三 哽咽 涙にむせぶ、古樂府、焦仲卿妻詩に、哽咽不能語。四 滄江 江水は蒼色、故にいふ。

五 競渡 舟で先を争ひて渡る遊戯。荆楚歲時記に、五月五日競渡。續齊諧記に、屈原五月五日投汨羅水、楚人哀之、至此日以竹筒子貯米投水祭之。

六 古壯士 戰國策に、壯士一去兮不復還。七 眷眷 れんごろに思ふ、詩小雅に、眷眷懷顧。八 南賓 古の巴子國、即ち忠州。考折 長壽と短折、尙書洪範に、五福、考終命、六極、凶短折。九 大夫 屈原は三閭大夫。

【題義】屈原の塔は、忠州にある。碑塔などあるべきではないが、後人が追思して之を作つた。屈原の塔を見て、屈原其の人を弔つたのである。

【詩意】上官大夫が屈原を頃襄王に短つたので、王は怒つて之を遷した。屈原は被髮行吟し、江濱に至り、汨羅に投じて死んだ。楚の人は之を悲しみ、千載の今日も忘れない。屈原のたましひは何れの處に迷へる、父老は空しく涙に咽ぶのみ。今日、尙ほ五月五日には江水の上、竹筒子を水に投じて祭をする。又、舟で先を争ふ競技もする。哀しみの叫は、楚山を裂く。さて屈原は古の壯士、死に就く意も烈である。眷眷として楚王を棄て去るに忍びなかつた心持は、世俗の人にはとても解らない。忠





州は、もと楚の地、山の上に塔がある。これは佛教信者が屈原の淪滅することを恐れて建てたものであらう。此の事は憑り處がなくても、此の意は至つて切なるを覺ゆ。人間は一度は死ぬのである。長生と短命とを比べるにも及ぶまい。名聲は窮りがなく、富貴も暫しの間のみ。屈原は此の道理を悟つて居るから死節を失はないのである。

望夫臺

望夫臺

山頭孤石遠亭亭。

山頭の孤石遠くして亭亭、

江轉船回石似屏。

江轉じ船回り石は屏に似たり。

可憐千古長如昨。

憐むべし千古長くして昨の如く、

船去船來自不停。

船去り船來りて自ら停まらず。

浩浩長江赴滄海。

浩浩たる長江滄海に赴き、

紛紛過客似浮萍。

紛紛たる過客浮萍に似たり。

誰能坐待山月出。

誰か能く坐して山月の出づるを待ち、

照見寒影高伶俜。

照し見ん寒影の高うして伶俜たるを。

【題義】昔、人あり楚に往き、歳を累ねて還られなかつたので、其の妻が山に登り、之を望むこと久しく、乃ち化して石となつた。此の故事を賦したのである。

【詩意】山上の孤石は、高く聳えて屏風のやうであるより翠屏山といふ。江水も流を轉じ、行く船も廻る。憐むべし千古は長きが如きも昨日の心地し、船は來往して暫くも停らない。浩浩たる長江は、やがて滄海に入るも、紛紛たる過客は、浮草のやうである。ああ入る日を惜しむなく、出づる月を待つて、寒影のおちぶれたるを照らし見たいものである。

竹枝歌 本楚聲。幽怨惻怛。若有所深悲者。豈亦往者之所見。有足怨者。與夫傷二妃而哀屈原。思懷王而憐項羽。此亦楚人之意。相傳而然者。且其山川風俗。鄙野勤苦之態。固已見於前人之作。與今子由之詩。故特緣楚人疇昔之意。爲一篇九章。以補其所未道者。

竹枝歌

竹枝歌

竹枝歌は、本楚聲、幽怨惻怛、深く悲しむ所あるもの若し。豈亦往者の見所、怨むに足るものあるか。夫れ二妃を傷んで屈原を哀み、懷王を思うて項羽を憐む、此れ亦楚人の意相傳へて然るもの。且つ其れ山川風俗、鄙野勤苦の態は、固より已に前人の作と、今子由の詩とに見はる。故に特に楚人疇昔の意に緣り、一篇九章を爲り、以て其の未だ道はざる所のものを補ふ。

古今體詩 望夫臺 竹枝歌



【字解】**【一】** 竹枝 はやり歌、其の聲もと巴渝より出づ。唐の貞元中、劉禹錫、阮湘に在り、俚歌鄙陋なるを以て、乃ち騷人の九歌によりて、竹枝新詞を作り、里中の小兒をして之を歌はしむ。**【二】** 幽怨 心の底にひめたるうらみ、李白の詩に、獨幽怨以沈迷。**【三】** 惻怛 いたみかなしむ、禮記問喪に、惻怛之心、痛疾之意。

蒼梧山高湘水深。

蒼梧山高く湘水深し、

中原北望度千岑。

中原北に望めば千岑を度る。

帝子南游飄不返。

帝子南に游んで飄として返らず、

惟有蒼蒼楓桂林。

惟蒼蒼たる楓桂林あり。

楓葉蕭蕭桂葉碧。

楓葉蕭蕭桂葉は碧、

萬里遠來超莫及。

萬里遠く來るも超にして及ぶなし。

乘龍上天去無蹤。

龍に乗つて天に上り去つて蹤なし、

草木無情空寄泣。

草木の無情なるに空しく泣を寄す。

水濱擊鼓何喧闐。

水濱に鼓を撃つて何ぞ喧闐たる、

相將扣水求屈原。

相將ゐて水を扣き屈原を求む。

屈原已死今千載。

屈原已に死して今千載、

【字解】**【一】** 蒼梧 禹貢荊州の

域、漢は蒼梧郡を置く、地は百粵を總

べ、山は五嶺を連ぬ。**【二】** 湘水

一名湘江、湖南の巨川。**【三】** 千岑

岑はミネ、張喬の詩に、江外歷千岑。

**【四】** 帝子南游 湘君は堯の二女、舜

の二妃。舜南に巡狩し、蒼梧に死す。

二妃之に従ひ、及ばずして沅湘の間

に溺死す。**【五】** 乘龍上天 黃帝

龍に乗りて天に上る。羣臣後宮從ふ

もの七十餘人、小臣は上るを得ず。

**【六】** 空寄泣 博物志に、舜崩、二

妃啼以涕揮竹竹盡斑。**【七】** 喧闐

人が羣がりてやかましい。唐國史補

に、郡邑爲之喧闐。**【八】** 相將

高陽樂人歌相將入酒家。**【九】** 哀

滿船哀唱似當年。

滿船哀唱して當年に似たり。

海濱長鯨徑千尺。

海濱の長鯨徑千尺、

食人爲糧安可入。

人を食うて糧となす安んぞ入るべけん。

招君不歸海水深。

君を招くも歸らず海水深し、

海魚豈解哀忠直。

海魚は豈忠直を哀しむを解せんや。

吁嗟忠直死無人。

吁嗟忠直死して人なし、

可憐懷王西入秦。

憐むべし懷王の西秦に入るを。

秦關已閉無歸日。

秦關は已に閉ちて歸る日なし、

章華不復見車輪。

章華復車輪を見ず。

君王去時簫鼓咽。

君王去る時簫鼓咽び、

父老送君車軸折。

父老君を送りて車軸折る。

千里逃歸迷故鄉。

千里を逃れ歸つて故郷に迷ふ、

南公哀痛彈長鋏。

南公哀痛して長鋏を彈す。

三戸亡秦信不虛。

三戸秦を亡す信に虚ならず、

唱 晉の夏統、小海唱を聆き、子胥、屈平立吾左右一矣といつた。小海唱といふのは、昔、伍子胥、忠を以て海に投ず、國人爲にこの唱を作る。**【一〇】** 長鯨 雄を鯨といひ、雌を鯢といふ。**【一一】** 懷王西入秦 秦の昭王、懷王と會せんと欲す。屈平曰く、行くなきに如かずと。懷王の稚子子蘭、王に勸めて行かしむ。秦乃ち懷王を留む。懷王秦に客死す。**【一二】** 章華 臺名、左傳昭公七年に、楚子成章華之臺。今の湖北監利縣西北に在り。**【一三】** 車軸折 漢書臨江王榮傳に、上徵榮、榮既上車、軸折車廢。江陵父老流涕竊言曰、吾王不反矣。**【一四】** 南公哀痛 史記項羽本紀に、自懷王入秦不反、楚人憐之至今、故楚南公曰、楚雖三戸、亡秦必楚也。**【一五】** 長鋏 缺は劍のツカ。**【一六】** 項羽年最少



一朝兵起盡謹呼。  
 當時項羽年最少。  
 提劍本是耕田夫。  
 橫行天下竟何事。  
 棄馬烏江馬垂涕。  
 項王已死無故人。  
 首入漢庭身委地。  
 富貴榮華豈足多。  
 至今惟有冢嵯峨。  
 故國淒涼人事改。  
 楚鄉千古爲悲歌。

一朝兵起りて盡く謹呼す。  
 當時項羽は年最も少く、  
 劍を提ぐるも本是れ耕田の夫。  
 天下に橫行するも竟に何事ぞ、  
 馬を烏江に棄つれば馬涕を垂る。  
 項王已に死して故人なく、  
 首は漢庭に入り身は地に委す。  
 富貴榮華は豈多とするに足らんや、  
 今に至つて猶ほ冢の嵯峨たるあり。  
 故國淒涼として人事改るも、  
 楚鄉千古爲に悲歌す。

項羽初めて起る時年二十四。【一七】  
 棄馬烏江。項王、烏江を渡らんとす、亭長船を獻して王を待つ、王之に其の騎馬を賜ふ。【一八】首入漢庭。云云。王驛は其の頭を取り、楊喜・呂馬童・呂勝・楊武各、其の一體を得。  
 【一九】嵯峨。山石の齊しからざる貌。

【題義】竹枝詞は唐人に起る、竹枝を打つて神を賽するより創まる。屈原も九歌を作り、楚人をして神を迎送せしめた。其の聲によつて此の竹枝を作つたのである。屈原も九歌を作り、楚人をして神を迎送せしめた。其の聲によつて此の竹枝を作つたのである。

【詩意】蒼梧の山は高く、湘江の水は深い。遙に中原を望めば、山又山である。昔、舜帝は南に巡狩して蒼梧の野に崩じ江南の九疑山(湖南寧遠縣南六十里)に葬る。ただ楓樹桂林があるのみ。楓葉は物さびしく、桂葉は碧である。萬里遠く來るも、超かにして及ばない。帝は龍に乗つて天に上る。湘君の涙は空しく竹を斑ならしめる。水濱に鼓を撃ち水を叩いて屈原を求む。屈原亡してここに千年なれども、滿船の哀唱は、其の昔に變らない。海濱の長鯨は、人を食うて糧とするから、入ることが出来ない。海水も深いので、君を招いても歸らない。無情の海魚は、忠直の屈原を哀しむことを知らない。屈原死して、また忠直の人を見ない。懷王の秦に入つて歸らないのは、誠に憐むべきである。ああ章華臺には楚王在さず、王の此世を去らるる時、簫鼓の聲咽び、父老は流涕して吾王は反らずと。楚王の幽魂は故山に迷うて居るのである。懷王が秦に入つて反らなかつたから、楚人は之を憐み、楚の南公はいふ、他日、楚はたとひ三戸になつても、秦を亡ぼすものは、必ず楚であると。それで一朝、秦を攻める兵が起ると、齊しく謹呼したのである。當時、項羽は僅に二十四の青年で、劍を提ぐるも、本是れ耕田の夫、天下に橫行するも、何事も成就しなかつた。烏江を渡るとき、涕を垂れて愛馬に別れ、身死して首は漢庭に入る。して見ると、世の富貴榮華は尊ぶに足らない。ただ塚の嵯峨として今に存するのみ。故國は寂寥として人事改まるも、楚郷の人は、いつまでも悲歌慷慨して已まないであらう。(要するに第九章は全篇を總括したのである。)

【餘論】紀曉嵐曰く、每段八句、過接處、若斷若連、章法甚妙、と。



八陣磧

平沙何茫茫。髣髴見石薊。

縱橫滿江上。歲歲沙水齧。

孔明死已久。誰復辨行列。

神兵非學到。自古不留訣。

至人已心悟。後世徒妄說。

自從漢道衰。蠶起盡姦傑。

英雄不相下。禍難久連結。

驅民市無煙。戰野江流血。

萬人賭一擲。殺盡如沃雪。

不爲久遠計。草草常無法。

孔明最後起。意欲掃羣孽。

崎嶇事節制。隱忍久不決。

志大遂成迂。歲月去如瞥。

八陣磧

平沙何ぞ茫茫、髣髴として石薊を見る。

縱橫江上に滿ち、歲歲沙水齧む。

孔明死する已に久しく、誰か復行列を辨せん。

神兵は學んで到るにあらず、古より訣を留めず。

至人は已に心に悟る、後世徒に妄説す。

漢道の衰へしより、蠶起盡く姦傑。

英雄相下らず、禍難久しく連結。

民を驅りて市に煙なく、野に戦つて江に血を流す。

萬人一擲を賭し、殺し盡す雪に沃ぐが如し。

久遠の計を爲さず、草草常に法なし。

孔明最後に起り、意羣孽を掃はんと欲す。

崎嶇節制を事とし、隱忍久しく決せず。

志大に遂に迂を成す、歲月は去つて瞥の如し。

六師紛未整。一旦英氣折。惟餘八陣圖。千古壯夔峽。

六師紛として未だ整はず、一旦英氣折れて、惟八陣の圖を餘し、千古夔峽を壯とす。

【字解】一 八陣磧 四川の夔州奉節縣は、本、漢の魚復縣、八陣の圖は縣の西南七里に在り。磧は水邊の石原。晉書桓溫傳に、

諸葛亮造八陣圖於魚復平沙之上、壘石爲行、行相去二丈、桓溫見之謂此常山蛇勢也。【二】髣髴 さま似たり、彷彿と同じ。【三】

石薊 薊は茅を束れ位を表すこと、漢書叔孫通爲綿叢野外、註にいふ、立三竹及茅索營之。石薊の字は、東坡が特に其の意を借り

用ふ。八陣磧の石を以て位を表する茅薊の如きよりいふ。【四】至人心悟 蜀志諸葛亮傳に、亮性長於巧思、推演兵法、作八陣圖、

咸得三其要。【五】蠶起 羣り起る、史記項羽紀に、楚蠶起之將。蠶は蜂の古字。【六】賭一擲 李太白詩に、天地賭一擲、未

能忘三戰爭。【七】崎嶇 平かでない山路を跋めば、困難を感じるより、困難の義に用ふ。【八】隱忍 心に堪へ忍びて外にあらは

さない。史記の伍子胥傳に、隱忍就功名。【九】瞥 ちらりと見る。

【題義】入蜀記に、夔州東南有八陣磧、孔明之遺跡、碎石行列如引繩、每歲江漲、磧上水數十丈、比退陣石如故。夔の人は諸葛公を重んじ、每歲、人日（正月七日）を以て出でて磧上に遊ぶ、之を

踏磧といふ。此詩は八陣磧を言ひて孔明論をなしたのである。

【詩意】魚復縣の平沙、何ぞ茫茫たる、孔明の八陣圖の遺跡は、江上に縱橫し、毎年、沙水に浸され

て居る。孔明の亡くなつてから久しいので、八陣の圖を明にするものもない。一體、人の意表に出る神

兵といふものは、學んで出来るものではない。昔から秘訣を傳へないからである。至人は、已に其の

訣を心に悟る、後世の人は、徒に妄説する。漢の世が衰へて、蜂のやうに羣り起つたものは、盡く姦

傑である。其の人人は相下らないので、禍難が久しく結んで解けない。民が四散して市に煙も立たな



く、野に戦争が断えないで、血が流れて川をなす。萬人一擲を賭して天下を争ひ、未だ戦争を忘れることが出来ない。人を殺し盡すこと雪に水を沃ぐがやうである。其の戦争も、軍を作す法なく、國家百年の計を爲すことを思はない。最後に孔明が起つて羣雄を一掃しようとした。千辛萬苦、軍の節制を事とし、隠忍することが久しく、大きな志も、遂に達することが出来なかつた。歲月は去つて暫くも留らない。天子の六軍も、整頓するに至らないため、兎角、最初の英氣も挫けて、ただ八陣の圖が遺り、千古夔州の峽を壯にして居るのみである。

【餘論】紀昀は、眉山父子持論如此、收得完密、住得簡潔、と評して居るが、成敗を以て古人を論ずるは、文人の通弊である。三蘇の常に孔明を誹議するは、其の短處であり、又、其の疏なる處でもある。

諸葛鹽井

諸葛の鹽井

五行水本鹹。安擇江與井。

五行水本鹹し、安んぞ擇ばん江と井と。

如何不相入。此意誰復省。

如何ぞ相入れざる、此意誰か復省みん。

人心固難足。物理偶相逞。

人心固に足り難し、物理偶々相逞うす。

猶嫌取未多。井上無閒綆。

猶ほ嫌ふ取ること未だ多からざるを、井上に閒綆なし。

【字解】一、鹽井。東坡自註に、井有二十四、自山下至山上、其十三井常空、每盛夏水漲、則鹽泉迤邐遷去、常去於江水之所不及。二、五行水本鹹。尙書の洪範に、五行水曰潤下、潤下作鹹。三、人心固難足。後漢書に、光武曰く、人苦レ不知足。四、

無閒綆。莊子の至樂篇に、綆短者不可レ以汲深。

【題義】孔明八陣圖の下に一磧がある。東西百歩、南北四十歩、上に鹽泉井五口あり、冬出で夏は没す。昔、漢の羅裒といふは、成都の人で、貨殖を以て名高い。鹽井の利を擅にし、貲鉅萬に至つた。鹽井は資源である。此詩は孔明の鹽井を詠じたのである。

【詩意】五行の理からいふと、相尅つものは相勝つ。山泉は多く甘くして、海水は鹹し、鹹いものは、水が本に歸し、甘いものは、土之に勝つのである。鹽泉が迤邐とつらなつて遷り去り、常に江水の及ばざる所に去るといふが、江水と井水とに異りはない。如何ぞ相入れざる、此意を省るものはない。人心は固に満足することを知らない。萬物の理は、思ひ存分にする。取るものは多く取る。それでも取ることが未だ十分でないのか、井上には綆の休む暇もない。

白帝廟

白帝廟

朔風吹入峽。慘慘去何之。

朔風に吹かれて峽に入り、慘慘として去つて何くにか之く

共指蒼山路。來朝白帝祠。

共に蒼山の路を指し、來り朝す白帝の祠。

荒城秋草滿。古樹野藤垂。

荒城 秋草滿ち、古樹野藤垂る。

浩蕩荆江遠。淒涼蜀客悲。

浩蕩として荆江遠く、淒涼として蜀客悲しむ。



遲回問風俗。涕泗憫興衰。  
 故國依然在。遺民豈復知。  
 一方稱警蹕。萬乘擁旌旗。  
 遠略初吞漢。雄心豈在夔。  
 崎嶇來野廟。閔默愧當時。  
 破甑蒸山麥。長歌唱竹枝。  
 荆邯真壯士。吳柱本經師。  
 失計雖無及。圖王固已奇。  
 猶餘帝王號。皎皎在門楣。

遲回して風俗を問ひ、涕泗して興衰を憫む。  
 故國は依然として在るも、遺民豈復知らん。  
 一方に警蹕を稱し、萬乘旌旗を擁す。  
 遠略、初、漢を呑まんす、雄心豈夔にあらんや。  
 崎嶇として野廟に來り、閔默して當時を愧づ。  
 破甑山麥を蒸し、長歌竹枝を唱ふ。  
 荆邯は眞に壯士、吳柱は本經師。  
 計を失つて及ぶ無しと雖も、王を圖るは固に已に奇なり。  
 猶ほ帝王の號を餘して、皎皎として門楣に在り。

【字解】 一 白帝廟。四川奉節縣今の四川東川道の東八里にある。公孫述、魚復縣に至る、白龍、井中より出づ、因て白帝城と號し、自ら白帝と稱す。 二 朔風。北風、夏侯湛の詩に、朔風動秋草、邊馬有歸心。また朔吹ともいふ。 三 慘慘。いたみかなしむ、詩の小雅に、憂心慘慘。 四 遲回。ぶらぶらさまよふ、李白の詩に、金花折風帽、白馬小遲回。孟襄陽の詩に、林下莫遲回。 五 警蹕。天子出入の儀、蹕は行人を止め道を清めること、蹕は戒め肅ましめること。古今註に、警蹕は秦の制、出づるに蹕、入るに蹕、出入皆止むるをいふ。 六 萬乘。天子をいふ、昔、天子は兵車萬乘を出すべき畿内方千里を領するに由る。 七 遠略。左傳僖公九年、齊侯不務德而勤遠略。 八 閔默。吳均の詩に攬衣空閔默。 九 破甑。甑は炊器。 一〇 荆邯。後漢平陵の人、東方將に平かならんとし、兵且に西に向はんとするを見、遂に公孫述に説いて兵を發せしめ、田戎をして江陵に據らしめ、延

岑をして漢中に出でしむ。述、以て羣臣に問ふ。博士吳柱曰く、昔武王伐殷、還師以待天命。未開無左右之助。而欲出師千里之外、以廣封疆者。荆邯曰く、東帝無三尺土之柄、向所輒平、不亟乘時與之分功、而坐談武王之說、是效魏囂、欲爲西伯也。 二 門楣。門上の横梁、轉じて家門の義に用ふ、高啓の詩に、男兒弧矢壯門楣。

【題義】 白帝廟は甚だ古く、松柏は皆百年のもの。公孫述は蜀に據つて漢を承くるとなし、自ら白帝と稱し、夔子國を改めて白帝城となす。後漢の光武帝、岑彭を遣はし、討ちて之を滅す。公孫述が荆邯を用ひなかつたのは、陳餘が李左車を用ひなかつたと同じである。東坡は之を失計となして居る。

【詩意】 北風が吹き荒み、それに送られて蜀の峽に入る。いたみ悲しい有様で何處を指して之。共に蒼山の路を指し、そして白帝の祠に詣づるのである。荒れた城には秋草が滿ち、古い樹には葛が懸つて居る。荆江はひろびろとして遠く流れ、蜀客は物寂しくて堪へ兼ねる。ぶらぶら迷つては風俗を問ひ、古今の興衰に涙を催した。故國は依然として存するも、遺民は昔を知らない。公孫述は、初、萬乘の旗を立てて、出づるに蹕、入るに蹕、天子出入の儀式を具へ、漢を併吞するの遠略を抱いた。其の雄心は決して夔州に偏安するものではなかつた。さて旅程崎嶇として白帝廟に來り、古を懷うて暫し憫默し、破れた甑で山麥を蒸し、竹枝を長歌した。後漢の荆邯は、眞に壯士といふべく、博士の吳柱は、もともと經學先生である。それで時務を知らなかつたといへば言ふものの、王道を言ふのは立派で、公孫述が帝號の皎皎として家門を飾つたのも、此が爲である。



永安宮

永安宮

千古陵谷變。故宮安得存。  
徘徊問耆老。惟有永安門。  
遊人雜楚蜀。車馬晚喧喧。  
不見重樓好。誰知昔日尊。  
吁嗟蜀先主。兵敗此亡魂。  
只應法正死。使公去遭燔。

千古陵谷變ず、故宮安んぞ存するを得ん。  
徘徊して耆老に問ふ、惟永安門あり。  
遊人は楚蜀を雜へ、車馬晩に喧喧。  
重樓の好きを見ずば、誰か昔日の尊きを知らん。  
吁嗟蜀の先主、兵敗れて此に魂を亡ふ。  
只應に法正死し、公をして去つて燔に遭はしめしなるべし。

【字解】【一】永安宮 東坡の自註に、今夔之永安門、即宮之遺址也。三國志に、改魚復曰永安。【二】耆老 老人の義、耆は六十歳、老は七十歳。【三】法正 云云。蜀の兵既に敗るるや、諸葛亮歎じて曰く、法孝直（法正の字）若し在らば、能く主上を制して東行せざらしめん、たとひ東行すとも、必ず傾危せざらん」と。【四】遭燔 遭難の意。

【題義】永安宮は、諸葛亮が先主の遺詔を受けし處、今の四川奉節縣の境に在る。

【詩意】高岸は谷となり、深谷は陵となる。千古陵谷も變ずるのに、永安宮のみが無事といふ譯にはゆかない。徘徊して土地の耆老に尋ねると、ただ永安門が昔のままに存するのみ。遊人は楚からも蜀からも来て、車馬の響は喧し。重樓の好きを見なければ、昔の尊嚴が解らない。ああ蜀の先主は、兵が敗れてここに亡くなられた。法正が死んだので、先主は此危難に遭はれたのであらう。

【餘論】紀昀は此詩を評して、後四句、凡鄙之至、殊不似坡公手筆と言つた。

過木樨觀

木樨觀を過ぐ

石壁高千尺。微蹤遠欲無。  
飛簷如劍寺。古柏似仙都。  
許子嘗高遜。行舟悔不迂。  
斬蛟聞猛烈。提劍想崎嶇。  
寂寞棺猶在。修崇世已愚。  
隱居人不識。化去俗爭吁。  
洞府煙霞遠。人間爪髮枯。  
飄飄乘倒景。誰復顧遺軀。

石壁高き千尺、微蹤遠く無からんことを欲す。  
飛簷は劍寺の如く、古柏は仙都に似たり。  
許子嘗て高遜、行舟迂せざるを悔ゆ。  
蛟を斬りて猛烈を聞く、劍を提げて崎嶇を想ふ。  
寂寞として棺猶ほ在り、修崇世已に愚。  
隱居人識らず、化し去つて俗争ひ吁く。  
洞府煙霞遠く、人間爪髮枯る。  
飄飄として倒景に乗じ、誰か復遺軀を顧みん。

【字解】【一】木樨觀 許邁が得道の處。木樨山は萬州武寧縣（今の四川東川道）の東南十三里にある。【二】飛簷 高く反り出たノキ、洛陽伽藍記に飛簷峻宇。簷一に檐に作る。【三】劍寺 劍門山頂に一寺あり、梁山寺といふ。【四】仙都 方輿勝覽に、自鄠都縣東行二里、石徑榮回、翠柏殆數萬株、又名平都福地とある。許旌陽は、嘗て此處に避世し、山中に精修すること一百三十六年、擧家飛昇と傳へて居る。【五】高遜 高く世をのがる、列仙傳に、許遜、字敬之、晉永嘉中爲蜀之旌陽令。從吳猛得神方、棄官



居三洪州西山下。【六】斬蛟。晉の初、許邁は旌陽の令となり、異人の術を得て、江湖に周遊し、悉く蛟蜃を斬りて民害を除く。【七】爪髮枯。列子の天瑞篇に、皮膚爪髮、隨世隨落。【八】倒景。夕日、溫庭筠の詩に、鳥飛天外斜陽盡、人過橋邊倒景來。

【題義】老泉の詩敍によるに、許旌陽が得道の處を舟人が告げなかつた。既に過ぎ武寧縣に至つて其の事が知れた。縣の人の言に、許旌陽の棺槨は、猶ほ山上に在りと。輿地紀勝に許旌陽舊宅、今之白鶴寺也。

【詩意】石壁の高さは千尺、人の行くことなからんを欲するのである。高くそり出た簷は、劍寺のやうである。劍門を出て東望すれば、彷彿として見ることが出来る。古い柏のあるは、仙都のやうである。此度、迂回して此の古蹟を訪はなかつたのを残念に思ふ。昔、許旌陽の官を棄て山に居つた時、海に大蛇があつた。眞君は正一斬邪の法で之を殲したといふことである。(正一の法といふのは、道家でいふ陶隱居正一法のこと、之を傳へたものを正一眞人といふ。)さて、許子の崎嶇として劍を提げた武勇談も今は寂寞として、ただ山上の棺槨に昔を偲ぶのみである。道家修崇のことも既に驗なく、眞人隱居の術も人が識らない。ただ許子の仙化を人が争つて歎いて居る。眞人の居は煙霞遠く、人間の皮膚爪髮は隨つて生じ隨つて落ちる。飄飄として倒景に乗じて去る眞人は、復、俗界の遺體など、少しも顧みないのである。

巫山

巫山

瞿塘迤邐盡。巫峽崢嶸起。  
連峰稍可怪。石色變蒼翠。  
天工運神巧。漸欲作奇偉。  
塊軋勢方深。結構意未遂。  
旁觀不暇瞬。步步造幽邃。  
蒼崖忽相逼。絕壁凜可悸。  
仰觀八九頂。俊爽凌顛氣。  
晃蕩天宇高。奔騰江水沸。  
孤超兀不讓。直拔勇無畏。  
攀緣見神宇。憩坐就石位。  
巉巖隔江波。一一廟吏。  
遙觀神女石。綽約誠有以。  
俯首見斜鬢。拖霞弄修帔。  
人心隨物變。遠覺含深意。

瞿塘は迤邐として盡き、巫峽は崢嶸として起る。  
連峰稍可怪むべく、石色蒼翠に變ず。  
天工神巧を運らし、漸く奇偉を作さんと欲す。  
塊軋として勢方に深く、結構意未だ遂げず。  
旁觀瞬々に暇あらず、步步幽邃に造る。  
蒼崖忽ち相逼る、絶壁凜として悸るべし。  
仰いで觀る八九頂、俊爽顛氣を凌ぐ。  
晃蕩として天宇高く、奔騰江水沸く。  
孤超兀として讓らず、直拔勇にして畏るるなし。  
攀緣神宇を見、憩坐石位に就く。  
巉巖江波を隔て、一一廟吏に問ふ。  
遙に觀る神女の石、綽約誠に以あり。  
首を俯して斜鬢を見、霞を拖きて修帔を弄す。  
人心は物に隨ひて變じ、遠く深意を含むを覺ゆ。



野老笑我旁。少年嘗屢至。  
 去隨猿猱上。反以繩索試。  
 石筍倚孤峰。突兀殊不類。  
 世人喜神怪。論說驚幼穉。  
 楚賦亦虛傳。神女安有是。  
 次問掃壇竹。云此今尙爾。  
 翠葉紛下垂。婆娑綠鳳尾。  
 風來自偃仰。若爲神物使。  
 絕頂有三碑。詰曲古篆字。  
 老人那解讀。偶見不能記。  
 窮探到峰背。採斫黃楊子。  
 黃楊生石上。堅瘦紋如綺。  
 貪心去不顧。澗谷千尋絕。  
 山高虎狼絕。深入坦無忌。

野老是我旁に笑ふ、少年嘗て屢至り、  
 去る猿猱に随つて上り、反る繩索を以て試む。  
 石筍孤峰に倚り、突兀殊に類せず。  
 世人は神怪を喜び、論說幼穉を驚かす。  
 楚賦亦虚傳、神女安んぞ是あらん。  
 次に壇を掃ふ竹を問ふ、云ふ此れ今尙ほ爾りと。  
 翠葉は紛として下垂、婆娑たり綠鳳尾。  
 風來つて自ら偃仰、神物に使はるるが若し。  
 絶頂に三碑あり、詰曲古篆字。  
 老人那ぞ讀むことを解せん、偶見も記する能はず。  
 窮め探りて峰背に到り、採斫す黄楊子。  
 黄楊は石上に生じ、堅瘦にして、紋、綺の如し。  
 貪心去つて顧みず、澗谷千尋絶る。  
 山高く虎狼絶え、深く入れば坦にして忌むなし。

溟濛草樹密。蔥蒨雲霞膩。  
 石竇有洪泉。甘滑如流髓。  
 終朝自盥漱。冷冽清心胃。  
 浣衣挂樹梢。磨斧就石鼻。  
 徘徊雲日晚。歸意念城市。  
 不到今十年。衰老筋力憊。  
 當時伐殘木。牙孽已如臂。  
 忽聞老人說。終日爲歎喟。  
 神仙固有之。難在忘勢利。  
 貧賤爾何愛。棄去如脫屣。  
 嗟爾若無還。絕糧應不死。

溟濛草樹密に、蔥蒨雲霞膩なり。  
 石竇洪泉あり、甘滑にして流髓の如し。  
 終朝自ら盥漱すれば、冷冽にして心胃を清む。  
 衣を浣うて樹梢に掛け、斧を磨いて石鼻に就く。  
 徘徊雲日晚れ、歸意城市を念ふ。  
 到らざる今に十年、衰老筋力憊る。  
 當時伐殘の木、牙孽已に臂の如しと。  
 忽ち老人の説を聞き、終日爲に歎喟す。  
 神仙は固より之あり、難きは勢利を忘るるに在り。  
 貧賤爾何を愛せん、棄て去る屣を脱するが如し。  
 嗟爾若し還るなくば、糧を絶つも應に死せざるべし。

【字解】【一】巫山 四川巫山縣の東、湖北巴東縣の西に在る。即ち巫峡で、巴山山脈特起の處。十二峯があり、峯下に神女廟がある。巫峡は西陵峡、瞿塘峡と並に三峽と稱す。【二】瞿塘 四川奉節縣の東十三里にある。一名は廣溪峽。【三】進遷 旁行連延の義、梁簡文帝の從軍行に、進遷觀三鵝翼、參差觀三雁行。【四】崢嶸 深く険しい貌、蜀都賦に、經三峽之崢嶸。【五】連峰稍可怪 三峽七百里、兩岸の連山、略、缺くる處なし。重巖疊嶂、天を隠くし日を蔽ふ、人境にあらず。【六】變蒼翠 謝朓の詩に、蒼翠望



寒山。【七】 峽。 際限なき貌。劉安の招隱士に、峽兮軋、山曲拂、心淹留兮洞荒忽。【八】 結構。 左太沖の詩に、巖穴無結構。【九】 步步造幽邃。 魏志の顏斐傳の註に、步步稽留。幽邃は、しづかに奥深し。【一〇】 蒼崖。 李義山の詩に、蒼崖萬歲藤。【一一】 仰觀八九頂。 入蜀記に、巫山十二峰不可悉見、所見八九峰。【一二】 顯氣。 天邊の氣。【一三】 晃蕩。 光の定まらない貌。【一四】 攀緣。 劉安の招隱士に、攀援桂枝兮聊淹留。【一五】 巉巖。 高く峻しい貌。【一六】 神女石。 入蜀記に、十二峰、惟神女峰最爲纖麗奇峭。峽中十二峰は、望霞翠屏、朝雲、松巒、集仙、來鶴、淨境、上昇、起雲、飛鳳、登龍、聖泉で、神女峰の名が見えない。或はいふ、來鶴峰は神女峰の別名と。【一七】 綽約。 柔媚にして美しい貌。莊子逍遙遊に、藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子、淖は綽と同じ。【一八】 斜鬟。 鬟は總髻、山の形と色にも喩ふ、虞集の詩に、窗中遠黛曉千鬟。【一九】 拖霞。 拖は曳なり、霞は赤い雲氣、朝やけ、夕やけ。かすみは霞。【二〇】 修岐。 長い稽子。釋名に、岐、披也、披之肩背不及下也。【二一】 猿猴。 猿は手長、猴は石筍、尖り立てる岩石、後漢の任文公傳に、蜀武擔石折、註にいふ、其石俗今爲石筍。【二二】 楚賦。 宋玉の神女賦を指す。神女は即ち巫山の神女。【二三】 掃壇竹。 永嘉記に、川江綠岸、有仙石壇、有竹蟬娟青翠、風來枝動、掃石壇、壇上無塵。荊州圖記に、天門角上特生二竹、倒垂拂拭謂之天筍。【二四】 婆娑。 舞ふ貌、詩の陳風に、子仲之子、婆娑其下。【二五】 偃仰。 ねたり起きたりする、詩小雅に、或棲遲偃仰。【二六】 詰曲。 まがりくねる、劉禹錫の詩に、修蔓蟠詰曲。【二七】 黃楊子。 ツゲ、埤雅に、黃楊木性堅緻難長。【二八】 溟濛。 蔥蒨。 江文通の詩に、青林結溟濛、丹巖被蔥蒨。【二九】 石竇。 有洪泉。 仙經に、神山五百歲一開、其中石髓出、得而服之、壽與天相畢、金玉之精也。神仙傳に、王烈入太行山、忽見山破石裂、青泥流出如髓、烈取食之如飴。石髓は即ち石鍾乳。【三〇】 石鼻。 山名、宋史地理志に、峽州中夷陵郡軍事建炎中移治石鼻山。【三一】 如脫履。 史記封禪書に、嗟乎吾誠得如黃帝、吾視去妻子、如脫履躡耳。躡はわらわつ。

【題義】 江水峽を歴、東して新崩灘を逕ぐ、其の下十餘里、大巫山あり、首尾一百六十里、之を巫峽といふのは、山に因つて名を爲したのである。巫山の峰巒は、上、霄漢に入り、山脚は、直に江中に挿さんで居る。

【詩意】 同じく三峽の一であるが、瞿塘峽は、うねうねとして連なり、巫峽は深くして険しい。連崖千丈、奔流電激天を隠し日を蔽ふ、といふのが巫峽で、全く人境でない。石の色も蒼翠に變じて居り、天工は奇觀をなさうとする。併し、峽勢は、際限なく轉じ、結構も、兎角、定まらない。重巖疊嶂、怒湍流水、人をして應接に暇なからしめる。歩歩進んで幽邃の境に入る。すると、蒼崖が逼つて、絶壁に怖氣を生ずるであらう。仰いで觀れば、巫山十二峰、悉くは見えない。八九峰だけが見える。清英の氣は天邊を凌いで、天の光も定まらない。伏して臨むと、江水は奔騰して居る。一は卓然として譲らない。一は直進して畏れない。そこで神宇に攀ち、石位に憩ふ。江波を隔てて一廟吏に問ふ。遙に見えるのは神女石、柔媚にして美しい。山の形と色とは、傾ける總髻と見るべく、朝やけ夕やけは、長い稽子を拖いたやうである。人心は物によつて變じ、其の都度、物に深意を含めるを思はせる。土地の人、我が旁にあつていふ、若い時分は、しばしばここに遊び、山猿に隨つては、高きに上り、歸るときには繩索を用ひて下りた。尖つて立てる巖は、石筍の如く、他の處には類がない。一體、世の人は、神怪を喜ぶ。昔、楚の襄王が宋玉といふ文學者と雲夢の浦に遊んだとき、王は宋玉をして賦を作らしめた。其の夜、王は夢に神女と遇うたといふ傳説がある。此の楚賦は、固より虚を傳へたもので、世に神女などいふもののあるべき道理はない。次に、壇を掃ふ竹の事である。之を問ふと、例の土地の人またいふ、これは今も事實である。山樹の青い葉が垂れて居り、風に隨つて起き臥する、其の度毎に壇を拂ふは、神に使はれるやうでもある。山の頂に三つの碑がある。難しい古篆文字



である。私達には讀めないし、記憶も出来ない。更に探つて峰の背に出て黄楊子を探斫した。石上に生じ、堅緻にして、其文理はあや衣の如し。なほも見たくて進み行き、千尋の谷を縫り、高きに登ると、はや虎も狼も居らない。深きに入ると、平坦ではあつたが、草樹暗く、雲霞重なつて居る。巖穴の水は石鍾乳のやうで、手を洗ひ口漱ぐと、心胃を清める。衣を洗ひ、斧を磨いて、又石鼻山に分け入る。あちらこちらと迷ふ中に、日も暮れて歸途に就くのが例であつた。首を回せば幾年の昔、今は筋力も衰へて、其の當時伐り残した木の芽孽も臂のやうな大さになつたと、土地の人の物語を聞いて、余は歎息した。神仙はあるであらう、世の勢利を忘れなくては駄目である。貧賤は誰も愛しはしまいが、富貴を愛しては神仙を得られない。棄て去る履を脱するがやうでなくてはならない。我もし黄帝の如くに上天することが出来れば、妻子を棄て去る躡を脱する如しと言つた昔の天子もある。爾もし世間を出て、世間に入らないならば、仙術を得て、たとひ糧を絶つても永世であらう。

【餘論】 一篇の大文、野老を以て結を作せるは、極めて完密又極めて脱洒と古人も評して居る。唐宋詩醇に、帶阜纓轡、屯雲積氣、折之則句鍊字琢、合之則悠悠乎與顛氣以俱、而莫得其涯と評して居る。

巫山廟上下數十里。有烏鳶無數。取食於行舟之上。舟人以神之故。亦不敢害。

巫山廟上下數十里、烏鳶無數ありて、食を行舟の上にと取る、舟人神を以ての故に、亦敢て害せず

羣飛來去噪行人。

羣飛來去して行人を噪がす。

【字解】 一 羣飛 杜詩に、白鷺羣飛太劇乾。 二 噪 行人 西

得食無憂便可馴。

食を得て憂なければ便ち馴るべし。

京雜記に、陸賈曰、乾鵠噪而行人至。

江上飢鳥無足怪。

江上の飢鳥は怪むに足るなきも、

三 頻頻 揚子法言に、頻頻之黨、

野鷹何事亦頻頻。

野鷹何事ぞ亦頻頻。

甚於鵝斯、亦賊二夫糧食二而已矣とある。

鵝斯は山鵝で、頻頻たる黨比の人は、山鵝の羣徒よりも甚しい。好く稻梁を賊するのみである。

【題義】 吳船錄に、凝真觀前有馴鵝、客舟將來則迎於數里之外、舟過亦送數里、士人謂之神鵝とある。入蜀記に、神女祠中有烏數百、送迎客舟とある。此詩は之を詠じたものである。

【詩意】 巫山廟の烏と鳶、無數に飛び去り飛び來つて、行く舟人を惱ます。併し食飽いて憂へがないと馴れる。江上の飢鳥は、其れでよいとしても、野の鷹は何事ぞ、亦頻頻として來去する。

神女廟

神女廟

大江從西來。上有千仞山。

大江西より來る、上に千仞の山あり。

江山自環擁。恢詭富神姦。

江山自ら環擁し、恢詭神姦に富む。

古今體詩 巫山廟上下數十里有烏鳶無數取食於行舟之上 神女廟



深淵鼉鼈橫。巨壑蛇龍頑。  
 旌陽斬長蛇。雷雨移滄灣。  
 蜀守降老蹇。至今帶連環。  
 縱橫若無主。蕩逸侵人寰。  
 上帝降瑤姬。來處荆巫間。  
 神仙豈在猛。玉座幽且閑。  
 飄蕭駕風馭。弭節朝天關。  
 倏忽巡四方。不知道里艱。  
 古粧具法服。邃殿羅煙鬟。  
 百神自奔走。雜沓來趨班。  
 雲興靈怪聚。雲散鬼神還。  
 茫茫夜潭淨。皎皎秋月彎。  
 還應搖玉珮。來聽水潺湲。

深淵鼉鼈橫はり、巨壑蛇龍頑なり。  
 旌陽長蛇を斬り、雷雨滄灣を移す。  
 蜀守老蹇を降し、今に至るまで連環を帯ぶ。  
 縱橫若し主なくば、蕩逸して人寰を侵さん。  
 上帝瑤姬を降し、來りて荆巫の間に處らしむ。  
 神仙豈にあらんや、玉座幽且つ閑。  
 飄蕭風馭に駕し、節を弭して天關に朝す。  
 倏忽四方を巡り、道里の艱を知らず。  
 古粧法服を具し、邃殿煙鬟を羅ぬ。  
 百神自ら奔走し、雜沓來りて班に趨る。  
 雲興りて靈怪聚り、雲散じて鬼神還る。  
 茫茫夜潭淨く、皎皎秋月彎なり。  
 還つて應に玉珮を搖かし、來つて水の潺湲を聽くなるべし。

【字解】 一 神女廟 荆州記に、神女廟在峽之北岸。 二 快詭 大にしてめづらしい。宋史に雖快詭誦怪自晦者、悉以名聞。

【三】神姦 左傳宣公三年に、使民知神姦。 【四】鼉鼈 鼉は海蛇、鼈の一種、鼈は泥龜。 【五】旌陽 許遜字は敬之、旌陽の令となり、官を棄てて、道に入ったこと、は前に出づ。旌陽傳に、旌陽於豫章一少年、謂三門人施太王曰、此屋精宜三巫翦髮、彼今化為黃牛、我當化黑牛以逐之。俄龍沙洲、一黑牛奔赴黃牛而來、太王以劍揮之、中其左股、因投於井。 【六】蜀守降老蹇 神異記に、蜀守李冰降毒龍蹇氏、鎖之於江上、水害遂息焉。 【七】蕩逸 しまりなく恣いまま。漢書の馮衍傳に、蕩逸人間之事。 【八】人寰 人の世、寰は界の意。 【九】飄蕭 風のさびしく吹く貌。杜詩に飄蕭覺素髮とある。ここは神女のさまをいふ。 【一〇】節 旌節と熟し、ハタのこと。 【一一】天關 角星、晉書に、二十八舍東方角二星爲天關、其間天門也、其内天庭也。 【一二】邃殿 奥深い神殿。 【一三】煙鬟 髪美しく黒き形容。 【一四】皎皎秋月彎 入蜀記に、神女峰每八月十五夜月明時、有絲竹之音、往來峯頂、上峰頂一猿皆鳴、達旦方止。

【題義】 神女の事は、宋玉の賦に據ると、本、襄王を諷したものである。後世察しないで、一切兒女子を以て之を襲れしめて居る。廟中の石刻にも、瑤姬、西王母之女、稱雲華夫人、助禹令鬼神、斬石疏流、有功見紀、今封妙用真人といふことが載つて居る。瑤姬は仙術を得、嘗て江上を過ぎ、巫山に留連した時、大禹が水を理めて山下に駐る。大風卒に至つて幾んど制しきれない。姫と相値ひ、拜して助を求めた。姫は侍女に命じて禹を助け、石を斬り波を疏し、塞を決し扼を導き以て其の流に循はしめたので、禹は拜謝したと言ひ傳へて居る。又、禹嘗て之に崇巖の巔で詣でたとき、顧眄の際、化して石となり、倏然として飛騰し、散じて輕雲となり、聚つて夕雨となり、游龍となり、翔鶴となり、千態萬狀、親しむことが出來なかつたといふ傳説がある。大禹の神功は、巫山神女の助に因るといふのが此詩の骨子である。



【詩意】大江が西から來り、千仞の山、上は雲漢に入り、山脚直に江中に挿んで居る。先づ江山から入手して治水を領起する。恢詭富三神姦は、上を承けて下を起す。鼉鼉といひ、蛇龍といふ、皆神姦である。旌陽の令許遜が長蛟を斬ると、忽ち雷雨を起して、滄灣を移し、やがて他處に移り去つた。全く神怪の所爲である。秦の時に、蜀の守李冰が蹇氏の毒龍を降伏して鎖でつなぎ置くと、それから水害がなくなつた。其時の連鑠が今に存在して居るといふことである。蛟龍が縱橫蕩逸するのを其ままにして置き、之を鎮め治める主神がないと、人寰を侵し來つて衆庶の妨害をなすに至るであらう。それ故に、天帝が瑤姬即ち神女を降して此の荊州巫山の間に居らしめた譯である。神女は毒龍を降服したが、本來神仙は決して猛なるものではない。柔は能く剛を制するからである。神女の玉座は幽にして且つ閑であらう。又、神女も天帝に事へるから、風の車に乗り、飄蕭として旗を弭かして天庭に參朝する。風に駕せることであるから、たちまちの間に、四方を巡りて道路の艱難なるを知らない。又、神女の平生は、奥深い神殿に坐して古粧の法服をめされ、周圍には美しい黒髪の女官が神女の眷屬として羅列し、百神は神女の命を畏みて、ここかしこ奔走し、雜沓してそれぞれの職務の班列に就いて居る。其の百神のありさまは、雲の興つたときは、百神の靈怪が聚つたのである。雲の散じたときは百神が還る時である。更に、神女が百神を使つて、雲雨を行つた後、閑暇なときの遊びは、清夜の逍遙である。ひろびろとして夜潭は淨かに、仰ぎ見ると、秋の月は、弓張のさまである。かかる清夜に於ける神女の娛しめは、佩玉を搖かして水邊に來り、潺潺たる清音を聽いて遊ばれることであらう。

【餘論】通篇、水の字を藏して露はさず、末句に至つて水の字を點じて詩旨を明にする。紀昀は、神女詩、不_レ作_二豔辭_一、是本領過_レ人處と評して居る。

過_二巴東縣不泊_一聞頗有萊公遺蹟

巴東縣を過ぎて泊せず、頗る萊公の遺蹟あるを聞く

萊公昔未_レ遇。寂寞在_二巴東_一。  
聞道山中樹。猶餘手種松。  
江山養_二豪俊_一。禮數困_二英雄_一。  
執板迎_二官長_一。趨_二塵拜_一下風。  
當年誰_レ刺史。應_レ未_レ識_二三公_一。

【字解】一、巴東縣 歸州の西六十里、今の湖北荆南道。二、萊公 宋の宰相寇準字は平仲、嘗て官を巴東に守る。同平章事に累遷し、萊國公に封ぜらる。三、禮數 身分相當の待遇、左傳莊公十八年に、名位不同、禮亦異數。四、趨_レ塵拜_二下風_一 晉書に、望_レ塵而拜。左傳僖公十五年、羣臣敢在_二下風_一。

【題義】湖北の巴東縣は、嘗て宋の宰相寇準が令であつた地で、寇萊公の祠がある。祠中の二柏は、公の手植したもので、民は之を甘棠に比する。其故事は、詩の召南に蔽_レ芾甘棠勿_レ剪勿_レ伐、召伯所_レ芟、



とある。召伯が南國を循行して文王の政を布いた時、或は甘棠の下に舍つたが、後人が其の徳を思つて、其の樹を愛し、之を傷けるに忍びなかつたといふことである。仁宗の明道二年(皇紀一六九三年、西曆一〇三三年)十一月、寇準は謫所に死んだ。此詩の結びの處は坡公が隱然自負したもので、萊公を詠じたものでない、古人も評して居る。

【詩意】寇準が昔、まだ志を得ないで、一地方官として巴東縣を守つて居つた時、手植の樹といふがある。公の祠前に在る二柏が其れである。江山は豪俊を養つて、人格を向上させるが、官途の待遇は英雄を一時に屈せしめ、一縣令となつて、束帶笏を執つて官長を迎へ、塵を望んで拜し、常に下風に在る。當年の刺史は誰であつたか、他日盛名高き賢相萊公を認め得なかつたのであらう。(東坡の自ら任ずる所が窺はれる。)

昭君村

昭君村

昭君本楚人。

昭君は本楚の人、

豔色照江水。

豔色江水を照す。

楚人不敢娶。

楚人は敢て娶らず、

謂是漢妃子。

謂ふ是れ漢妃の子と。

【字解】昭君 漢書匈奴傳

に、單于自言願婿漢氏、以自親、元帝以後宮良家子王嬙字昭君、賜單于。豔色 容色美好をいふ。

【三】爲胡鬼 白樂天の昭君詩に、生爲漢宮妃、死作胡地鬼。【四】門楣 陳鴻の長恨歌傳に、當時論詠

誰知去鄉國。

誰か知らん郷國を去つて、

萬里爲胡鬼。

萬里胡鬼とならんとは。

人言生女作門楣。

人は言ふ女を生めば門楣となると、

昭君當時憂色衰。

昭君當時色衰ふるを憂ふ。

古來人事盡如此。

古來人事盡く此の如し、

反覆縱橫安可知。

反覆縱橫安んぞ知るべけん。

有云、男不封侯女作妃、君看女却爲門上楣。楣は梁、門楣は、門戸に光彩あるよりいふ。

【題義】昭君村といふのに二ヶ處ある。一は歸州の興山縣、方輿勝覽に、歸州東北四十里有昭君村とある。一は巫山十二峰の南、神女廟の下に在る。孰れか是なるを知らないが、東坡の此詩は、巫山に在るものを指して居る。王梅溪の昭君村詩に、十二巫峰下、明妃生處村、至今麤醜女、灼面亦成痕とある。劉夢得の竹枝詞にも、昭君村中多女伴、永安宮外踏青回とある。

【詩意】昭君の村は巫山にあるから、昭君は楚の人で、其の美しい容色は、江水を照らしたのである。楚人の娶るを遠慮したのは、漢妃の子とで、畏れ多いといふのであつた。誰か知らん其の妃が、漢宮を去つて、萬里の胡地に没するやうにならうとは、神ならでは知ることが出来ない。人は言ふ、男を生んでも侯に封せられない。女は却て門上の楣となると、昭君の人に羨まれた當時は、ただ容色の衰へるを憂へたものである。人事の定めないこと、率ね此の如くである。運命の反覆し縱横する作



用は、人間の測り知る所でなからう。

新灘

新灘

扁舟轉山曲未至已先驚。

扁舟山曲に轉じ、未だ至らずして已に先づ驚く。

白浪橫江起。槎牙似雪城。

白浪は江を横りて起り、槎牙として雪城に似たり。

番番從高來。一一投澗坑。

番番として高より來り、一一澗坑に投ず。

大魚不能上。暴鬣灘下橫。

大魚も上る能はず、鬣を暴して灘下に横はる。

小魚散復合。澆澗如遭烹。

小魚は散じて復合し、澆澗烹に遭ふが如し。

鷓鴣不敢下。飛過兩翅輕。

鷓鴣敢て下らず、飛過兩翅輕し。

白鷺誇瘦捷。挿脚還敬傾。

白鷺瘦捷を誇り、脚を挿みて還敬傾す。

區區舟上人。薄技安敢呈。

區區舟中の人、薄技安んぞ敢て呈せん。

只應灘頭廟。賴此牛酒盈。

只應に灘頭の廟、此の牛酒の盈つるに賴るべし。

【字解】【一】新灘 石多く流が急で舟行の困難なるを灘といふ。入蜀記に、新灘兩岸、南曰官漕、北曰龍門、龍門水尤灘急多。暗石、官漕差可不行、然亦多銳石、故爲峽中最險處。【二】山曲 江淹の別賦に、怨復怨兮遠山曲、去復去兮長河涓。【三】槎牙 木の枝のかどだちて入りくみし貌。【四】番番 武勇ある貌。【五】暴鬣 鬣は魚肢、文選の謝玄暉の詩に、乘流畏曝鬣。辛氏三

秦記に、龍門大魚集門下、數千、不得得上、故云、暴鬣龍門。【六】澆澗 小水の聲、司馬相如の上林賦に、臨砥注、澆澗賈。【七】鷓鴣 鷓。【八】薄技 司馬遷の傳、使得奏薄技一出、入周衛之中。【九】牛酒 司馬相如傳に、獻牛酒以交驩。

【題義】吳船錄に、歸州下五里至白狗灘、三十里至新灘とある。山が崩れ石が壅いで、此の灘を成し、峽中最險の處。此詩四層を以て舟人を襯起す。

【詩意】遠山の曲、長河の涓、舟は轉轉して流れ行く。未だ新灘に至らないのに、先づ驚いたのは白浪、江を横り、槎牙たる雪城を江中に見たことである。そして如何にも勇ましく水流が谷底に落ちる。大魚も上ることが出来ないで、灘下に魚肢を曝して居る。小魚は散つては聚まり、聚つては又散る。浮きつ沈みつして小水の聲の聞えるは、恰も物を烹るがやうである。鷓も敢て下らないで、翅輕く飛んで行く。鷺は身の瘦捷といふ點を誇り顔に、脚を挿みたり體を傾けたりして居る。舟中の人よ、此際は我が薄技など無遠慮に呈さない。ただ灘頭の廟に牛酒を供へ、驩を交へて、険しい處を離れたいものである。

【餘論】紀昀は、結二句拙、盈字亦押得牽強、と評して居る。

新灘阻風

新灘風に阻る

北風吹寒江。來自兩山口。

北風寒江を吹いて、來る兩山の口よりす。







湍紆廻、雖途經三信宿、猶望見之。行者歌曰、朝發黃牛、暮宿黃牛、三朝三暮、黃牛如故。黃牛廟の下は即ち無義灘で、亂石が中流を塞ぎ、之を望むに畏るべしといふことである。

【詩意】新灘を過ぎて、八十里行くと、黃牛峽である。江水南岸の石壁は高くして、路もない。上に黃牛廟がある。黃牛といへども名のみで、箱を付けた車を引かない。廟前に遊ぶ旅客は、舞の後、鼓を撃ち簫を吹き白羊を屠つて快飲する。山下の耕牛は、石多い瘠地で兩角を崖に磨き四蹄を水に溼して労働しても、青芻半束、饑を醫するに足りない。羨ましいのは山上の黃牛である。

蝦蟇培

蝦蟇培

蟄背似覆孟。蟄頤似偃月。

蟄の背は覆孟に似たり、蟄の頤は偃月に似たり。

謂是月中蟄。開口吐月液。

謂ふ是れ月中の蟄、口を開いて月液を吐く。

根源本甚遠。百尺蒼崖裂。

根源本甚だ遠し、百尺蒼崖裂く。

當時龍破山。此水隨龍出。

當時龍山を破り、此水龍に隨つて出づ。

入江江水濁。猶作深碧色。

江に入りて江水濁り、猶ほ深碧の色を作す。

稟受苦潔清。獨與凡水隔。

稟受苦だ潔清、獨凡水と隔つ。

豈惟煮茶好。釀酒應無敵。

豈にただ茶を煮るに好きのみならん、酒を釀すも應に敵なからるべし。

【字解】

【一】蝦蟇培 蝦蟇一名蟾蜍、培、一に培に作る。荆州記に蝦蟇培在夷陵石鼻山下。歐陽公集自註にいふ、培土人寫作一背字と。【二】覆孟 安きに喩ふ、漢書、東方朔客難、連四海之外、以爲帶、安於覆孟。【三】偃月 ひとひの骨のさま、戰國策に、犀角偃月。【四】月中蟄 姮娥月に奔る、之を蟾蜍といふ。

【題義】蝦蟇培は夷陵石鼻山下に在る。黃山谷いふ、從舟中一望之、頤頂口吻、甚類蝦蟇、尋泉入洞中、寒泉出石骨、若蚪龍吼、水流循蝦蟇背、垂鼻口間、乃入江、と。

【詩意】蝦蟇の背は覆孟のやうで、見るからに安らかである。頤は偃月の如く、額の骨かと思はれる。本是れ月中の蟾蜍である。昔、后羿は長生の藥を西王母に請うたが、其妻の姮娥、盗んで之を食ひ、遂に月宮に奔り、化して蟾蜍となつたといふ傳説がある。月中の蟄、口を開いて月液を吐く、蝦蟇培の根源は、まことに遠い。一旦龍が山を破つて、百尺の蒼崖忽ち裂ける。そこで此の水、龍に隨つて流れ出で、江に入る。江水が濁つても、深碧の色をなして居るは之が爲めである。此水の素質は潔清で、凡水と異なる。茶を煮るによいばかりではなく、酒を釀すにも極上であらう。

出峽

峽を出づ

入峽喜巉巖。出峽愛平曠。

峽に入つて巉巖を喜び、峽を出でて平曠を愛す。

吾心淡無累。遇境即安暢。

吾心は淡くして累なく、境に遇へば即ち安暢。

東西徑千里。勝處頗屢訪。

東西徑千里、勝處頗る屢訪ふ。



幽尋遠無厭。高絕每先上。  
前詩尙遺略。不錄久恐忘。  
憶從巫廟回。中路寒泉漲。  
汲歸眞可愛。翠碧光滿盞。  
忽驚巫峽尾。巖腹有穿壙。  
仰見天蒼蒼。石室開南向。  
宣尼古廟宇。叢木作幃帳。  
鐵楯橫半空。俯瞰不計丈。  
古人誰架構。下有不測浪。  
石竇見天囷。瓦棺悲古葬。  
新灘阻風雪。村落去攜杖。  
亦到龍馬溪。茅屋沾村釀。  
玉虛悔不至。實爲舟人誑。  
聞道石最奇。寤寐見怪狀。

幽尋遠きも厭ふなく、高絶毎に先づ上る。  
前詩尙ほ遺略す、録せずんば久うして忘るるを恐る。  
憶ふ巫廟より回りしとき、中路寒泉漲る。  
汲み歸れば眞に愛すべし、翠碧光盞に滿つ。  
忽ち驚く巫峽の尾、巖腹穿壙あるに。  
仰ぎ見れば天蒼蒼、石室開いて南向す。  
宣尼の古廟宇、叢木幃帳を作し、  
鐵楯半空に横はる、俯して瞰れば丈を計らず。  
古人誰か架構する、下に不測の浪あり。  
石竇に天囷を見、瓦棺古葬を悲しむ。  
新灘風雪に阻てられ、村落去つて杖を攜ふ。  
亦龍馬溪に到り、茅屋に村釀を沾る。  
玉虚至らざるを悔ゆ、實に舟人の爲に誑かる。  
聞道らく石最も奇にして、寤寐に怪狀を見る。

峽山富奇偉。得一知幾喪。  
苦恨不知名。歷歷但想像。  
今朝脫重險。楚水渺平蕩。  
魚多客庖足。風順行意王。  
追思偶成篇。聊助舟人唱。

峽山奇偉に富む、一を得て知る幾か喪ふを。  
苦た恨む名を知らざるを、歴歷但想像す。  
今朝重險を脱すれば、楚水渺として平蕩。  
魚多くして客庖足り、風順にして行意王なり。  
追思して偶篇を成し、聊か舟人の唱を助けん。

【字解】【一】巖。けはしく高き巖、宋玉の高唐賦に、登巖而下望兮。【二】平曠。陶淵明の桃花源記に、土地平曠。【三】無。果。賈誼鵬賦に徳人無果兮。【四】遇。境。一本遇を過に作る。【五】勝處。水經註に、嬉游多萃其上、信爲勝處。【六】盜。説文に、盜、盆也とある。盆は瓦器形似瓶。【七】巫峽尾。夔州志に、巫山在江之濱、形如巫字とある。昔、漁者歌うて曰く、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚霑裳、と。【八】巖腹有穿壙。王維の詩に、巖腹乍穿壙。壙は空洞。【九】宣尼古廟宇。孔子の古廟、王梅溪集に、巴東之西、近江有夫子洞、亦曰聖洞。【一〇】鐵楯。鐵の圍楯。【一一】天囷。星經に天囷十二星主倉廩之屬。【一二】瓦棺。帝王世紀に、舜南征崩鳴條、殯以瓦棺。【一三】龍馬溪。馬鳴溪は夔州に在り、俗に龍馬溪と呼ぶ。昔、土人馬を溪上に牧せしに、龍駒を産す。之を行在所に貢せんとし、溪口に到る。鬣を摸ひ長鳴し、江に躍る。溪以て名くといふ。【一四】村釀。巴郷村の人、善く酒を釀す、故に巴郷清村といふ。【一五】玉虚。洞の名、興山縣の南五十里、唐の天寶五載、其の洞忽ち開く。入蜀記に、玉虚洞去江岸五里許、洞門小、纔袤丈、既入則可容數百人、有石成幢蓋旛旌芝草竹笋仙人龍虎鳥獸之屬。【一六】寤寐。れても覺めても、寤は覺めること、詩の周南に、寤寐求之。【一七】歷歷。分明なる貌、搜神記に、前世之事、歴歷可聞。【一八】王俗に旺に作る、旺盛の意、莊子養生主に、神雖王不善也。

【題義】黃牛峽が盡くれば、則ち扇子峽、吳船録にいふ、過此則峽中灘盡矣、三十里得南岸平地、曰



平善壩、舟出峽至此、人皆相慶如更生、發平善壩三十里至峽州。

【詩意】 峽山は尤も奇、船が峽に入る、兩岸は悉く奇峰、其の險しく高きを喜ぶ。峽を出ると、廣として平遠である。心も淡く、意も暢びる。東西の徑千里、勝地は遠しとして訪ねざるはない、高絶の處も、登り覽る。前詩に漏れた所があるから、又録する、備忘の爲めである。さきに、巫廟から回つたとき、途中に寒泉があつた、翠碧愛すべきである。忽ち巫峽の尾の處、巖腹に空洞があるのに驚かされた。仰いで見ると天は青青として居り、石室が南に向き開いて居る。それは孔夫子の古廟である。叢木が四周し、鐵製の闌檻が半空に横はつて居る。俯して瞰ると何丈あるか分らない。誰が建てたのであらう。下には不測の浪がある。巖穴に天窟を見る。天の倉廩に象つたのであらう。瓦棺のあるは古葬が行はれたものと見える。(夏以前は瓦棺、殷は木棺、周には棺槨が行はれた。昔、舜が崩れたとき瓦棺を以て鳴條に葬つたことが古史に載つて居る。)新灘で風雪に阻まれたから、村落に往いて散策した。又、龍馬溪に到ると、茅屋に村酒を沽つて居る。舟人に誑かれ、玉虛洞に行かなかつたが残念である。聞けば洞石は最も奇で、ねても覺めても、其の怪狀が忘れない。概して峽山の風光は奇偉に富んで、幾んど應接に暇がない。名も記憶出來ないが、ありありと想像される。今朝重險を出ると、楚水が廣々と平和に流れて居る。魚が多くて料理が十分。風が順で遊意も盛んで、記憶を辿つてたまたま此篇を成し、舟中の人の諷唱を助けることとしたのである。

【餘論】 紀昀曰く、出峽詩却寫未出峽事、一到本題、戛然意住、滌河掩映、運意玲瓏、と。

遊三游洞

三游洞に遊ぶ

凍雨霏霏半成雪。

凍雨霏霏として半は雪となる、

遊人屨冷蒼苔滑。

遊人屨冷かにして蒼苔滑かなり。

不辭攜被巖底眠。

被を攜へて巖底に眠らんことを辭せ

洞口雲深夜無月。

洞口雲深くして夜月なし。ざれども、

【字解】 一 三游洞 峽州の上二十里に在る。方輿勝覽に、唐白居易、弟知退及元微之三人遊、故號三游洞。三人が三游洞の記を作つて石壁の上に刻んだから名けた。一説に元次山、白居易、李白三人遊ぶと。

【題義】 白樂天が江州の司馬から忠州の刺史に轉任したとき、弟の知退、友人の元微之と洞に遊び、各古詩二十韻を賦して石壁に書し、吾三人始めて遊ぶを以て、三游洞と名くと記した。東坡も亦、弟轍及び黃庭堅三人と曾て遊んだので此詩がある。

【詩意】 霏まじりの雨がひらひらと降り、半ば雪となつて飛ぶ。洞中寒氣が甚しい、遊人の履も冷たく、青青と苔むした崖は滑かで徑路も行き易からず、被を攜へ來つて此の巖底に眠ることは、固より嫌ふのではないが、雨雪の時、洞口には雲深く、月もないから宿るべきやうもない。



遊洞之日有亭吏乞詩既爲留三絕句於洞之石壁。明日至峽州吏又至意若未足乃復以此詩授之

洞に遊ぶの日、亭吏ありて詩を乞ふ、既に爲に三絶句を洞の石壁に留め、明日峽州に至る、吏又至り、意未だ足らざるが若し、乃ち復此詩を以て之に授く

一徑繞山翠。縈紆去似蛇。

一徑山翠を繞り、縈紆去つて蛇に似たり。

忽驚溪水急。爭看洞門呀。

忽ち驚く溪水の急なるに、争うて看る洞門の呀なるを。

滑磴攀秋蔓。飛橋踏古槎。

滑磴秋蔓に攀ち、飛橋古槎を踏む。

三扉迎北吹。一穴向西斜。

三扉は北吹を迎へ、一穴は西に向つて斜なり。

歎息烟雲老。追思歲月遐。

歎息す烟雲老い、追思すれば歲月遐かなり。

唐人昔未到。古俗此爲家。

唐人昔未だ到らず、古俗此に家を爲す。

洞煖無風雪。山深富鹿豨。

洞煖にして風雪なく、山深くして鹿豨に富む。

相逢衣盡草。環坐髻應髻。

相逢うて衣盡く草、環坐して髻應に髻なるべし。

竈突依巖黑。樽疊就石窪。

竈突巖に依つて黒し、樽疊石窪に就き、

洪荒無傳記。想像在羲媧。

洪荒傳記なし、想像羲媧に在り。

此事今安在。遺蹤我獨嗟。

此事今安くに在る、遺蹤我獨嗟く。

山翁勸留句。強爲寫槎牙。

山翁勸めて句を留め、強ひて爲に槎牙を寫す。

【字解】 一 三絶句 老泉・東坡・子由の詩各一。

二 峽州 十道志に、三峽口地曰峽州、楚蜀分畛。今の湖北宜昌縣治。

三 山翠 唐・裴迪の詩に、雲光侵屐跡。山翠拂人衣。世説に、羊元所居山當戶峯巒奇秀、謂客曰、此翠屏宜晚對、爽人心目。

四 縈紆去似蛇 縈紆は、めぐりまつばる。史通に、列行縈紆以相屬。柳子厚の文に、斗折蛇行明滅可見。【五】 呀 説文に張口貌。玉簫には大空の貌。班固の西都賦に、呀周池而成淵。【六】 滑磴攀秋蔓 なめらかなる石阪。劉禹錫の詩に、塘高秋蔓綠。

七 古槎 古い桴、江總の詩に、古槎橫近澗。【八】 烟雲老 枚乗の七發に、烟雲闢漠。【九】 衣盡草 後漢書の黨錮傳に、解草衣以升卿相。【一〇】 髻應髻 禮記檀弓に、魯婦人之髻而弔也、自敗於狐貍也。南宮縚之妻之姑之喪、夫子誨之髻。魯の婦人の結び髪のまま弔ふは、壺胎の戦に敗れしときかくして弔ひしより始まる。南宮縚の妻の姑の喪に、孔夫子は、之に髻の法を教へた。

二 竈突 かまどの煙だし、淮南子に、孔子無黔突、墨子無煖席、魯連子竈五突、分烟者衆矣。樽疊就石窪、疊は雲雷を畫きし樽。顔真卿石樽聯句に、李公登飲處、因石爲窪樽。【三】 洪荒無傳記 漢書の劉歆傳に、信口説而背傳記。【四】 羲媧 伏羲氏、女媧氏。【五】 槎牙 木の枝のかどだちて入りくみし貌、陸龜蒙の詩に、槎牙費度詞。

【題義】 下牢關を過ぎ、船を繫いで三游洞に登る。石磴を躡む二里、其の險處は、脚を著くべからず。洞の大きさは、三間屋の如し。一穴あり、人を通行せしむるも、陰黒にして畏るべし。山腹を繞り、偃して巖下より洞前に至る。差行くべし。下は溪潭に臨む、石壁二十餘丈、又一穴の後、壁ありて居るべし。鍾乳歲久うして地に垂る、正に穴門に當る。亭吏が詩を乞うたので、此の勝を寫したので





【詩意】山の翠をうねうねと繞れる一徑は、蛇の行くやうである。溪水の急なるに驚いて、やがて洞門の口を張つて居るを見る。蔓草に攀ちて、なめらかなる石の阪路を登り、古い椶を踏んだ。三つの扉は北風を迎へ、一穴は斜に西に向つて居る。烟雲は籠めて歲月退かなるを覺える。唐の人の來たといふ話は聞かないが、昔から住家がある。傳へいふ、洞は煖かた、風雪もなく、山は深くて鹿も牡豕も多い。村の人は、粗衣を著け、結び髪である。烟突は巖につき、酒樽は石の窪を用ひて居る。記録はないが、古い村で、伏羲氏、女媧氏の世が思はれる。今は遺跡に昔を偲ぶばかり、土地の人が詩を所望したから、爲に此の入り組んだことを記したのである。

寄題清溪寺

清溪寺に寄せ題す

口舌安足恃。韓非死説難。  
自知不可用。鬼谷乃真姦。  
遺書今未亡。小數不足觀。  
秦儀固新學。見利不知患。  
嗟時無桓文。使彼二子顛。

口舌安んぞ恃むに足らん、韓非は説難に死せり。  
自ら用ふべからざるを知る、鬼谷は乃ち真姦なり。  
遺書今未だ亡びず、小數觀るに足らず。  
秦儀は固より新學、利を見て患を知らず。  
嗟時に桓文なく、彼の二子をして顛せしむ。

死敗無足怪。夫子固使然。

死敗怪むに足るなし、夫子固より然らしむ。

君看巧更窮。不若愚自安。

君看よ巧更に窮るは、愚にして自ら安んずるに若かざるを。

遺宮若有神。領首然吾言。

遺宮若し神あらば、首を領して吾言を然りとせん。

【字解】

【一】清溪寺 東坡自註に、在峽州、鬼谷子之故居。鬼谷先生傳に、楚有清溪、下深千仞、其水靈異。【二】口舌安足恃 漢書婁敬傳に、上怒罵敬曰、齊虜以舌得官、乃妄言沮吾軍。【三】死説難 史記に、韓非者、韓之諸公子也、作孤憤、五蠹、

内外儲、説林、説難十餘萬言。然韓非知説之難、爲説難、書甚具、終死於秦、不能自脱。【四】鬼谷 蘇秦、張儀、俱に鬼谷先生に事へて術を學ぶ。秦、儀、道の未だ行ふに足らざるを知り、復、往いて見る。先生曰く、子の爲に至道を言はんと、齋戒日を擇ばしめ

二子に告ぐるに全身之道を以てした。【五】遺書今未亡 劉向七略に、鬼谷子の書あり。隋書志に、鬼谷子三卷を載す。【六】小數 不足觀 柳宗元曰く、漢時無鬼谷子、鬼谷子後出、學者宜其不道。【七】秦儀固新學 文心雕龍に、新學之銳、則逐奇而先正。

【八】桓文 齊の桓公、晉の文公。【九】巧更窮 文心雕龍に、轉丸聘其巧辭、飛鉗伏其精術。丸を轉すは極めて容易。鉗はクビカ

セ。【一〇】領 説文に、低頭也。

【題義】清溪は峽州遠安縣の南六十里にあつて、源を清遠山下より發すといふことである。郭璞遊仙の詩に、清溪千仞餘、中有二道士、借問是何人、云是鬼谷子。寄題といふは、其の地に至らないで題

詠する意である。

【詩意】口舌は恃むに足らない、韓非子も遊説の難しいことを説いて、遊説に死んだ。鬼谷先生の自ら用ふべからざるを知りつつ人に授けるは、眞の姦である。鬼谷子の書は今に傳はつて居るが、要するに小道で、觀るに足らない。之に師事した蘇秦も張儀も、固より新學で、ただ利を見て、患を知らな



い。ああ時に齊桓の如き晉文の如き霸者は居らないから蘇、張の二子をして顛せしめた。二子の死敗は、怪しむに足らない。自ら招いたのである。して見ると、巧をますます窮めるのは、愚を守つて自ら安んずるに若かない。鬼谷の遺宮にしてみてもし神靈があれば、首を領して吾が言を然りとするであらう。

【餘論】紀昀いふ、鬼谷乃真姦、意好而語未工。

留題峽州甘泉寺

峽州の甘泉寺に留題す

輕舟橫江來。弔古悲純孝。

輕舟江を横つて來り、古を弔うて純孝を悲しむ。

透迤尋遠路。婉孌見遺貌。

透迤として遠路を尋ね、婉孌として遺貌を見る。

清泉不可挹。涸盡空石窖。

清泉挹むべからず、涸れ盡して空しく石窖。

古人飄何之。惟有風竹開。

古人飄として何くに之く、惟風竹の開しきあり。

行行翫村落。戶戶懸網罩。

行行村落を翫ぶ、戶戶網罩を懸く。

民風坦和平。開戶夜無鈔。

民風は坦にして和平、戸を開くも夜鈔なし。

叢林富筍茹。平野絕虎豹。

叢林筍茹に富み、平野虎豹を絶つ。

嗟哉此樂鄉。母乃姜子教。

嗟哉此の樂郷、乃ち姜子の教なからんか。

【字解】甘泉寺 姜詩の故居と傳ふるも、信じ難し。姜詩は廣漢（今の四川遂寧縣の東北）の人である。母に事へて至孝。

【一】純孝 左傳隱公元年に、君子曰、穎考叔、純孝也。

【二】婉孌 年若く、美しい、詩の齊風に、婉孌兮、總角卅兮。

【三】石窖 窖は、穴ぐら。月令に穿三寶窖、註にいふ、入レ地方曰

【四】行行 古詩に、行行且行行、與君生別離。

【五】戶戶懸網罩 王建の詩に、聽聽戶戶院相當。李義山の詩に、戶盡懸秦網。罩は魚を捕ふる籠。

【六】無鈔 鈔は略取すること、説文に、鈔、又取也。後漢書の高句驪傳に、鮮卑滅額、連年寇鈔。

【七】筍茹 茹はたけのこの根のひき連なるよりいふ。

【八】平野 梁簡文帝の銘に、遼遼平野。

【九】嗟哉 馬援の詩に、嗟哉武溪兮多毒淫。

【題義】東坡自註にいふ、甘泉寺、姜詩故居、と。歐陽修が詩の自註に、甘泉寺在臨江一山上、與縣解

相對、寺有清泉一泓、俗傳爲姜詩泉、亦有姜詩祠云云、と。姜詩は廣漢の人であるから、姜詩の泉

が此にある筈はない。入蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至三孝

婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜

詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水

を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞

を市ひ、鄰母をして其の姑に遺らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得

て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱸を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。

舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが

出來たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。



【詩意】輕舟江を渡つて遠路を厭はないで甘泉寺に來り、姜詩夫妻の古へを弔うて、其の純孝を悲しむ。年若くて美しかった孝子が昔の容貌を偲ぶ。清泉は挹むことが出來なく、石窖には水もない。姜詩夫妻は何處へ之きしか。ただ風や竹のさわがしい音がするのみ。行き行いて村落を見舞ふと、戸毎に捕魚の網や籠が懸つて居る。風俗は平和で、戸を閉ぢないでも盜難がない。叢林には筍が多く、野原には虎豹の跡を絶つて居る。ああ此の楽しい郷、これは純孝姜子夫妻の感化でもあらう。

夷陵縣歐陽永叔至喜堂

夷陵縣歐陽永叔の至喜堂

夷陵雖小邑自古控荆吳。

夷陵は小邑と雖も、古より荆吳を控ふ。

形勝今無用英雄久已無。

形勝今用ゐるなく、英雄久しく已に無し。

誰知有文伯遠謫自王都。

誰か知らん文伯あるを、遠謫王都よりす。

人去年年改堂傾歲歲扶。

人去つて年年改り、堂傾いて歳歳扶く。

追思猶咎呂感歎亦憐朱。

追思猶ほ呂を咎め、感歎亦朱を憐む。

舊種孤楠老新霜一橘枯。

舊種孤楠老い、新霜一橘枯る。

清篇留峽洞醉墨寫邦圖。

清篇峽洞に留め、醉墨邦圖を寫す。

故老問行客長官今白鬚。

故老行客に問ふ、長官今は白鬚。

著書多念慮許國減歡娛。

書を著はして念慮多く、國に許して歡娛を減す。

寄語公知否還須數倒壺。

語を寄す公知るや否や、還須く數壺を倒すべし。

【字解】

【一】夷陵縣 史記白起傳に據るに、白起攻楚拔郢都、明年拔夷陵、楚王亡去、秦以郢都爲南郡。歐陽修至喜堂記に、夷陵者、楚之西境、昔春秋書荆、以狄之、而詩人亦曰蠻荆。峽州にも至喜亭あり、歐公亦之が記を爲る。【二】形勝 地勢のすぐれたるところ、史記高祖記に秦形勝之國、南史劉善明傳に、國之形勝。【三】文伯 梁肅は、常州刺史獨孤及の狀に達言發辭、若山嶽之峻極、江海之波瀾、故天下謂之文伯。【四】遠謫 歐陽修の傳に據るに、入朝爲館閣校勘、范仲淹以言事貶、在廷多論救、司諫高若訥、獨以爲當黜、修貽書責之、謂其不知復人間有產恥事、若訥上其書、坐貶夷陵令。【五】咎呂 呂は呂夷簡を指す、史に稱す、呂夷簡爲相成郭后之讐、逐孔道輔、范仲淹於外、時論少之、歐陽之貶、由救仲淹也、と。【六】憐朱 東坡自註に、時朱太守爲公築此堂。宋史に、景祐二年（皇紀一六九五、西曆一〇三五年）朱慶基以郎中出守峽州。【七】舊種孤楠老 至喜亭新に北軒を開き、手から楠木を植うる詩に、爲憐碧砌宜佳樹、手刷蒼苔選綠叢。【八】一橘枯 歐陽修夷陵縣至喜堂記に、有橘柚茶筍四時之味。又、戲答元珍詩に、殘雪壓枝猶有橘。又、夷陵書事詩に、綠叢紅橘最宜秋。【九】清篇留峽洞云云 三游洞に歐公の詩があり、夷陵圖後、歐公の題詩がある。行客、東坡自らいふ。【一〇】許國 晉書陸玩傳に、以身許國。

【題義】

宋仁宗の景祐三年に、歐陽修が貶謫されて夷陵に來つた。峽州の太守朱慶基は、歐公と親しかつたので縣舎に來り、其の廳事の東を擇らんで作つたのが此至喜堂である。歐公の言に、凡爲吏者、莫不始來而不樂、既至而後喜也、作至喜堂記藏其壁と。之に共鳴したのが此詩である。

【詩意】峽州は小州、夷陵は下縣であるが、大江に濱して、南は楚、東は吳を控へ、古から地勢のすぐれた土地である。併し其の形勝は今に用なく、英雄も久しく出ない。歐陽公のやうな文伯が遠く王



都とから此地このちに謫たくせられやうとは誰たれも思おもはなかつたであらう。公こう去きつて年ねん改あらたまり公こうの堂だうが傾かたむいて、歳さい扶たすける。公こうを思おもうては、時ときの宰相さいしやう呂夷簡りゐかんを咎とがめ、公こうを慕慕うては、峽州かふしうの太守たいしゆ朱慶基しゆけいきが公こうの爲ために作つくられた至喜堂しきだうに及およぶ。舊植きうしつゑた楠木なんぼくも老おい、當時たうじの橋はしも新霜しんそうに枯かれた。三游洞さんゆうどうに、歐公おうこうの詩しがあり、夷い陵りやう圖づ後ごにも、公こうの筆蹟ひつせきがあり、土地とちの老人らうじん等は余よに歐公おうこうの事ことを問とうたから、余よは答こたへた、昔むかしの長官ちやうくわんは今いまは白髮はくはつとなり、頻しきりに書しよを著あらして千載せんざいの憂うれを述のべ、身みを以もつて國くにに許ゆるして安逸あんいつを貪むさらないと。さて更あらためて遠とほく語ごを寄よす、公こう知しるや否いなや、また、しばしば酒壺しゆこを倒たふされることありませう。

# 蘇東坡詩集 卷二

## 古今體詩 三十九首

### 息壤詩 息壤詩

淮南子みなんじ曰いはく、鯀こん、洪水こうすゐを湮ふぎ、帝ていの息壤そくじやうを盗ぬすむ、帝てい祝融しゆくゆうをして之これを羽淵うえんに殺ころさしむ。今いまの外そと。有あり状じやう若じやく屋宇おくう。陷おち入い地中ちちゆう。而しか猶なほ見み其脊せき者もの。旁かたはら有あり石いし。云いふ。不可い犯を。畚鍤ほんさふ所ところ及およ。輒しか復また如ごと故こ。又また頗すこ以もつ致いた雷雨らいう。歲とし大おほ旱ひでり。屢しばしば發は有あり應おう。予われ感かん之を。乃すなは爲ため作つく詩し。其辭そのことば曰いはく、

【訓讀】淮南子みなんじに曰いはく、鯀こん、洪水こうすゐを湮ふぎ、帝ていの息壤そくじやうを盗ぬすむ、帝てい祝融しゆくゆうをして之これを羽淵うえんに殺ころさしむ。今いまの荆州南門けいしゆうなんもんの外そとに、状屋宇かたちおくうの若ごとく、地中ちちゆうに陷おち入いして猶なほ其脊せきを見みすものあり。旁かたはらに石いしあり、云いふ。犯をすべからず、と。畚鍤ほんさふの及およびし所ところ輒またち復また故この如ごとく。又また、頗すこる雷雨らいうを致いたすを以もつて、歲とし大おほに旱ひでりすれば、屢しばしば發はいて應おうあり。予われ之これに感かんじ、乃すなはち爲ために詩しを作つくる。其その辭ことばに曰いはく、

【字解】【一】淮南子 書名。前漢の淮南王劉安撰し、二十一卷ある。【二】息壤 湖北江陵縣の南にあり。即ち山海經の鯀竊帝之息壤、以湮洪水之處也。【三】祝融 火の神、左傳昭公二十九年に、火正曰祝融。【四】羽淵 羽山の上に二泉あり、會して羽



潭となる、即ち羽淵。左傳に、其神化爲黃熊、入於羽淵とあるもの。羽山は山東鄒城縣の東北に在る。【五】斧鉞、斧は土を盛る器、鉞はスキ、晉書に、斧鉞相尋、干戈不休息。

帝息此壤。以藩幽臺。帝此の壤に息し、以て幽臺を藩にす。

有神司之。隨取而培。神あり之を司り、隨つて取りて培ふ。

帝敕下民。無敢或開。帝下民に敕し、敢て或は開くことなからしむ。

惟帝不言。以雷以雨。惟れ帝言はず、以て雷し以て雨ふらす。

惟民知之。幸帝之怒。惟れ民之を知り、帝の怒らんことを幸ふ。

帝茫不知。誰敢以告。帝茫として知らず、誰か敢て以て告ぐる。

帝怒不常。下土是震。帝の怒は常ならず、下土是れ震はし、

使民前知。是役於民。民をして前知せしむ、是れ民を役す。

無是墳者。誰取誰干。是の墳なくば、誰か取り誰か干さん。

惟其的之。是以射之。惟れ其の的にす、是を以て之を射る。

【字解】【一】幸帝之怒。怒はもと怒に作る、一説に恕字似當作怒、今之に従ふ。

【題義】錦繡萬花谷といふ書（宋孝宗時代の著）に、江陵南門外、甕門内東垣下有二小瓦堂、室一所、高三尺許、此息壤也、禹鑄石造龍之宮室置穴中、以塞水脈と見えて居る。洪水が天に滔り、鯀は

帝の息壤を竊んで以て洪水を堰ぐ、帝乃ち祝融をして羽山に殺さしめたといふのが傳説で、此の傳説に本いて此の詩が出来たのである。游宦紀聞といふ書（宋の張世南撰、十卷ある）に、溟洪録を引いて、江陵南門有息壤、開元中、裴宙牧荆州、掘得石城徑六尺八寸、是年霖雨不止、復埋之而水止、と見えて居る。

【詩意】天帝が此の壤に息ひて、地中の臺を藩とした。神が之を司どり、之に培うた。天帝が下民に仰せがあつて、之を開かないやうにしたが、天帝は物言はない、雷を鳴らし雨を降らして其の意を表はされる。民は之を善いこととし、旱の時など、特に天帝の大に怒られるやうにと幸つてしきりにお祈りする。併し天帝の怒りは、何日何時發するか少しも分らない。其の都度下土を震はし民を前知せしめる。是は畢竟、民を役することになる。ああこの墳がなければ、之を取るものもないし、之を干すものもない譯である。的があればこそ之を射るものも生ずるのである。

荆州 十首

荆州 十首

游人出三峡。楚地盡平川。

游人三峡を出れば、楚地盡く平川。

北客隨南賈。吳檣間蜀船。

北客南賈に隨ひ、吳檣蜀船を間ふ。

江侵平野斷。風捲白沙旋。

江は平野を侵して斷え、風は白沙を捲いて旋る。



欲問興亡意。重城自古堅。興亡の意を問はん欲すれば、重城古より堅し。

【字解】(一) 荆州 太平寰宇記に、荆州江陵郡屬、山南東道、楚郢都、秦爲南郡、即今州也とある。宋は江陵府となし、元は中興路と改め、明は荆州府となす。清、之に由り湖北省に屬す。民國の江陵縣は、即ち舊府治である。(二) 三峽 巫峽・瞿塘峽・西陵峽であることは前にも述べた。併し、一定しない。太平寰宇記には、西峽・巫峽・歸峽。峽程記には、明月・廣溪・仙山。或は瞿塘・盡源・巫山を三峽とし、或は州境の明月峽・黄牛峽・西陵峽を三峽とする。(三) 重城 左傳哀公七年に、民保於城、城保於德。唐書に、大河以北無堅城。

【題義】宋、仁宗の嘉祐五年(皇紀一七二〇年、西曆一〇六〇年)正月に、東坡は弟子由と父老泉に侍して荆州から大梁に遊んだ。荆州十首は、其時の作である。第七首に、殘臘多風雪の句がある所を見ると、十首は、一時の作ではない。第一首は、總起である。

【詩意】遊人が三峽を出ると、險阻既に遠く、楚の地は、盡く平川である。人も物も四方から輻湊し、北客は南賈に隨ひ、吳檣に蜀船が間つて居る。江は平野を斷ち、風は白沙を捲きあげる。昔、禹が始めて城を作り、強者は攻め、弱者は守り、敵者は戦ふとか。興亡の意はと問はば、城を堅くするが第一と答へやう。重城は古より堅いのである。

南方舊戰國、慘澹意猶存。

南方舊戰國、慘澹意猶存す。

慷慨因劉表、淒涼爲屈原。

慷慨は劉表に因り、淒涼は屈原の爲なり。

廢城猶帶井、古姓聚成村。

廢城猶ほ井を帶び、古姓聚りて村を成す。

亦解觀形勝、昇平不敢論。

亦解く形勝を觀、昇平敢て論せず。

【字解】(一) 慘澹 心を痛め動かす、杜詩に慘澹苦志志。(二) 慷慨 いきどほりなげく、後漢書、齊武王續傳に性剛毅慷慨。(三) 劉表 字は景升、後漢高平の人、曹操の袁紹と官渡に相持するや、紹、助を表に求む、表之を許して未だ授はす。紹敗れ、操、自ら將として表を征す、未だ至らざるに、表は疽が背に發して死す。(四) 淒涼 さむしくいたむ、李白の詩に、覽古情淒涼。寂寥の意にも用ふ、杜甫の詩に、江海日淒涼。(五) 屈原 屈平字は原、楚の同姓、江南に遷され、天を授き聖を引き、以て自ら明にせしも、終に省られず。清白を以て久しく濁世に居るに忍びず、遂に汨羅に投じて死す。(六) 帶井 易に改邑不改井。古姓成村、村は聚落。太平寰宇記に、武昌郡六姓、吳・伍・程・史・龍・鄧。武陵郡三姓、卞・伍・龔。(七) 解 能の義に用ゐること、詩に多い。唐詩に解放胡鷹、逐塞馬、能騎代馬、獵秋田などある。平仄の便にて能と用ゐるが多いが、本義は能よりも重い。

【詩意】首を回せば、南方の古國、慘として心を痛ましめる。劉表が袁紹の乞を許して、援を與へない。紹が曹操に敗られ、表も亦、曹操に征せられ、其の軍の到らない内に、表は疽が背に發して死んだ。劉表の古土を訪ふと、慷慨を禁ずることが出来ない。屈原の清白を以てしては、逆も濁世に容れられない。淒涼の念が自ら起るのである。廢城には昔ながらの井戸が存し、古來の人人が今に聚落をなして居る。靜に天下の形勢を觀て、敢て輕しく昇平を論じない。(また高常侍が、豈邊を安んずるの策なからんや、諸將は已に恩を承くとの意である。)

【餘論】紀昀は此詩を評して、結は即ち高常侍が豈無安邊策、諸將已承恩の意であると言つた。高適の葡中作に、策馬自沙漠、長驅登塞垣、邊城何蕭條、白日黃雲昏、一到征戰處、每愁胡馬翻、豈無



安邊書、諸將已承恩、惆悵孫吳事、歸來獨閑門。とある。諸將が邊を防ぐを知らないから、策ありと雖も、陳すべきなし。天下僭賞と言はないで、主將承恩といふ、人をして言外に之を思はしめる。

楚地闊無邊、蒼茫萬頃連。

楚の地は闊うして無邊、蒼茫として萬頃連る。

耕牛未嘗汗、投種去如捐。

耕牛未だ嘗て汗せず、種を投じて去てて捐つるが如し。

農事誰當勸、民愚亦可憐。

農事誰か當に勸むべき、民の愚亦憐むべし。

平生事遊惰、那得怨凶年。

平生遊惰を事とす、那ぞ凶年を怨むを得む。

【字解】

【一】楚地 元和郡縣志に、春秋以來、楚國之都、謂之郢都、西接巴巫、東連雲夢。【二】無邊 廣くして限りなし、郭景純の江賦に、察之無象、尋之無邊萬頃連、前漢刑法志に、提封萬井、同、食貨志に、地方百里、提封九萬頃、提封は知行の地。【三】耕牛 事物紀原に、漢武帝以趙過爲搜粟都尉、教民耕種、三犁共一牛、一人將之。【四】農事誰當勸 左傳昭公十七年、九扈爲九農正。註にいふ、以九扈爲九農之號、各隨其宜、以教民事。【五】平生事遊惰 太平寰宇記によるに、楚人多剽悍、唐至德之後、流備爭食者甚衆、五方雜居、風俗大變、最尙廢業、耗民莫甚於此。

【詩意】

楚の地は、西は巴巫に接し、東は雲夢に連り、蒼茫として涯を知らない。耕作に骨も折らなければ播種の事も務めない。民の愚は寧ろ憐むべく、ただ日に遊惰を事として居る。これでは生活の安定を得る筈はないから、凶年を咎める譯にもゆくまい。

【餘論】

紀昀は此詩を三四太拙、後四句亦太直、十首中如三月之累と評して居る。

朱檻城東角、高王此望沙。

朱檻城の東角、高王此に沙を望む。

江山非一國、烽火畏三巴。

江山一國にあらず、烽火三巴を畏る。

戰骨淪秋草、危樓倚斷霞。

戰骨秋草に淪み、危樓斷霞に倚る。

百年豪傑盡、擾擾見魚蝦。

百年豪傑盡き、擾擾として魚蝦を見る。

【字解】

【一】望沙 荆州志に、城東南有望沙樓、後梁時、高季興、建以望沙津、陳堯咨知荆州、更名仲宣樓。五代史に、南平世家、高季興於後梁開平二年、爲荆南節度使、末帝時封渤海王。後唐莊宗同光二年封南平王、子從誨嗣封父爵。高從誨が晉使陶穀を望沙樓に宴せし、とも五代史に見ゆ。【二】江山非一國 五代史に、南漢與閩、蜀皆稱帝、從誨所向稱臣。故に公の詩に、江山非一國の語あり。【三】三巴 常璩の華陽國志に、劉璋改永寧爲巴郡、以固陵爲巴東、徙龐羲爲巴西太守、是爲三巴。【四】戰骨淪秋草 江淹の恨賦に、試望平原、蔓草縈骨、拱木斂魂。張籍の詩に、年年戰骨多秋草。【五】危樓 高い樓、岑樓、雲樓、皆同じ、陰鏗の詩に、接路上危樓。【六】百年豪傑盡 續通鑑長編に、乾德元年、高繼沖奉表來歸、自先生作詩時、上溯至高季興封渤海王、蓋百三十餘年矣。【七】擾擾 紛擾の意、國語に、唯有諸侯、故擾擾焉。

【詩意】 杜子美の詩に、滂沱朱檻溼とあるが、其の朱塗の欄干は城東の角にある望沙樓である。高從誨は、晉の使である陶穀を此の樓に宴したことは歴史に名高い。當時、南漢も閩も蜀も皆、僭號して帝と稱した。從誨は、向ふ所、臣と稱したので、この江山は、晉にも屬し、南漢にも閩にも又蜀にも屬してゐたというてもよからう。警報をする烽火は、巴郡・巴東・巴西の來寇を畏れるからである。戰場に曝した骨は、秋草に没し、高樓は空しく斷霞に聳えて居る。當年の豪傑一時に僭號したのも、



今は紛紛亂離の跡を遺したまで、魚蝦の水中にあるに異らない。

【餘論】 查初白曰く、此詩因南平而致慨於五季也。季興初爲荆南節度、所領止江陵、歸峽三城、地狹而兵弱、難與諸國爭衡、父子祖孫、與五代相終始。是時楊李擅吳、王氏保閩、劉氏鷓張于南粵、王孟跳梁于蜀中、莫不帝制自爲、志圖兼并、獨高氏所向稱臣、未幾而強弱大小、同歸澌滅、百年以來、戰骨已銷、孤城猶在、千秋形勝之區、惟危樓倚斷霞耳、一時豪傑自命者、細瑣么麼、無足比數、魚蝦擾擾一語、說得五代君臣及僭號諸國、可憐可憫、可鄙可羞、と。解して得て明快である。

沙頭烟漠漠。來往厭喧卑。

沙頭烟漠漠、來往喧卑を厭ふ。

野市分聲鬧。官船過渡遲。

野市聲鬧を分ち、官船過渡遅し。

遊人多問卜。僮叟盡攜龜。

遊人多く卜に問ふ、僮叟盡く龜を攜ふ。

日暮江天靜。無人唱楚辭。

日暮れて江天靜に、人の楚辭を唱ふるなし。

【字解】 一 沙頭 沙市ともいふ、今の湖北江陵縣城南十五里に在る。荆州志には、沙頭市在江陵縣東北十五里。元微之の江陵玩月詩に、闕咽沙頭市。二 厭 喧卑 鮑明遠の舞鶴賦に、去帝鄉之岑寂、歸大寰之喧卑。三 僮叟 田舎もの、晉書左思の傳に、陸機與弟雲書曰、此間有僮父、欲作三都賦。僮叟は即ち僮父の意。吳人は中州人を僮といふ。四 攜龜 楚人の尙巫を譏つたのである。龜は龜卜の龜、史記に三王不同龜、四夷各異卜、然各以決吉凶。褚少孫補史記に、南方老人用龜支牀足。

【題義】 沙頭市の所見を寫したものである。紀昀は譏古風之不作也と評して居る。

【詩意】 湖北の沙頭市、烟は市を籠めて漠漠、來往の人で雜沓厭ふべきである。市場は塵（塵といふ鹿の屬）の羣つたやうに喧しいのに、官船の渡も遅い。ここに遊ぶ行客は、多く卜者に身の上を占つてもらひ、田舎のものは盡く龜を所持して居る、日が暮れて江天の靜かなる頃になつても、また古の屈原・宋玉などの楚辭を唱へるやうな氣高いものはない俗地である。

太守王夫子。山東老俊髦。

太守王夫子は、山東の老俊髦。

壯年聞猛烈。白首見英豪。

壯年猛烈を聞き、白首英豪を見る。

食雁君應厭。驅車我正勞。

雁を食うて君應に厭くべし、車を驅つて我正に勞す。

中書有安石。慎勿賦離騷。

中書安石あり、慎んで離騷を賦すること勿れ。

【字解】 一 王夫子 東坡全集に、上荆州王兵部書、與王刑部書がある。二人は皆、荆州の守であり、又姓を同うして居るが、其の名字が傳はらない。二 俊髦 髦は毛中の長毛、故に才徳の衆に秀でたるに喩ふ。爾雅の註に、士中之俊、猶毛中之髦。三 食雁君應厭 後漢の王符傳に、皇甫規解官歸安定、鄉人有以貨得雁門太守者、亦去職還家、書刺謁規、規臥不迎、既入而問、卿前在郡食雁美乎。四 中書有安石云云 時相を指す。安石の如きあれば、王夫子は、屈原のやうに放逐されて離騷を作るなどのことはなからう。晉の謝安傳に、安石爲尙書僕射、領吏部、加後將軍及中書令。五 離騷 屈原の辭賦。史記屈原傳に、憂愁幽思而作離騷、離騷者、猶離憂也。離は遭ふといふ意。



【詩意】 荆州の王夫子は、山東の老俊傑で、壯年の時は、猛烈で聞え、白首になつても英豪として知られる。昔、皇甫規が官を辭して郷に歸つた時、同じく郷人が、これは金の力で雁門の太守となつたものがあつた。名刺を通じて規に會つた。規は君は郡に在つて雁を食つて美かつたかと尋ねたさうである。此故事により、雁を食うて君は應に厭くべし、車を驅つて我は正に勞するといふのが王夫子の志であらう。幸ひ、今は善い宰相が居られるから、君は出でて仕ふるべく、屈原のやうに不平の文句を言つてはならない。

【餘論】 紀昀は此詩を夾此一首章法生動、從下杜公游何氏山林一詩、萬里戎王子一首得法と評して居る。杜の陪鄭廣文一遊何將軍山林一十首中の一首は、萬里戎王子、何年別三月支、異花開絶域、滋蔓匝清池、漢使徒空到、神農竟不知、露翻兼兩打、開拆日離披、である。

殘臘多風雪。荆人重歲時。

殘臘風雲多く、荆人は歲時を重んず。

客心何草草。里巷自嬉嬉。

客心は何ぞ草草、里巷自ら嬉嬉。

爆竹驚鄰鬼。驅儼聚小兒。

爆竹鄰鬼を驚かし、驅儼小兒を聚む。

故人應念我。相望各天涯。

故人應に我を念ふべし、相望む各天涯。

【字解】 一、殘臘、窮臘といふに同じ。冬至の後、第三の戌の日に、百神を合せ祭るを臘祭といふ。臘祭は年末に行ふから、臘月は陰曆十二月の異名となる。二、重歲時、荆楚歲時記に、歲暮家具肴歡、留宿歲飯、至新年十二日、棄之街衢、以爲去故

納新。こゝは汎く楚人の時節を重んずるをいふ。三、草草、心を勞する貌。詩の小雅に、驕人好好、勞人草草。杜詩に、聞君適萬里、取別何草草。四、嬉嬉、欣び笑ふ聲。皮日休の詩に、幾日嬉嬉活。五、爆竹、驅儼、荆楚歲時記に、正月一日、鷄鳴而起、先於庭前爆竹、以避山臊惡鬼。東方朔の神異經によると、西方深山中に人あり、其の長尺餘、一足、性人を畏れず。之を犯せば人をして寒熱せしむ。名けて山臊といふ。竹を以て火中に著け、淋煙聲あれば、山臊驚懼す。鬼は金姑の聲を惡む、閩人は爆竹の聲を謂ひて金姑の聲となす。驅儼は呂氏春秋の註に、歲前一日、擊鼓驅疫、謂之逐除。

【詩意】 歲が暮れて、風雪も多いので、外から來た人は心を勞してせわしないが、歲時を重んずる此里では嬉嬉として喜んで居る。山臊や惡鬼を驚かす爆竹の音や、陰曆十二月の八日に、村人が太鼓を撃ち、金剛力士を装うて逐疫することも、賑やかである。遠く離れて居る吾が友も、我が彼を思ふやうに、彼も亦、我を念うて居られるであらう。各、天の一方に相望んで居る。

【餘論】 楚の人は歲時の風俗を重んず。爆竹も驅儼も、昔ながらに行はれて居る。時節の移り行く毎に、故人は應に我を念ふであらうといふのが此詩である。紀昀は此詩を一結不脱自己、方不是泛陳風土と評して居る。

江水深成窟。潜魚大似犀。

江水深うして窟を成し、潜魚大にして犀に似たり。

赤鱗如琥珀。老枕勝玻瓈。

赤鱗琥珀の如く、老枕玻瓈に勝れり。

上客舉雕俎。佳人搖翠篋。

上客は雕俎に擧げ、佳人は翠篋を搖す。



登庖更作器。何以免屠割。

庖に登せ更に器に作る、何を以て屠割を免れん。

【字解】【一】赤鱗如琥珀。本草に、青魚生江湖間、多以作酢、所謂五侯鯖也。其頭中枕骨蒸令氣通曝乾、狀如琥珀。爾雅に、魚枕謂之丁。註にいふ、枕在魚頭骨中、形似篆書丁字。江淹の別賦に、聳淵魚之赤鱗。【二】老枕勝玻瓈。劉禹錫の詩に、老枕知將雨。溫庭筠の詩に、玻瓈枕上開天雞。【三】翠篋。篋は玉箱に篋篋。【四】屠割。割も屠る意、或は剉に作る。

【題義】詩の周頌に、猗與漆沮、潛有多魚とある。漆水、沮水は川の名、潛は魚を取る仕掛である。潛に魚が多い。郭璞の江賦に、或鹿筋象鼻、或虎狀龍顏、鱗甲璣錯、煥爛錦斑とある。鹿のひたひ、象の鼻、虎の狀、龍の顏、鱗甲が間雜し、照り輝いて、錦の如く斑といふ意である。夫れで庖に登せられ、器に作らる。多材は累を爲すの感を寓せたのが此詩である。

【詩意】江水は深く孔穴をなし、其の潛に居る魚は肥えて大きく犀のやうである。其の鱗は赤くて琥珀の如く、其の頭骨中の枕は、玻瓈にも勝つて居る。それで上客は之を雕めた俎に擧げ、佳人は之を翠色の釵にする。料理され、器物に作らる。何れにしても屠られる。材多ければ身を累はす類であらう。

北雁來南國。依依似旅人。

北雁南國に來り、依依として旅人に似たり。

縱橫遭折翼。感惻爲沾巾。

縱橫遭うて翼を折り、感惻して爲に巾を沾す。

平日誰能挹高飛。不可馴。

平日誰か能く挹ぐ、高飛して馴るべからず。

故人持贈我。三嗅若爲珍。

故人我に持贈す、三たび嗅ぐ若爲なる珍ぞ。

【字解】【一】北雁。韓退之の詩に、嗷嗷鳴雁鳴且飛、窮秋南去春北歸。【二】依依。離れるに忍びない意。楚辭の九思に、志戀戀兮依依。【三】折翼。漢の息夫躬が絶命詞に、冤頸折翼庸得往兮。【四】沾巾。張衡の四愁の詩に、側身北望涕沾巾。【五】高飛。九域志に、韓憑妻何氏美、宋康王欲之、何氏歌曰、南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、羅當奈何。【六】持贈。持ち行きておくる、陶弘景の詩に、不堪持贈君。

【詩意】南に去り北に歸る雁がねは、依依として旅人のやうである。縱橫に相遭うては翼を折る。思へば感ずること多くて爲に巾を沾す。平日誰か之を抱く、羅ありて之を張れども、鳥は高く飛びて馴れない。吾が友は我に此の雁を贈り來る。いかなる珍ぞ、やがて膳に上るのである。

【餘論】此の詩に見るも、荆の俗は好みて雁を食ふものの如く、第六首の食雁君應厭の句と合せて觀るべきであらう。紀昀は、此の詩を意格特高と評して居る。

柳門京國道。驅馬及春陽。

柳門は京國の道、馬を驅りて春陽に及ぶ。

野火燒枯草。東風動綠芒。

野火枯草を燒き、東風綠芒を動かす。

北行連許鄧。南去極衡湘。

北行許鄧に連り、南去衡湘を極む。

楚境橫天下。懷王信弱王。

楚境は天下に横はるに、懷王は信に弱王。



【字解】【一】柳門 荆州の修門、宋玉の招魂篇に、魂兮歸來入修門。王逸の註にいふ、郢城門と。荆州記に、郢南門二門、一名龍門、一名修門。唐の吳融留獻荆南成相公詩に、行行柳門路。荆州別に柳門あるものと見ゆ。【二】野火燒枯草 白樂天が春草の詩に、野火燒不盡、春風吹又生。【三】連許鄧 許州は、清の時、直隸州として河南省に屬せしが、民國之を改めて許昌縣となす。鄧州は民國になつてから、縣と改め、河南汝陽道に屬す。【四】極衡湘 范仲淹の岳陽樓記に、北通巫峽、南極瀟湘。衡州、清の時、湖南省に屬せしが、民國之を廢す。今の衡陽縣は其の舊治。湘州、州治は湘に臨む、即ち今の湖南長沙縣。【五】弱王 史記に、趙王自上食、禮甚卑、高祖箕踞嘗、貫高、趙午乃怒曰、吾王辱王也。註にいふ、辱、弱也と。

【詩意】楚城の南門を出で、大道を歩し、馬を驅つて春の野に及ぶ。野火は枯れ草を燒き、春風は緑の草を靡かせて居る。北行すると、行く先は許州、鄧州。許州は、河南道に屬し、西南、汝州に至る。一百八十里、鄧州は、山南東道に屬し、南、襄州に至る。一百八十里、北、汝州に至る。四百九十里。又南に去つて衡州、湘州を極める。思へば楚王の領土は天下に横はつて大きいのに、懷王は威を振ふことが出来なかつたのは、信に弱王であると言はなければならぬ。

【餘論】此詩の結句は、史記の貫高、趙午乃怒曰、吾王辱王也の語に本いて居る。紀昀は、結句寫自負之意、此猶少年初出、意氣方盛之時也、黃州以後、無復此種議論一矣と評して居る。

渚宮

渚宮

渚宮寂寞依古郢。

渚宮は寂寞として古郢に依る、

楚地荒茫非故基。

楚地は荒茫として故基にあらず。

【字解】【一】渚宮 春秋楚の別宮、今の湖北江陵縣城內西北隅に在る。左傳に、楚子西沿漢沔、江將入郢、王在渚宮下、見之。孔穎達

二王臺閣已鹵莽。

二王臺閣已に鹵莽、

何況遠問縱橫時。

何況んや遠く縱橫の時を問はん。

楚王獵罷擊靈鼓。

楚王獵罷んで靈鼓を撃ち、

猛士操舟張水嬉。

猛士舟を操りて水嬉を張る。

釣魚不復數魚鼈。

釣魚復魚鼈を數へず、

大鼎千石烹蛟螭。

大鼎千石蛟螭を烹る。

當時郢人架宮殿。

當時郢人宮殿を架し、

意思絕妙般與俎。

意思絕妙般と俎と。

飛樓百尺照湖水。

飛樓百尺湖水を照らす、

上有燕趙千蛾眉。

上には燕趙の千蛾眉あり。

臨風揚揚意自得。

風に臨んで揚揚として意自得す、

長使宋玉作楚辭。

長へに宋玉をして楚辭を作らしむ。

秦兵西來取鐘簾。

秦の兵西より來つて鐘簾を取り、

故宮禾黍秋離離。

故宮禾黍秋離離。

の疏にいふ、渚宮當郢都之南、蓋楚成王所建。太平寰宇記に襄王所建とあるは誤。【一】荒茫 沈約の詩に、九服荒茫。【二】二王臺閣 湘東王と高氏。渚宮舊事に、湘東王釋於子城中、穿構池山、長數百丈云云。太平寰宇記に、謂之湘東苑。名勝志に、後梁高從誨鑿城西南一築亭、亦名渚宮。【三】鹵莽 蕪林伐山に、鹵は剛鹵の地、莽は草莽の地、其の剛鹵を治めず、其の草莽を芟らず云云。莊子の則陽に、爲政焉勿鹵莽。【四】縱橫時 六國時代の楚をいふ。【五】楚王獵罷云云 司馬相如子虛の賦に、楚亦有平原廣澤、游獵之地、饒樂若此者乎、楚王之獵何與寡人、云云。又、擊靈鼓、起烽燧。【六】水嬉 張協の七命に、乘鳧舟、兮爲水嬉。【七】大鼎千石 司馬相如の上林賦に、撞千石之



千年壯觀不可復。  
 今之存者蓋已卑。  
 池空野迴樓閣小。  
 惟有深竹藏狐狸。  
 臺中絳帳誰復見。  
 臺下野水浮清漪。  
 綠窗朱戶春晝閉。  
 想見深屋彈朱絲。  
 腐儒亦解愛聲色。  
 何用白首談孔姬。  
 沙泉半涸草堂在。  
 破牕無紙風颼颼。  
 陳公蹤蹟最未遠。  
 七瑞寥落今何之。

千年壯觀復すべからず、  
 今の存するもの蓋し已に卑し。  
 池空しく野迴かに樓閣小なり、  
 惟深竹の狐狸を藏するあり。  
 臺中の絳帳は誰か復見ん、  
 臺下の野水清漪を浮ぶ。  
 綠窗朱戶春晝も閉づ、  
 想ひ見る深屋朱絲を彈せしを。  
 腐儒も亦解く聲色を愛す、  
 何ぞ用ひん白首孔姬を談ずるを。  
 沙泉半は涸れて草堂あり、  
 破牕紙なく風颼颼。  
 陳公の蹤蹟は最も未だ遠からず、  
 七瑞寥落今何くに之く。

鐘、立萬石之虞。【九】蚊蝮、みづち、左思の蜀都賦に、鱗介異族、或藏蚊蝮、或隱碧玉。【一〇】架宮殿、靈王傾宮を作り、章華の臺を爲る。翟人來朝す、王之に誇り、客と章華の臺に登り、三休して乃ち至る。太平寰宇記に、章華臺在江陵東三十三里、臺形三角。名勝志に、楚離宮也、又、謂之豫章臺。【一一】般與、極墨子に、公輸盤爲楚造雲梯之械、成、將以攻宋。戰國策には、盤を般に作る。尙書舜典に、帝曰、兪、咨垂汝共工。韓退之の詩に、雕鏽妙工極。【一二】飛樓百尺、高き樓、晉書樂志に、百尺高樓與天連。【一三】燕趙千蛾眉、文選古詩に、趙燕多佳人。蛾眉は美人の眉、詩の衛風碩人篇に、嬈首蛾眉。【一四】揚揚意自得、史記管晏列傳に、意氣揚揚甚自得。【一五】宋玉作楚辭、宋玉高唐賦に、

百年人事知幾變。  
 直恐荒廢成空陂。  
 誰能爲我訪遺蹟。  
 草間應有湘東碑。

百年人事知る幾か變ずる、  
 直恐る荒廢空陂と成るを。  
 誰か能く我が爲に遺蹟を訪はん、  
 草間應に湘東の碑あるべし。

楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺、望高唐之觀、王曰、試爲寡人賦之。九辨は、宋玉閔惜其師忠而放逐、故作九辨、以述其志。【一六】鐘簾、釋名に所以懸鐘鼓者、橫曰筓、從曰簾。【一七】禾黍秋離、詩の王

風に、彼黍離離、彼稷之苗とある。周の大夫が行役して故の宗廟宮室を過ぐれば盡く禾黍となる。乃ち此詩を作る。【一八】深竹藏、狐狸、元稹の連昌宮詞に、連昌宮中滿宮竹。又、夜夜狐狸上牆屋。【一九】絳帳、赤いとばり、後漢書、馬融傳に、常坐高堂、施絳帳、前授生徒、後列女樂。荆州記に、府城西南有馬融絳帳臺、與渚宮不遠。名勝志に、江陵城西鼓角樓、卽馬融教授弟子處。【二〇】綠窗朱戶、唐崔顥の詩に、綠牕明月在。梁簡文帝の詩に、玲瓏朱戶開。【二一】孔姬、孔子と周公。【二二】颼颼、風の颼と吹く貌。【二三】陳公蹤蹟、宋史に據るに、宋の眞宗、天禧中陳堯咨以三右正言知制誥、出守荆南。【二四】七瑞寥落、南史に據るに、梁元帝、諱繹字世誠、小字七瑞、武帝第七子也。十三年封湘東王。寥落は靜にして空し。謝朓の詩に、曉星正寥落。

【題義】子由の同じく渚宮を賦した詩に、楚塞多秋木、荆王有故宮。又いふ、湘東晉宗子、高氏楚元戎、鑿沼長千尺、開亭費萬工。湘東王釋は、子城中に池山を穿構し、上に通波閣がある。水に跨つて之を爲る。南に芙蓉堂、東に禊飲堂、西に鄉射堂、堂に竹棚(射埒)を置く。東南に連理堂、堂北に映月亭、修竹堂、臨水齋がある。齋の前は高山、山に石洞があつて苑中に潜行する。山上に陽雲樓、北に臨風亭、明月樓がある。竹林があり、花房がある。花草が繁くなつても竹林彌盛と傳へて居る。渚宮の勝概が想像される。



【詩意】名高い楚王の別宮も、今は寂寞として古の郢の地に存して居る。楚地は荒茫として、昔の楚ではない。湘東王繹と高氏との臺閣は今は修理もせず芟鋤しない。また六國時代の合縱連横などの話を問はうぞ。憶ふ昔、楚王の遊獵に、水嬉に、靈鼓を撃ち鳧舟に乗り、王者の威勢を恣まましたのである。當時、郢人の宮殿を建築する、巧を極めたもので、墨子に見ゆる公輸般や、舜典に載つて居る共工垂も斯くやと思はれる。高樓は湖水に臨み、樓上には燕や趙の美人を多數に侍らせ、意氣揚揚として此世をば我が世と自得し、屈原の弟子として名高い宋玉をして高唐の賦や九辨などの楚辭を作らしめたのである。榮枯盛衰は人事の常で、秦の兵が西から來つて、楚の宮殿を掠めた。史記の秦始皇本紀に據ると、秦王は諸侯を破る毎に、其の宮室に倣つて咸陽の都に土木を起し、戦争で得た所の諸侯の美人や鐘鼓をば之に充たしたさうである。楚の宗廟宮室は、盡く禾黍の荒野となつた。昔の壯觀は復望まれない。今の故宮は、地卑く、池空しく、野も廻かに樓閣も小である。ただ竹叢に狐狸の潜めるのみ。臺中の絳帳など今は見ることも出來ず、臺下の野水に清らかな漣を浮べて居る。緑の窗、朱塗の戸、春來れど晝も開かない。昔は深屋盛に音楽を奏で、後の世にも馬融などの學者は、高堂に坐して絳帳を施し、前には生徒に授け、後では女樂を列ねたといふ話がある。聲色を愛する學者に孔子と周公との道を談ずる要もなからう。さて、沙泉が半ば涸れて草堂のみあり、破窓も紙なく、風の颯颯たるを覺える。陳堯咨は、嘗て荆南に太守となつて來たが、其の跡は此處からは遠くない。梁の元帝の小字を七瑞と言つたが、湘東王に封せられたことは、歴史に名高いが、今は其の跡も空し

い。百年の人事は幾たびか變ずるものであるから、此の故宮も、更に荒廢して空曠となるかも知れない。もし故宮の遺蹟を尋ねるといふことにもなると、湘東の碑が唯一の材料となるであらう。

荆門惠泉

荆門の惠泉

泉源従高來。走下隨石脈。  
 紛紛白沫亂。隱隱蒼崖坼。  
 縈回成曲沼。清澈見肝膈。  
 淙瀉爲長溪。奔駛蕩蛙蝮。  
 初開不容椀。漸去已如帛。  
 傳聞此山中。神物嬾遭謫。  
 不能致雷雨。灑灑吐寒碧。  
 遂令山前人。千古灌稻麥。

泉源高きより來り、走り下りて石脈に隨ふ。  
 紛紛として白沫亂れ、隱隱として蒼崖坼く。  
 縈回して曲沼を成し、清澈肝膈を見る。  
 淙瀉長溪を爲し、奔駛して蛙蝮を蕩す。  
 初開いて椀を容れず、漸く去つて已に帛の如し。  
 傳へ聞く此の山中、神物嬾くして謫に遭ひ、  
 雷雨を致すこと能はず、灑灑寒碧を吐き、  
 遂に山前の人をして、千古稻麥に灌がしむ。

【字解】一 荆門 漢の舊縣、荆襄州の要津。清、直隸州となし、湖北に屬し、民、縣に改め、湖北襄陽道に屬す。荆門の西に蒙・惠の二泉がある。二泉は荆門山より發す、東坡自註にいふ、荆門山在宜都大江之南、與虎山對、と。宜都は縣名、虎山は虎牙山。二 石脈 温庭筠の詩に、孔竇澗通石脈。三 隱隱 司馬相如の上林賦に、沈沈隱隱。沈沈は深き貌。隱隱は盛なる貌。



【四】 垢 垢裂、われさける。【五】 榮回 まとひめぐる、王勃の滕王閣序に、窮島嶼之榮回。【六】 清激見肝膈 清く澄む、激は澄の意。隔はむねのうち。【七】 潦瀉 小水が大水に入るを潦といふ。孟東野の秋雨聯句に、潦瀉殊未終。【八】 奔馳瀉蛙蝸 玉篇に馳、疾也。馬が疾く走ること。蝸も蛙。【九】 神物嬾遵 僧史に、僧開禪師住邵武山中、一日有老翁來謂曰、我龍也、以疲情三行雨、天罰當死、頼道力可脱、乃化小蛇、延緣入袖中、一夜風號霆擊、山岳爲搖、而師危坐不傾、遂且蛇飛去。【一〇】 蠶 月が水に映じて光る。何遜の望新月詩に、的的與沙靜、蠶蠶逐波輕。

【題義】 李德裕、詩を惠泉の上に題して、茲泉由太潔、終不蓄纖鱗、到底清何益、涵虛只自貧、と。今に至るまで碑版が存して居る。碑版は碑誌の類である。荆門山の二泉北を蒙といひ、南を惠といふ。蒙泉は常に寒く、惠泉は常に温、此詩は南泉を詠じたのである。

【詩意】 湧き出る泉に色色ある。濫泉は正出し、沃泉は縣出し、汎泉は側出する。荆門山の惠泉は、高きより走り下つて、濺濺として石脈に通じ、水玉を飛ばし、崖を圻き破り、まとひめぐりて曲沼となる。清い流れが長い谷川をつくつて奔馳する。蛙も蝸も流されてしまふ。其の泉源は、觴を濫ぶべく、江津に至るに及んでは、舟を舫べ、風を避けなければ涉れない。聞けば山中に棲める神龍が行雨を惰つたので、天罰を得、雷雨を起すことが出来なくなつた。そこで惠泉が月に映じて寒碧を吐き、山前の住民をして千古稻麥に灌がしめることが出来たのである。

次韻答荆門張都官維見和惠泉詩

次韻して荆門の張都官維が惠泉の詩に和せられしに答ふ

楚人少井飲。地氣常不洩。

楚人井飲を少く、地氣常に洩れず。

蓄之爲惠泉。空若有所折。

之を蓄ふるを惠泉となす、空として折つ所あるが若し。

泉源本無情。豈問濁與澈。

泉源は本情なし、豈濁と澈とを問はんや。

貪愚彼二水。終古恥莫雪。

貪愚彼の二水、終古恥雪ぐなし。

只應所處然。遂使語異別。

只應に處る所然るべし、遂に異別を語らしむ。

泉傍地平衍。泉上山嵒嶮。

泉傍は地平衍、泉上は山嵒嶮。

君子慎所居。此義安可闕。

君子は居る所を慎む、此義安んぞ闕くべけんや。

古人貴言贈。敢用況高節。

古人は言贈を貴ぶ、敢て高節を況ふるを用ひんや。

不爲冬霜乾。肯畏夏日烈。

冬霜の爲に乾かず、肯て夏日の烈を畏れんや。

泠泠但不已。海遠要當徹。

泠泠但已まざれば、海遠きも要當に徹すべし。

【字解】 【一】 張維 續通鑑長編に據るに、熙寧十年正月に、前原州臨涇縣令張維除名送康州編管の事がある。【二】 地氣 陰氣をいふ、禮記に、孟冬之月、天氣上騰、地氣下降。【三】 空 聚るなり、竝ぶなり。前漢書の溝洫志に、河水溢溢。【四】 貪愚 彼二水、食泉は、廣州南海縣石門口に在り、即ち吳隱之の酌んで詩を賦した處。荆州記に、橫溪水甚深、冬夏不乾、俗謂之食泉。柳宗元愚溪序に、灌水之陽有溪焉、東流入於瀟水、余以愚觸罪謫瀟水上、愛是溪、故更之爲愚溪。【五】 平衍 地が下く平か。【六】 嵒嶮 山の高い貌、張平子の西京賦に、託喬基於山岡、直帶巖以高居。嶮は通じて巖に作る。【七】 貴言贈 史記孔子世家に、適周見老子、辭去、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言、吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言。王勃の滕王閣



序に、臨別贈言。【八】況高節。況は比況の意、史記魯仲連傳に、好持高節。【九】冷冷。水の清き聲、陸士衡招隱の詩に、山溜何冷冷。

【題義】昔、南北朝の時代、范柏年が南朝宋の明帝に見えたとき、帝は言、廣州の貪泉に及び、卿の州にも亦此泉があるかと問はれた。柏年は答へていふ、梁州には、惟文川、武郷、廉泉、讓水あるのみと。帝曰く、卿の宅は何處、曰く臣の居る所は、廉讓の間と。貪泉の二字は此詩を離れない。

【詩意】楚人は井水に乏しい、地氣が水を生じないからである。それで飲み水の湧き出るは、まことに恵泉である。併し、泉が溢れて後には清めるもあり、濁れるもありて、さまざまに分れる。泉の源は、本情がないから、濁と澈とを問はない。ただ貪泉の名を得、愚泉の名を得ば、終に恥を雪ぐの日はないであらう。境遇の然らしめるに由る。泉の傍は、土地が低く平かである。泉の上は、山が高く登れない。すべて君子は居處を慎しむ。此事を忘れてはならない。古人は言贈を重んじ、別に臨むときも送る辭がある。必しも高節を言ふ譯ではないが、冬霜の爲に殊更に乾くことをしない。夏日の烈しいをも別に畏れも悪みもしない。ただ水の清い聲して、進みて已まなければ、海遠きも、遂には之に放るであらう。

涑陽早發

涑陽早發

富貴本无定。世人自榮枯。

富貴本定るなし、世人自ら榮枯。

鸞鷲好名心。嗟我豈獨無。

鸞鷲名を好む心、嗟我豈獨無からんや。

不能便退縮。但使進少徐。

便ち退縮する能はず、但進む少しく徐ならしむ。

我行念西國。已分田園蕪。

我が行西國を念ふ、已に分とす田園の蕪するを。

南來竟何事。碌碌隨商車。

南來竟に何事ぞ、碌碌として商車に隨ふ。

自進苟無補。乃是癩且愚。

自ら進んで苟も補ひなければ、乃ち是れ癩にして且つ愚。

人生重意氣。出處夫豈徒。

人生意氣を重んず、出處夫れ豈徒ならんや。

永懷江陽叟。種藕春滿湖。

永く懷ふ江陽の叟を、藕を種ゑて春湖に滿つ。

【字解】【一】涑陽。今の鎮祥縣（湖北襄陽道に屬す）麗陽驛。利河は土人、涑口といひ、驛を距る、止六十清里。【二】自榮枯。班固の答賓戲に、朝爲榮華、夕爲顛顛。【三】鸞鷲。かまびすしき意、莊子に、天下何其鸞鷲也。【四】田園蕪。陶潛歸去來辭に、田園將蕪胡不歸。【五】商車。漢武帝紀、元光六年（皇紀五三二年、西曆紀元前一二九年）冬、初算商車。註にいふ、始稅商賈車船令出算。【六】江陽。眉州を指す、名勝志に、晉曾置江陽郡於眉州。【七】藕。蓮の根、荷は芙蓉、其の根は藕、其の莖は茄、其の華は菡萏、其の實は蓮である。

【詩意】富貴は本定つたものではないから、人間には自ら榮枯がある。我にも亦多少功名の心はある。故に退縮しては居られない。ただ躁進を戒めて居る。我は遠遊を思ふから、我が田園の荒蕪に歸するは覺悟して居る。さて南に來ても何事もなし得ない。碌碌として商車に隨ふのみである。自ら進んで、苟も國に補ひがなければ、是れ癩惰で愚昧である。人生は意氣を重んずる、從つて出處も徒爾で



あつてはならない。永く故山の先輩を懐うて已まないが、今日此頃は、蓮根を種ゑて、湖に満ちて居るであらう。

【餘論】此詩は、感懐を述べたもので、涘陽を言つたのではない。紀昀いふ、途中感懐適在涘陽、遂以涘陽命篇、不爲涘陽作也、故不及山川地理。欒城集涘陽早發の詩に、春氣入楚澤、原上草猶枯、北風吹栗林、梅蕊颯已無、我行亦何事、驅馬無疾徐、楚人信稀少、田畝任榛蕪、空有道路人、擾擾不留車、悲傷彼何嬾、歎息此亦愚、我今何爲爾、豈亦愚者徒、行行楚山曉、霜露滿陂湖。

夜行觀星

夜行星を觀る

天高夜氣嚴。列星森就位。

天高く夜氣嚴に、列星森として位に就く。

大星光相射。小星闇如沸。

大星は光相射る、小星は闇として沸くが如し。

天人不相干。嗟彼本何事。

天人は相干さず、嗟彼は本何事。

世俗強指摘。一一立名字。

世俗強ひて指摘し、一一名字を立つ。

南箕與北斗。乃是家人器。

南箕と北斗と、乃ち是れ家人の器。

天亦豈有之。無乃遂自謂。

天亦豈之あらんや、乃ち遂に自ら謂ふなからんや。

迫觀知何如。遠想偶有似。

迫觀知る何如、遠想偶似たるあり。

茫茫不可曉。使我長歎喟。

茫茫として曉るべからず、我をして長く歎喟せしむ。

【字解】【一】列星森就位。列星は列宿に同じ、宿は星宿の意。董仲舒の春秋繁露に、天不可剛則列星亂其行。【二】指摘。指、一に適に作る、列子黃帝篇に、無傷痛指摘。【三】南箕與北斗。詩に維南有箕、不可簸揚、維北有斗、不可挹酒漿。【四】家人器。漢書儒林傳に、轅固曰、此家人言耳。【五】自謂。箕斗の類、皆、形の似たるよりして之をいふ、星象の本に、此名があるのではない。【六】迫觀。迫は近の意。

【題義】星を觀ての感想を述べたもの、晉書に、凡五星盈縮失位、其精降於地爲人、歲星降爲貴臣。云云。人間の吉凶は、天象に隨ふものとして居るが、茫茫曉ることが出来ないといふにある。

【詩意】天は澄みわたつて高く見え、夜氣も嚴に、列星は、其の位に就いて居る。大星は光が強く、小星は沸くやうである。天人はもと相干さないのを、世人が強ひて名字を付ける。詩に南箕といひ、北斗といふも、一家の私言であつて、星象の本義ではない。近く觀察せば果して如何、思ひ半に過ぐるであらう。ただ遠く想像して偶、類似のところを見るのみである。宇宙の事は茫茫として曉ることが出来ないから、我をして長歎せしめるのである。

漢水

漢水

捨棹忽逾月。沙塵困遠行。

棹を捨てて忽ち月を逾え、沙塵遠行を困しむ。

襄陽逢漢水。偶似蜀江清。

襄陽漢水に逢ふ、偶蜀江の清きに似たり。



蜀江固浩蕩，中有蛟與鯨。

蜀江は固より浩蕩、中に蛟と鯨とあり。

「せん。」

漢水亦云廣，欲涉安敢輕。

漢水も亦廣といふ、涉らんと欲するも安んぞ敢て軽くし

文王化南國，遊女儼如卿。

文王南國を化す、遊女儼として卿の如し。

洲中浣紗子，環珮鏘鏘鳴。

洲中の浣紗子、環珮鏘鏘として鳴る。

古風隨世變，寒水空冷冷。

古風は世に隨つて變じ、寒水は空しく冷冷。

過之不_レ敢慢，佇立整冠纓。

之を過ぎて敢て慢せず、佇立して冠纓を整ふ。

【字解】【一】漢水 二源あり、出_二鞏昌秦州之嶓冢_一至_二四川_一、由_二重慶江津縣_一入_レ江、これ西漢水。出_二漢中府沔縣之嶓冢_一至_二漢陽府_一入_レ江者、これ東漢水。【二】襄陽 太平寰宇記に、山南東道襄州本楚邑、瀘溪帶其西、峴山互其南、爲_二楚之北津_一、建安十三年始置_二襄陽郡_一、以_二地在_二襄山之陽_一爲_レ名。【三】遊女儼如卿 詩、國風周南に、南有_二喬木_一、不可_二休息_一、漢有_二游女_一、不可_二求思_一。紉の時、淫風が天下に徧く、ただ江漢の域、先づ文王の教化を受けたのである。【四】浣紗溪 荊州府夷陵州の西北に在る。秋冬の月、水色淨麗、若_レ浣紗然。【五】環珮鏘鏘 史記に、環珮玉聲鏘然。鏘鏘は金石の聲、詩に八鸞鏘鏘。【六】佇立 久しく立つ、詩、邛風に、瞻望不_レ及、佇立以_レ泣。

【題義】東漢水は、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽六府の境を貫流して江に入る大川である。源を陝西の嶓冢山に發し、初の名は漾水、東南して沔水となり、沮水を受け、東流して襄水を受け、始て漢水となる。東南して白河を經、又、東して湖北に入り、涑水を受け、均水を受け、又、東南して、宜城・鍾祥・京山を經て、潛江に至る。東南漢陽より大江に入る。

【詩意】舟を捨ててから月餘、長い行程は、絶えず沙塵に困められた。襄陽で漢水に逢うたが、蜀江の清きに似て居る。蜀江は固より浩蕩で、蛟鯨も潛む。漢水も一名廣といひ、廣廣として居る、輕輕しくは涉らない。昔、周の文王の教化が江漢の域に行はれて、淫風の世にも禮を犯すことを思はなかつたことは、周南漢廣の詩に歌はれて居る。遊女も儼として居り、洲中の浣紗子が佩びた玉も鏘鏘と音がする氣高い所がある。古風は世と變じ、寒水も今は空しく冷冷たるのみ、併し之を過ぎて敢て慢らない。たたずみて冠纓を整へた。

襄陽古樂府 三首

樂府は、前漢武帝の時、之を立て、文人を集めて詩賦歌謠を作らしめたのに始まる。哀帝の時に至つて罷んだが、後世、其の調に倣つて作る詩を樂府といふ。樂府は魏の頃より其の傳を失つた。文人の擬作するもの、多く題と左ふのは、但、聲調の諧を取つて、詞義の合ふのを必としなからである。紀昀いふ、樂府音節失傳、不過摹其字句。

野鷹來

野鷹來

野鷹來萬山下。

野鷹來る、萬山の下に。

荒山無食鷹苦飢。

荒山食なくして鷹飢に苦しむ。

【字解】【一】野鷹來 沔水の南

に層臺あり、景升臺といふ。荊州の牧、劉表が襄陽を治めたとき築いたもの。景升は劉表の字である。表は



飛來爲爾繫綵絲。

飛び來らば爾の爲に綵絲を繋がん。

北原有兔老且白。

北原に兎あり老いて且つ白し。

年年養子秋食菽。

年年子を養つて秋は菽を食ふ。

我欲擊之不可得。

我之を撃たんと欲するも得べからず。

年深兔老鷹力弱。

年深く兎老いて鷹の力は弱し。

野鷹來。

野鷹來れ、

城東有臺高崔巍。

城東に臺あり高うして崔巍。

臺中公子著皮袖。

臺中の公子皮袖を著け、

東望萬里心悠哉。

東望萬里、心悠なるかな。

心悠哉鷹何在。

心悠なるかな、鷹何くにか在る。

嗟爾公子歸無勞。

嗟爾公子歸れ勞する無かれ。らん。

使鷹可呼亦凡曹。

鷹をして呼ぶべからしめば亦凡曹なり。

天陰月黑狐夜嘯。

天陰り月黒く狐夜嘯ゆ。

襄陽記に、劉表墓在城東。又、東二十里有呼鷹臺。

【六】 崔巍 山が高くしてけはし、楚辭に、高山崔巍兮。一本に、巍を鬼に作る。

【七】 心悠哉 思ふ心が長くして盡きない意。詩の周南に、悠哉悠哉、輾轉反側。【八】 嘯 説文に咆也とある。猛獸がほえること。

【題義】 劉表は呼鷹臺に登つて、野鷹來の曲を歌ふ。其の聲韻は魏の孟達が上堵吟に似ると言はれて居る。孟達は初、劉璋に事へたが、璋、達をして兵を將ゐて劉備を迎へしめたので、因て江陵に屯した。劉備は達を宜都の太守としたが、後、關羽を救はなかつたから、罪されることを懼れ、衆を率ゐて魏に降る。散騎常侍を拜し、新城の太守を領した。諸葛亮、魏を伐ち、達を誘はうとし、數、書を以て招いたのを魏人に疑はれ、遂に反いてやがて敗滅した。

【詩意】 昔、鄭交甫が江妃二女に遇つたといふ傳説のある萬山、其の萬山の下に、野の鷹がやつて來た。食物も得いで饑に苦しむ。鷹はいふ、飛び來つて結局、爾の爲に羈がれるのみである。又、北の原に兎がある、老いて白い。抱朴子の言によると、年を経た兎らしい。年年子を育て秋菽を食ふ。我は之を撃たうとしても撃てない。兎は老鷹の力は弱い。城東臺あり東望萬里、鷹を呼ぶ、鷹は何處に居る。心悠なるかな。ああ臺中の公子、爾歸り去れ、もし鷹を呼び、呼んで來るやうでは凡羣である。天が陰り月も黒く、狐の咆える聲も聞えるから早く歸られよ。

上堵吟

上堵吟

臺上有客吟秋風。

臺上に客あり秋風に吟ず、

悲聲蕭散飄入空。

悲聲蕭散飄つて空に入る。

【字解】 【一】 蕭散 ものさびしい意、司馬相如の上林子虛の賦に、

意思蕭散不復與外事相關。【二】

千里金城兩稚子 漢書張良傳に、金



臺邊遊女來竊聽。

臺邊の遊女來つて竊に聽き、

欲學聲同意不同。

學ばんと欲して聲同じきも意同じか

君悲竟何事。

君の悲は竟に何事ぞ、

千里金城兩稚子。

千里の金城兩稚子。

白馬爲塞鳳爲關。

白馬を塞と爲し鳳を關と爲す、

山川無人空且閒。

山川人無うして空しく且つ閒なり。

我悲亦何苦。

我は亦何をか苦しむ、

河水冬更深。

河水冬更に深く、

鱸魚冷難捕。

鱸魚冷かにして捕へ難し。

悠悠江上聽歌人。

悠悠たる江上歌を聽く人、

不知我意徒悲辛。

我意を知らずして徒に悲辛す。

【題義】堵陽縣に堵水あり、傍に白馬塞がある。孟達は新城の守となつて之に登り嘆じていふ、劉封や申耽は、金城千里に據つても之を失つたと、遂に上堵の吟をなしたが、其の音韻が哀切で、人心をして惻しめる。今に尙ほ此の聲を傳へて居る。蜀の劉備は、孟達を遣はし房陵を攻めて之を下さし

め、劉封を遣はし沔水より達と會して上庸を攻めしむ。太守申耽が郡を擧げて降つたので、耽を上庸の太守となした。又、耽の弟儀も西城の太守となつて漢中の地を定めた。上庸、西城は、皆今の荊州の地である。章武元年（皇紀八八一年、西曆二二一年）孟達は、魏に降る。新城の太守となり、白馬塞に登つて歎じたのが上堵の吟である。魏は房陵、上庸、西城の三郡を以て新城となした。

【詩意】孟達は新城の太守となつて、白馬塞上秋風に吟じたが、其の悲しき音は、物寂しく空に響いた。塞邊の遊女が窃に之を學んだが、聲は同じでも、歌ふ所以は異なる。孟達の悲んだ所は、何事ぞ、それは、劉封や申耽は白馬山を城塞となし、鳳林を關門となして、金城千里に據つたが、遂に其の守を失つて、山川に人無うして空しく閒になつたからである。孟達は更に何をか苦しむ。江水は冬更に深く、鱸魚も冷かで捕へ難いからである。悠悠たる江上に歌を聽く人、我が眞意を解しないで徒に悲辛して居る。

襄陽樂

襄陽樂

使君未來襄陽愁。

使君未だ來らざりしとき襄陽愁ふ、

提戈入市裏氈裘。

戈を提げて市に入り氈裘を裏む。

自從氈裘南渡沔。

氈裘南沔を渡りしより、

襄陽無事春遊多。

襄陽事なくして春遊多し。

古今體詩 襄陽古樂府三首・上堵吟・襄陽樂

【字解】一 使君 天子の使者の尊稱なれど、漢の世、稱太守曰使君、刺史曰使君。二 裏 裏氈裘、匈奴の毛織服を著る、漢司馬遷の傳に、旃裘之君長咸震怖、裏は淵鑑類函には畏に作る。三 襄陽無事 宋書の劉道產傳に、自鎮漢南



襄陽春遊樂何許。

襄陽の春遊は何れの許にか樂しむ、

峴山之陽漢江浦。

峴山の陽漢江の浦。

使君朱旆來翻翻。

使君の朱旆來りて翻翻、

人道使君似羊杜。

人は道ふ使君は羊杜に似たりと。

道邊逢人問洛陽。

道邊人に逢うて洛陽を問ふに、

中原苦戰春田荒。

中原は戰に苦しんで春田荒ると。

北人聞道襄陽樂。

北人襄陽の樂を道ふを聞かば、

目送征鴻應斷腸。

征鴻を目送して應に斷腸すべし。

【題義】劉道産は、襄陽の太守となつて、善く職に臨み、政績が著はれ、蠻夷の前後に化を受けなかつたものも、皆、歸順し、百姓が業を樂しむ。此に由り襄陽樂歌がある。襄陽樂歌があるやうになつたのは、實に道産から始まつた。

【詩意】南史によると、劉道産は、初、無錫の令となり、後、雍州の刺史となり、襄陽の太守も兼ねるやうになつた。よく政績が著はれ、襄陽の民は其の業を樂しんだ。劉使君がまだ來られないときは、襄陽の民は生を安んせなかつた。それは蠻夷の人が蠻服のまま、戈を提げ市に入つたからである。使君が來られて、蠻服のものは南して沔水を渡る。それからは襄陽も至つて平和で、春遊が多い。其の

境、接凶寇、威懷兼舉。【四】朱旆許渾の詩に、朱旆聯翩曉樹中。【五】羊杜、羊祐と杜預。皆、襄陽を鎮めて、德政があつた。晉書に、羊祐字叔子、泰山南城人。杜預字元凱、京兆杜陵人。【六】目送征鴻、晉書顧愷之傳に、愷之每重嵇康四言詩、因爲之圖、恆云、手揮五絃、目送歸鴻。【七】斷腸、甚しく心を痛める、魏文帝の詩に、念君客遊、思斷腸。

春游は、峴山の南、漢江の浦。使君の赤い旗も、翻つて居る。人はいふ、劉使君は昔の羊祐や杜預であると、羊祐も杜預も、此の襄陽を鎮めて德政があつた。翻つて都の洛陽の事を人に問ふと、今は戰場に苦しんで、春田も荒廢したといふことである。もし我が襄陽樂の歌を聞いたなら、定めし征く雁を目送して腸を斷つる念があるであらう。

峴山

峴山

遠客來自南。游塵昏峴首。

遠客南より來り、游塵峴首に昏し。

過關無百步。曠蕩吞楚藪。

關を過ぐれば百歩なし、曠蕩として楚藪を呑む。

登高忽惆悵。千載意有偶。

高に登り忽ち惆悵、千載意偶するあり。

所憂誰復知。嗟我生苦後。

憂ふる所誰か復知らん、嗟我生きて後を苦しむ。

團團山上檜。歲歲閱榆柳。

團團たる山上の檜、歲歲榆柳を閱す。

大才固已殊。安得同永久。

大才固より已に殊なり、安んぞ同じく永久なるを得む。

可憐山前客。倏忽星過雷。

可憐むべし山前の客、倏忽として星は雷を過ぐ。

賢愚未及分。來者當自剖。

賢愚未だ分つに及ばず、來者當に自ら剖るべし。

【字解】(一) 峴山、襄陽府城の南に在る。襄河記に、紫蓋山、萬山、峴山、謂之三峴。(二) 峴首、宋の時に、紫蓋山を改め



て中峴となし、峴山を以て峴首とした。【三】楚藪 楚國の藪の意、東坡の遊武昌寒溪西山寺詩にも、離離見吳宮、莽莽真楚藪。【四】惆悵 かなしみうらむ、楚辭の九辯に、惆悵而自悲。【五】團團山上輪 名勝志に、晉柏在峴山下、相傳羊叔子手植、有碑顯曰晉柏。團團、韓退之が羅池廟の碑に、桂樹團團兮白石齒齒。【六】倏忽 疾速にして捕捉すべからざる形容。【七】星過雷 詩に三星在雷。註にいふ、如三星之光耀見於魚笱之中、其去須臾不可久也と。

【題義】 晉書羊祜の傳に、祜樂山水、每風景必造峴上、嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、自自有宇宙、便有此山、由來賢達勝士登此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無聞、使人悲傷、如百歲後有知、魂魄猶應登此也、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳、至若湛輩、乃當如公言耳、及祜卒、襄陽百姓、於峴山祜平生遊息之所、建碑立廟、歲時饗祭焉、望其碑者、莫不流涕とある。峴山碑を墮涙碑といふのは、此の故事による。

【詩意】 遠く南から來て見ると峴山は遊塵に蔽はれて彷彿、關を過ぎると、百歩もない。ひろびろと楚國の淵藪を呑んで居る。山の高きを窺めて遠くを望むと、忽ち惆悵する、千里眺望の感は、昔も今も此の後も異ならないであらう。我が心の中に憂へる所は、人は知らない。我は後を憂へる。皆人は團團たる山上の檜を眺め、年年榆柳の青青たるを関するであらうが、我が憂とする所は憂へない。人已に才が異なる、同じく永久なることが出来ない。憐むべし山前の客、登臨の快も、よく幾時ぞ、忽ち日月は過ぎて行く、心星の光が一寸魚梁の中に見はれたやうなもので、瞬く間に消えて行く。賢も不肖も今は別はないが、他日自ら分れることであらう。(賢愚の句は、暗に羊祜傳中の鄒湛等と峴山に登つて慨歎した語を用ひて居る。)

【餘論】 紀昀は此詩の結二句を評して、十字深警といつた。

萬山

萬山

西行度連山。北出臨漢水。

西行して連山を度り、北出して漢水に臨む。

漢水蹙成潭。旋轉山之趾。

漢水は蹙りて潭を成し、山の趾に旋轉す。

禪房久已壞。古甃含清泚。

禪房は久しく已に壞れ、古甃清泚を含む。

下有仲宣欄。綆刻深容指。

下に仲宣の欄あり、綆刻は深くして指を容る。

回頭望西北。隱隱龜背起。

頭を回して西北を望めば、隱隱として龜背起る。

傳云古隆中。萬樹桑柘美。

傳へいふ古の隆中と、萬樹桑柘美なり。

月炯轉山曲。山上見洲尾。

月炯かにして山曲に轉ず、山上洲尾を見る。

綠水帶平沙。盤盤如抱珥。

綠水平沙を帯び、盤盤として抱珥の如し。

山川近且秀。不到嬾成恥。

山川長くして且秀づ、到らざれば嬾くして恥を成す。

問之安能詳。畫地費簪篋。

之を問ふも安んぞ能く詳かにせん、地に畫して簪篋を費す。

【字解】 【一】 萬山 湖北襄陽縣の西北に在ることは前にも述べた。元和郡縣志に、萬山一名漢阜山、在襄陽縣西十一里。太平寰宇記に、萬山北隔沔水。【二】 潭 淵をいふ、孟浩然が萬山潭の詩自註にいふ、沈碑潭と。【三】 旋 轉山之趾 易林に、行於山趾。



【四】古甃 古い敷き瓦。陳陶の詩に「蛟龍蟠古甃」。【五】仲宣欄 欄は井欄。襄陽志に、萬山東有王榮井、即仲宣樓。杜子美の詩に、應同王榮宅、留井觀山前。【六】隱隱龜背起 隱隱は微にして明かでない貌、王昌齡が詩に、青山隱隱孤舟微。説文に、魴似龜背。【七】隆中 輿地志に、隆中山在襄陽府城北下、即諸葛亮隱居、有三顧門。【八】盤盤 曲折する貌、李白の蜀道難に、青泥何盤盤。【九】抱珥 日傍の氣、漢書天文志の註に、凡氣在傍直對爲珥。在傍如半環、向日爲抱。【一〇】蕪地費管籥 後漢馬援傳に、於帝前聚米爲山谷、指畫形勢。蜀志許慈傳に、指掌畫地、舉手可采。管籥は、かんざしと鞭。管は連冠於髮、籥は馬策。

【題義】萬山は一名、漢阜山、鄭交甫が玉女に見えた處であることは、前にも述べた通りである。此の詩は、東坡、萬山に遊んで賦したのではない、弟の話を聞いて作つたのである。東坡の自註に、時獨不游、問轍而作とある。

【詩意】西に行いて連山を躡る、北に出て漢水に至つた。此の邊の漢水は淵をなして山の麓を旋つて居る。山の寺は荒れ果てて、古い敷き瓦のみが清い色を帯びて居る。寺の下に、名高い王仲宣の井欄がある。井戸繩が深く食ひ込んで指が容る。西北に龜の背のやうな處が諸葛孔明の寓居した隆中である。澤山の桑が美しく茂つて居る。月は明に山の曲に移る。山上から洲の端が見られる。緑の水が白い沙を帯び、曲折してまはり廻る。日の傍の氣のやうに見える。かかる秀山長川、行いて見ないのは、懶けものといふ恥を招く。其の地を踏まなければ其の情を盡くすことが出来ない。地に管や鞭を畫して、徒に説明の勞を費させるのみである。

隆中

隆中

諸葛來西國。千年愛未衰。

諸葛西國に來る、千年愛未だ衰へず。

今朝游故里。蜀客不勝悲。

今朝故里に遊ぶ、蜀客は悲に勝へず。

誰言襄陽野。生此萬乘師。

誰か言ふ襄陽の野に、此の萬乘の師を生ずと。

山中有遺貌。矯矯龍之姿。

山中に遺貌あり、矯矯たる龍の姿。

龍蟠山水秀。龍去淵潭移。

龍蟠れば山水秀で、龍去れば淵潭移る。

空餘蜿蜒蹟。使我寒涕垂。

空しく餘す蜿蜒の蹟、我をして寒涕を垂れしむ。

【字解】【一】隆中 漢晉春秋に、諸葛亮家於南陽之鄧縣、在襄陽城西二十里、號曰隆中。太平寰宇記に、襄陽縣有諸葛宅。三顧草廬は即ち此宅。一説にいふ、孔明躬耕南陽、乃襄陽之南陽城、非今之南陽郡也。【二】生此萬乘師 揚雄の解嘲に、孟軻雖連蹇、猶爲萬乘師。【三】矯矯 介子推の傳に、有龍矯矯。矯矯は壯なる貌。【四】蜿蜒 龍蛇などのうねり行く貌、蛇行蜿蜒不能上阪。

【題義】隆中に諸葛の故宅がある。荊州記に、宅西有山臨水、孔明嘗登之、鼓琴爲梁父吟、因名此山爲樂山とある。

【詩意】諸葛孔明は、躬、隴畝に耕し、好んで梁父の吟をなす。時に劉備は新野(今の新野縣、河南汝陽道に屬す)に屯したが、徐庶は劉備に見えて曰く、諸葛孔明者、臥龍也、將軍豈願見之乎、と。又曰く、此人可就見、不可屈致と。孔明は劉備の三顧に逢ひて、南陽の草廬を出でたのである。爾來、孔明は、景仰の人となつて、愛が未だ衰へない。今朝余は其の故里に遊んで、古を懷うて感慨に



城へない。襄陽の此の田舎に、帝王の師を出さうとは思はなかつた。山中にある孔明の遺貌は、矯矯たる龍姿、龍あれば山水秀で、龍去れば淵も移る。龍蜿蜒の遺蹟を訪うて、涕涙を禁ずることが出来ない。

【餘論】紀昀は此詩を評して起四句全入律、意亦猶人而寫來脫洒、と。

竹葉酒

竹葉酒

楚人汲漢水。釀酒古宜城。

楚人漢水を汲み、酒を釀す古宜城。

春風吹酒熟。猶似漢江清。

春風酒を吹いて熟し、猶ほ漢江の清きに似たり。

者舊人何在。邱墳應已平。

者舊人何にか在る、邱墳應に已に平なるべし。

惟餘竹葉在。留此千古情。

惟餘して竹葉在り、此の千古の情を留む。

【字解】

【一】竹葉 酒の異名、尺牘雙魚の註に、釀酒、竹葉を以て其の中に雜ふ、極めて清潔なり、故に酒を謂つて竹葉となす。酒譜に、蒼梧之地、釀酒以竹葉、雜於中、極清潔。【二】宜城 楚の鄆陵。太平寰宇記に、宜城、襄陽屬縣、在府南九十五里。宜城、名勝志に、宜城有金沙泉、在縣東二里、其泉造酒甘美、世稱宜城醞、又名竹葉春。【三】春風吹酒熟 梁元帝の詩に、宜城醞酒今朝熟。【四】者舊 襄陽に者舊傳あり。【五】邱墳 江淹の恨賦に、琴瑟滅兮邱隴平。【六】竹葉在 杜子美の詩に、三杯竹葉清。張華の輕薄篇に、蒼梧竹葉清、宜城九醞。

【題義】

昭明太子の將酒篇に、洛陽輕薄子、長安游俠兒、宜城溢渠椀、中山浮羽卮とある。宜城は、

本楚の鄆都、天寶元年、宜城縣に改めた。故城は今の縣南に在る。其の地から美酒を出し、俗に其の宜城美酒を竹葉春と名ける。古詩にも、竹葉清香好、何妨飲數杯とある。

【詩意】襄陽に美酒がある。漢水を用ひて宜城で釀したものであるから、世に宜城醞といふ。竹葉の中に雜へて、漢江の清きに似て居る所から竹葉春といふ。さて此の襄陽の地には、多くの古老があつて者舊傳に載つて居る。而も其の人人は今、何處にある。墳土も已に平かとなつたであらう。惟竹葉の在るありて、千古風流の情を留めて居る。

【餘論】紀昀は此詩を頗有風調、然是空腔、若以三種爲超妙、則終身在窠臼中と評して居る。窠臼は鳥の栖、穴中に在るを窠といひ、樹上にあるを巢といふ。栖が臼の形に似たるより窠臼といふ。在窠臼中は現成格式に囚はれた意である。故に踏常襲故を落窠臼といふ。

鰕魚

鰕魚

曉日照江水。遊魚似玉瓶。

曉日江水を照し、遊魚玉瓶に似たり。

誰言解縮項。

誰か言ふ解く項を縮むと。

貪餌縮項每遭烹。

餌を貪りて項を縮め毎に烹らるるに遭ふ。

杜老當年意。臨流憶孟生。

杜老當年の意、流に臨みて孟生を憶ふ。



吾今又悲子。輟筋涕縱橫。

吾今又子を悲しみ、筋を輟めて涕縱橫。

【字解】**一** 鱸 古は鮓といふ、體廣くして扁、頭も尾も皆、尖小、鱗は細い。淡水に産する。郊居賦に、赤鯉青鮓、細鱗縮項と見ゆ。**二** 縮項 宋の張敬兒、刺史となり、六檣船を作り、齊の高帝に獻じて曰く、奉_二縮項縮項鱸_一一千八百頭_一と。一本には食餌縮項の縮項の二字無し。勝れりと爲す。**三** 杜老當年云云 杜子美の詩に、復憶襄陽孟浩然、清詩句句盡堪傳、祇今耆舊無_二新語_一、漫釣槎頭縮項鱸。孟浩然的詩に、鳥泊隨陽雁、魚藏縮項鱸。筋は箸、竹筋、ヒ筋の筋。

【題義】襄陽志に、漢江出_二鱸魚_一、土人以_レ槎斷_レ水、鱸多依_レ槎、因號_二槎頭鱸_一とある。孟浩然の詩に、試垂_二竹竿_一釣、果得_二查頭鱸_一、鱸魚を詠じて點綴の警切なるを覺ゆ。

【詩意】朝日が水を照して、遊魚がありありと數へられる。鱸魚を縮項鱸と人は言ふが、項を縮めないで、餌を食ひ、果ては烹て食はれる。昔、晉の翟莊は、弋釣を事としたが、長ずるに及び、獵の方は廢めた。其の譯を聞くと、獵は我よりし、釣は物よりして、未だ頓かに盡さない。故に先づ其の甚だしいものを節するのである。且つ餌を食つたり、釣を吞んだりするのは我でないと言つた。翟莊は、晩年亦、釣をも棄てた。又、杜子美は、詩友孟浩然を憶うて已まなかつたが、吾は今、又、汝鱸魚を悲しみて、之を食ふに忍びない。筋を輟めて涕を流した。

食雉

雉を食ふ

雄雉曳_二修尾_一驚飛向日斜。

雄雉修尾を曳き、驚飛日に向つて斜なり。

空中紛格鬪。綵羽落如花。

空中紛として格鬪し、綵羽落つること花の如し。

喧呼勇不顧。投網誰復嗟。

喧呼勇みて顧みず、網に投じて誰か復嗟かん。

百錢得一雙。新味時所佳。

百錢一雙を得、新味時に佳とする所。

烹煎雜鷄鶩。爪距漫槎牙。

烹煎して雞鶩を雜ふ、爪距漫に槎牙。

誰知化爲蜃。海上落飛鴉。

誰か知らん化して蜃となるを、海上に飛鴉落つ。

【字解】**一** 修尾 長い尾、鍾會の孔雀賦に、裁_二修尾之翹翹_一。翹翹は長い貌。**二** 紛格鬪 張華の禽經に、雉介鳥也、善搏鬪。易林に、彫鷄無_レ距與_レ鵠格鬪。**三** 投網 詩に雉離_二子羅_一。**四** 烹煎 烹熬といふに同じ、陸游の詩に、自携_二茶籠_一就烹煎。**五** 雜鷄鶩 左傳襄公二十八年に、公膳日雙雞、饗人竊更_レ之以_レ鶩。**六** 化爲蜃 月令に孟冬雉入_二大水_一爲_レ蜃。鄭註にいふ、大水、淮也と。搜神記に、千歲之雉入_レ海爲_レ蜃。**七** 海上落飛鴉 埤雅に、蜃形如_レ蛇而大、嘘_レ氣成_二樓臺_一、如_レ在_二烟霧中_一、高鳥倦_レ飛就_レ之、以_二息氣_一輒吸_レ之而下、俗謂_二之蜃樓_一。

【題義】雉に數種ある、青質五色なるを鷄雉といひ、長尾にして走つて鳴くを鷄雉といひ、黄色にして自ら呼ぶを鳴雉といひ、山雞にして小冠なるを鷄雉といひ、五色が備つて章を成すを翬といふ。此の詩の雉は鷄雉である。長尾にして善く走り、其の肉は甚だ美しい。

【詩意】雉の健なるものは鷄で尾の長さは六尺と、昔の書物に載つて居るが、其の鷄雉は、驚き飛んで空中で格鬪を始める。羽が落ちて顧みない。果ては網に羅つて烹て食はる。千年の雉、海に入つて蜃となるといふ傳説があるが、其の蜃は、また能く氣を吐いて樓臺を爲す。海中に、春夏の間、依



約として鳥激常に此氣がある。そして高鳥が飛び倦んで之に就くと、忽ち吸はれてしまふといふ傳説もある。

穎大夫廟

穎大夫の廟

人情難強回。天性可微感。

人情は強ひて回し難し、天性は微感すべし。

世人爭曲直。苦語費搖撼。

世人曲直を争ひ、苦語搖撼に費す。

大夫言何柔。暴主意自慘。

大夫言何ぞ柔かなる、暴主意自ら慘む。

荒祠傍孤冢。古隧有殘坎。

荒祠は孤冢に傍ひ、古隧に殘坎あり。

千年惟茅蕉。世亦貴其膽。

千年惟茅蕉、世亦其の膽を貴ぶも、

不解此微言。脱衣徒勇敢。

此の微言を解せずして、衣を脱して徒に勇敢。

【字解】

穎大夫、東坡の自註に、穎考叔也、廟在汝州穎橋。汝州は今の臨汝縣。太平寰宇記に、穎大夫廟在許州許昌縣、隋大業九年、重建汝州云云。【二】苦語、苦言に同じ、劉孝綽文に、苦言輒言。【三】搖撼、うごかす、宋史に、多起邪說以搖撼在位。【四】古隧、江總の詩に、缺碑橫古隧。【五】殘坎、坎は溝穴。【六】茅蕉、秦の始皇帝は太后を雍に遷し、令を下して曰く、敢諫者死と。諫めて死するもの二十七人、齊の客茅蕉衣を解いて井幹の上に立つて諫む。始皇之を釋して迎へて太后を歸し、母子たること初の如し。【七】微言、談言を用ひて、微しく意に中てる、列子說符に、人可與微言乎。

【題義】

昔、穎考叔といふは、穎谷といふ土地の代官であつたが、鄭の莊公の悔心あるを聞いて、は

るばる都に上つて諷諫し、公の心を感化した。左傳隱公元年に、鄭莊公寘姜氏於城穎而誓之曰、不レ及黃泉無レ相見也、既而悔之、穎考叔爲穎谷封人、聞之有レ獻於公、公賜之食、食舍肉、公問之、對曰、小人有レ母、皆嘗小人之食矣、未嘗君之羹、請以遺之、公曰爾有レ母遺、繫我獨無、因語之故、且告之悔、對曰、君何患焉、若闕地及泉、隧而相見、其誰曰不然、公從之、遂爲母子如初、とある。

【詩意】人は感情に支配される。感情の盛んであるときは、強ひて回すことは出来ない。微言すれば、諫が入る。世の人は諫めると言へば、言葉を厲しく曲直を争ふ。穎考叔の莊公を諫める言は、如何にも柔和しい。流石の莊公も自ら慘みて、孝心を起した。其の穎考叔の墓も今は荒れ果て、莊公母子の誓を立てたといふ古い隧道も、今は殘坎のみ。秦の始皇を直諫して、衣を解いて井幹の上に立つたといふ茅蕉の事は、千年の久しき今日でも人に貴ばれて居るが、茅蕉は此の微言といふことを解しない、徒に勇敢であつた。

【餘論】紀昀は此詩を評して、純用諫臣從諷之意、而語特明透、と言つて居る。

新渠詩 并敘

新渠の詩 并に敘

庚子正月。予過唐州。太守趙侯始復三陂。疏召渠。招懷遠人。散耕於唐。予方爲旅人。不得親執壺漿。簞食。以與侯勸逆四方來者。獨爲新渠詩。



五章以告於道路致侯之意其詞曰

【訓讀】庚子正月、予唐州を過ぐ、太守趙侯始て三陂を復し、召渠を疏し、遠人を招懷して唐に散耕せしむ。予方に旅人となり、親ら壺漿簞食を執りて以て侯と四方の來者を勸逆することを得ず、獨新渠詩五章を爲りて以て道路に告げ、侯の意を致す。其の詞に曰く、

【字解】一 庚子 宋、仁宗の嘉祐五年（皇紀一七二〇年、西曆一〇六〇年）。二 唐州 十道志に、唐州淮安郡、秦爲南陽郡と見ゆ。春秋、唐侯之國、唐置唐州、明降爲縣、明清、皆屬河南南陽府、民國改爲泌源縣。太平寰宇記に、武德五年、分置唐州。三 太守趙侯 宋の趙尙寬、字は濟之、安仁の子。仁宗の時、知唐州。唐州は沃壤であつたが、五代の亂で、土曠民稀。尙寬は圖記を按視し、漢の召信臣が陂渠の故迹を得、三陂一渠を疏し、田に溉ぐ萬餘頃。四 三陂 水經註に、東荊州有馬仁陂、湖陽陂、唐子陂。五 召渠 召信臣の渠、輿地記に、漢召信臣爲南陽守、興水利、露宿課耕、民呼爲召父、有召堰、在今唐縣界内。六 壺漿簞食 孟子、梁惠王篇に、簞食壺漿、以迎王師。食は飯、簞は飯を入れる竹製の器。漿は米汁で作つた飲料、壺は瓶。

新渠之水其來舒舒。  
溢流於野至於通衢。  
渠成如神民始不知。  
問誰爲之邦君趙侯。  
新渠之田在渠左右。

新渠の水、其の來る舒舒。  
流れて野に溢れ、通衢に至る。  
渠成る神の如く、民始め知らず。  
問ふ誰か之を爲る、邦君趙侯。  
新渠の田、渠の左右に在り。

渠來奕奕如赴如湊。  
如雲斯積如屋斯溜。  
嗟唐之人始識杭稌。  
新渠之民自淮及潭。  
挈其婦姑或走而顛。  
王命趙侯宥我新民。  
無與王事以訖七年。  
侯謂新民爾既來止。  
其歸爾邑告爾鄰里。  
良田千萬爾擇爾取。  
爾耕爾食遂爲爾有。  
築室於唐孔碩且堅。  
生爲唐民飽粥與饘。  
死葬於唐祭有鷄豚。

渠來る奕奕、赴くが如く湊ぐが如く、  
雲の如く斯れ積み、屋の如く斯れ溜る。  
嗟唐の人、始て杭稌を識る。  
新渠の民、淮より潭に及ぶ。  
其の婦姑を挈へ、或は走りて顛へる。  
王、趙侯に命じて、我新民を宥けて、  
王事に與るなからしめ、以て七年を訖る。  
侯新民に謂ふ、爾既に來り止まる。  
其れ爾の邑に歸り、爾の鄰里に告げよ。  
良田千萬、爾擇び爾取れ、  
爾耕し爾食へ、遂に爾の有となる。  
室を唐に築く、孔碩に且つ堅し。  
生きて唐の民と爲り、粥と饘とに飽く。  
死して唐に葬られ、祭るに雞豚あり。



天子有命我惟爾安。

天子命あり、我爾の安きを惟ふ。

【字解】(一) 舒舒、ゆるやかな貌、韓退之の詩に、淮之水舒舒。(二) 通衢、四方に通ずるちまた、漢書東方朔傳に、燔之於四通之衢。(三) 奕奕、盛なる貌、詩の魯頌に新廟奕奕、詩の大雅に奕奕梁山。(四) 秣、秣、秣はもちこめ。同じく東坡の詩に、但願飽秣秣、年年樂秋成。(五) 潭、潭州、元和郡縣志に、江南道有潭州。(六) 訖、訖、趙尙寬は、仁宗の至和元年(皇紀一七一四年、西曆一〇五四年)を以て、唐州に知となり、嘉祐五年に至る、故に詩に七年といふ。訖はをばる、卒と同じ。(七) 孔、古文では甚に同じ、詩に、兄弟孔懷。後世は韻文でなければ用ひない。(八) 粥與饘、左傳昭公七年の註に、饘、粥、餽屬。禮弓の疏に厚曰饘、希曰粥。

【題義】趙尙寬が唐州の知事となるや、圖記を按視して召信臣が故迹を得、卒を發して三大陂と一大渠とを復し、田に溉ぐこと萬餘頃。又、民をして自ら支渠を爲り、轉相浸灌せしむ。四方の民が雲集すると、尙寬は復、請うて荒田を民の口數に應じて授け、民に官錢を貸して耕牛を買はしむ。三年に及ぶ頃、廢田が盡く膏腴となつた。其の結果、獨、流民が自ら歸するばかりでなく、淮湖の民、至るもの萬餘戸といふことである。此詩は之を詠じたもので、一章と二章とは唐の民に告げるもの。三章と四章とは、流民に告げるもの、そして第五章は全章を總結して居る。

【詩意】(第一章は) 新渠の水は、ゆるやかに流れ來つて、四方に通じ、灌溉の用をする。これ誰の力、邦君趙司寬の力である。(第二章は) 新に渠が出來て、水が赴くが如く濼ぐが如くに來る。お蔭で、唐の人は稷や糯の味を知る。(第三章は) 淮州より潭州に至る多くの民が七年の久しき趙侯の善政を蒙つたことを言ふ。(第四章は) 自作自給を勧め、流民となるを免れしむ。(第五章は) 子來の民は唐州に

家を造る、大きくて堅い。生きて唐州の民となり、死して唐州に葬らる。(それは王様の餘澤であること)を言ひて全章を總結したのである。

雙鳧觀

雙鳧觀

王喬古仙子。時出觀人寰。

王喬は古の仙子、時に出でて人寰を觀る。

常爲漢郎吏。厭世去無還。

常て漢の郎吏となり、世を厭ひて去つて還るなし。

雙鳧偶爲戲。聊以驚世頑。

雙鳧偶々たまたまはなすは、聊か以て世頑を驚かす。

不然神仙迹。羅網安能攀。

然らずんば神仙の迹、網に羅つて安んぞ能く攀せん。

紛紛塵埃中。銅印紆青綸。

紛紛たる塵埃の中、銅印は青綸を紆ふ。

安知無隱者。竊笑彼愚奸。

安んぞ知らん隱るるなきもの、竊に彼の愚奸を笑ふことを。

【字解】(一) 雙鳧觀、東坡自註にいふ、在葉縣。元和郡縣志に、汝州葉縣、後漢書謂之小長安、開元三年、於縣置仙州。以漢時王喬於此得仙也。(二) 王喬、後漢王喬傳に、顯宗世爲葉令。(三) 人寰、人の世、寰は界。白居易の長恨歌に、回頭下望人寰處。(四) 爲漢郎吏、王喬は顯宗の世、尙書郎となり、出でて葉令となる。(五) 銅印紆青綸、綸は青絲の綬、前漢書百官公卿表に、凡吏秩比六百尺以上、皆銅印墨綬。(六) 竊笑、戰國策に、臣竊笑之。

【題義】後漢の王喬は、葉令となつたが、神仙の術がある。漢の法に、畿内の長史は、節朔に朝することになつて居る。喬は毎月朔旦に、常に縣から來朝する。帝は其の來ることが數で、車騎を見ざ



るを怪しみ、密に太史をして之を伺はしめた所、將に至らんとするとき、雙鳧が南から来る。是に於て鳧の至るを候ひ、羅を擧げて之を張つて、但、二つの鳥を得た。それは嘗て賜うた所の尙書履であつたといふことである。此詩は此の故事に就いて詠じたものである。

【詩意】古仙人王喬は、天上にあるべきを、時に人界に出で、尙書郎となり、葉縣の令となる。仙人は人界を厭うたから、去つて還らない筈であるのに、雙鳧となつて朔旦に朝するのは、如何なる譯か、それは世の分別のない頑なものを警醒する爲めであらう。なせといふに、既に神仙の術を得たものが、網に罹つて飛行の出来ないといふ道理はないからである。もし又、紛紛たる塵埃の此の中に下つて、銅印を帯び、青絲綬をまとへることに心のあるならば、安んぞ知らん、隠れない人間界のものは、心窃に彼の愚であり姦であることを笑ふであらう。

許州西湖

許州の西湖

西湖小雨晴。灩灩春渠長。

西湖小雨晴れ、灩灩として春渠長し。

來從古城角。夜半轉新響。

來る古城の角よりし、夜半新響を轉ず。

使君欲春游。浚沼役千掌。

使君春游を欲し、沼を浚うて千掌を役す。

紛紜具畚鍤。開若蟻運壤。

紛紜として畚鍤を具へ、開すること蟻の壤を運ぶが若し。

天桃弄春色。生意寒猶快。

天桃春色を弄す、生意寒うして猶ほ快む。

惟有落殘梅。標格苦矜爽。

惟落殘の梅あり、標格苦た矜爽。

游人空已集。挈榼三且兩。

游人空として已に集る、挈榼三且つ兩。

醉客臥道旁。扶起尙偃仰。

醉客道旁に臥す、扶け起すも尙ほ偃仰。

池臺信宏麗。貴與民同賞。

池臺信に宏麗、貴きは民と同じく賞す。

但恐城市歡。不知田野愴。

但恐る城市歡びて、田野の愴むを知らざるを。

潁川七不登。野氣長蒼莽。

潁川は七たび登らず、野氣長へに蒼莽。

誰知萬里客。湖上獨長想。

誰か知らん萬里の客、湖上獨長く想ふ。

【字解】一 許州 春秋時代の許國、漢の潁陰縣、清の時は河南省に屬し、民國となつて許昌縣と改めた。一統志に、河南西湖、

一在許州、一在鄆陵。二 灩灩 水波のただよひ動く貌、何遜の詩に、的的與沙靜、灩灩逐波輕。三 春渠 劉孝綽の詩に、

帳殿臨春渠。四 使君欲春游 使君は刺史をいふ、前に出づ。宋の苕公、此州の太守となつたとき、黃河を起して此の西湖に

導き、村夫が之を浚治すと傳ふ。五 畚鍤 土を運ぶもつ、土を掘る鋤。晉の束皙が廣農議に、雲雨生於畚鍤。蟻運壤、管子に、

陽朋曰、蟻壤寸而有水云云。六 天桃 詩の周南桃夭篇に、桃之夭夭、灼灼其華。七 快 廣韻に、快、愜也と見ゆ。情が満足



【題義】許曲の西湖は、其の始は唐の曲環が鎮を作した時、土を取つて城を築き、水を導きて濬へたものである。宋の苕公が太守となつて、黃河を起し、村夫をして之を浚治せしめ大きくなつたものさうで、鑿開魚鳥忘情地、展盡江湖極目天といふ詩が、其の時の光景である。此詩の結びの處は、杜甫の觀打魚の詩から化し來つたもので、忽歸三莊論一妙、非迂詞一と古人も評して居る。

【詩意】許州の西湖の眺は格別で、小雨が晴れると、古城の一角から濼濼として波を逐うて渠水が流れ、夜半に新響を傳へる。太守苕公は風流を好み、春游のために、村夫千人をして沼を浚はした。土を運ぶ舂や、土を掘る鋤が縦横して、恰も蟻の壤を運ぶ開ぎであつた。桃李の春が來たが、生意は寒氣の爲に十分ではなかつた。ただ落残りの梅が、氣高い姿を呈して居る。それで春を探る遊人は空として聚る。一瓢の春酒兩三人、時に醉客の道の傍に臥すを見る。扶け起しても、起きたり倒れたりする。池臺の建築は廣くて美しい。太守の民と賞翫を同じうする所は、欣ばしいが、ただ恐れることは城中の人だけが歡樂を得て、田野の惰める實情を知らないことである。事實、潁川は七年の不作である。野氣は蒼莽である。誰か知らん萬里の客、湖上に立ちて感懷に堪へないことを。

阮籍嘯臺

阮籍の嘯臺

阮生古狂達。遁世默無言。  
猶餘胸中氣。長嘯獨軒軒。

阮生は古の狂達、世を遁れ黙して言なし。  
猶ほ餘す胸中の氣、長嘯獨軒軒。

高情遺萬物。不與世俗論。

高情萬物を遺れ、世俗の論に與らず。

登臨偶自寫。激越蕩乾坤。

登臨偶自ら寫し、激越乾坤を蕩かす。

醒爲嘯所發。飲爲醉所昏。

醒むれば嘯の發する所となり、飲めば醉の昏する所となる。

誰能與之較。亂世足自存。

誰か能く之と較せん、亂世自ら存するに足る。

【字解】

【一】嘯臺 太平寰宇記に、阮籍臺在尉氏縣東南二十步。尉氏縣は、春秋時代の鄭邑、今は河南開封道に屬す。【二】狂達 世説に、袁羊、古之遺狂。【三】猶餘胸中氣 阮籍は濟世の志があつたが、魏晉の際、天下多事で、名士の全きを得るものが少いのを見、世事に與らず酣飲を常とした。【四】軒軒 舞ふ貌、淮南子に、見一士軒軒然方迎風而舞。【五】高情 謝靈運の詩に、高情屬天雲。【六】激越 音聲がげげしく、清くあがる、班固の西都賦に、聲激越、營厲天。

【題義】

陳留の阮籍は、所謂竹林七賢の一人で、酒を嗜み、能く嘯いて琴を弾くことが上手であつた。嘗て蘇門山で、孫登に遇ひ、與に栖神導氣の術を商つたが、孫登は應へなかつた。籍は長嘯して退いて半嶺に至ると、不思議や、谷間に鸞鳳の音響がする。孫登の嘯いて居るのであつたといふ話がある。陳留に阮公の嘯臺があり。此詩は、阮籍の此臺に登つて、長嘯し、酣醉したことを詠じたのである。

【詩意】

阮籍字は嗣宗、古の達觀した狂生である。世を遁れて、物を言はないが、併し全く世を顧みないのでない。胸中の氣は、依然として存し、世を濟ふの志が見える。其の長嘯軒軒、高情萬物を遺れるのは、時事が日に非であるから、禍を避けるが爲めであらう。嘯臺に登つて發する激越の



音は、天地を動かすべく、醒めては長嘯し、酔ひては昏昏として眠むる。これが亂世に在つて自ら存する所以である。

大雪獨留尉氏。有客入驛呼與飲至醉。詰旦客南去。竟不知其誰。

大雪、獨尉氏に留る、客あり驛に入る、呼んで與に飲み、醉に至る、詰旦、客南に去る、竟に其の誰なるかを知らず

古驛無人雪滿庭。

古驛人無くして雪庭に滿つ、

有客冒雪來自北。

客あり雪を冒して來る北よりす。

紛紛笠上已盈寸。

紛紛として笠上已に寸に盈つ、

下馬登堂面蒼黑。

馬を下り堂に登りて面は蒼黒。

苦寒有酒不能飲。

苦寒酒あれども飲むこと能はず、

見之何必問相識。

之を見る何ぞ必ずしも相識を問はん。

我酌徐徐不滿觥。

我酌む徐徐觥に滿たず、

看客倒盡不留澀。

客を看るに倒盡して澀を留めず。

【字解】尉氏、縣の名。もと鄭國之東鄙、鄭の大夫尉氏の邑であつた所から邑の名となつた。太平寰宇記に、晉時南阮所居。九域志に、在開封南九十里。

【一】古驛、漢書の註に、傳若今之驛。古は車を以てするを傳車といふ。其の後、又、單に騎を置く、之を驛騎といふ。

【二】笠、臺笠、莎草の皮で爲つた笠、詩に、彼都人士、臺笠緇撮とある。

【三】不澀、東坡、又、飲酒但

千門晝閉行路絕。

千門晝閉ちて行路絶え、

相與笑語不知夕。

相與に笑語して夕を知らず。

醉中不復問姓名。

醉中復姓名を問はず、

上馬忽去橫短策。

馬上に忽ち去りて短策を横ふ。

飲澀の句あり、蜀中の語なるべし。

【五】短策、左傳襄公十七年に、左師爲己短策。同、文公十三年に、繞朝贈之以策。註にいふ、馬搥と。

【題義】東坡が大雪山に逢つて、尉氏縣に逗留し、客と對飲したことを賦したのである。尉氏縣は、春秋時代に鄭邑であつたことは、前にも述べたが、漢の時に縣となり、明清には、河南開封府に屬し、今は河南開封道に屬して居る。

【詩意】尉氏縣の古驛は、大雪の爲に、往來の人も絶えた。此時、雪を冒して北方から來た客があつた。笠の上に積つた雪は一寸餘、面色は疲れて青黒い。寒さがあまり強いので、最初は酒も飲めなかつた。雪中の遇合、必ずしも曾て相識ると否とを問はない。兩人對酌、我は酌む徐徐、酒觥に滿たないのに、彼は既に瓶を倒した。酒量は到底彼に及ばない。雪の爲に千門閉ち、行人絶ゆ。兩人して笑語、日の暮れるも知らなく、酔うて互に姓名も名乗らなかつたが、彼は馬上に上つて立ち去つた。

黃河

黃河

活活何人見混茫。

活活何人か混茫を見る、

【字解】活活、水の盛んに流れる聲、詩の衛風に、河水洋洋、

北流活活。一本に浩浩とある。



崑崙氣脈本來黃。

崑崙氣脈本來は黄なり。

濁流若解汚清濟。

濁流若し清濟を汚すを解せば、

驚浪應須動太行。

驚浪は應に須らく太行を動かすべし。

帝假一源神禹蹟。

帝一源を假して禹の蹟を神にし、

世流三患梗堯鄉。

世三患を流して堯の郷を梗ぐ。

靈槎果有仙家事。

靈槎果して仙家の事あらば、

試問青天路短長。

試みに青天に路の短長を問はん。

行山、一名五行山。【六】神禹蹟。大禹が治水の功績をいふ。【七】三患。莊子天地篇に、乘彼白雲、至子帝鄉、三患莫至、身常無殃。三患は、病、老、死をいふ。死生を一にする、故に三患が至らない。【八】靈槎。博物志に、昔人有泛槎至天河、得石歸、示嚴君平、曰、是織女支機石也。

【題義】黄河は、古、ただ河と稱した。後人、其の沙が多くて色の黄なるより黄河といふ。水源は青海に出で、東流して二大瀦となり、曲折して甘肅境に入り、又、東北して長城に出で、賀蘭山の東麓、陰山の南麓に循つて流れ、西折して南し、一大曲を成す。是を河套とす。又、南して長城に入り、壺口、龍門の諸山を経て、山西、陝西の界をなし、東折して河南の境に入り、始めて高地より平地に流る、直隸、山東を経て利津縣に至り、大清河の故道を奪つて海に入る。下游は、河南より以下常に水患があつて、河道に變遷がある。

【詩意】黄河の水は活活と流れて居るが、其の混茫を窮めたものはない。水源は崑崙山から出て、水色は黄である。濁河は終に清濟を汚すことが出来ないうが、もし汚すことが出来れば、驚浪は應に太行山を動かすことが出来やう。堯の時に九年の洪水があつた。上帝は黄河の一流を假して大禹をして治水の功をなさしめ、世、病、老、死の三患を除いて堯の郷を梗いだ。又、張騫は河源を窮めたが、昔の人に槎を泛べて天河に至り支機石を得て歸つたといふものがある。靈槎果して上天が出来れば、試みに問はん、青天に至る路の短長を。それは叶はないであらう。

朱亥墓

昔日朱公子。雄豪不可追。

昔日の朱公子、雄豪追ふべからず。

今來遊故國。大家屈稱兒。

今來つて故國に遊ぶ、大家屈して兒と稱す。

平日輕公相。千金棄若遺。

平日公相を輕んじ、千金棄てて遺るる若し。

梁人不好事。名姓寄當時。

梁人は事を好まず、名姓當時に寄す。

魯史盜齊豹。求名誰復知。

魯史は齊豹を盜とす、名を求むるも誰か復知らん。

慎無怨世俗。猶不遭仲尼。

慎んで世俗を怨むこと無かれ、猶ほ仲尼に遭はず。

【字解】【一】朱亥墓。東坡の自註に、俗謂屠兒原。太平寰宇記に、朱亥墓在封邱縣西三十里。汴京遺蹟志に、朱亥墓在開封西



南朱仙鎮。どちらが正しいか分らない。【二】魯史 孔子の筆削した春秋をいふ。【三】盜・齊豹 春秋昭公二十年、秋、盜殺衛侯之兄縶。此の盜とあるは、齊豹のこと。齊豹は不義のことを爲し、亂を起して之を殺せし故に盜とした。

【題義】朱亥は、戰國魏の大梁の人。勇俠にして屠肆に隱る。侯嬴は之を魏の公子無忌（信陵君）に薦めた。秦の昭王が趙を攻める、無忌は之を救はうとしたが、兵力を要するので、朱亥をして四十斤の鐵椎を袖にし、將軍晉鄙を擊殺して、其の軍を奪ひ、遂に秦の兵を退けて趙を存した。其の朱亥の墓を訪うて懷を述べたのである。

【詩意】朱亥は賢者であつたが、世の人に知られないで屠間に隱れたのである。雄豪は常人の及ぶ所ではない。今、其の遺跡を訪ねると、屠兒原といつて、大家が兒と稱されて居る。朱亥は平生、富貴を輕んずる。梁人も元來、事を好まない。従つて名姓も、昔のままにして居る。一體、春秋の筆法によると、心術を責めるから、齊豹の不義を筆誅して盜とした。人は其の名姓を知ることが出来ない。朱亥の報じた所は私恩、負いた所は大義。然るに司馬遷は、晉鄙の死節を美めないで、朱亥の豪俠を多とするは、其の當を得ない。もし春秋の義を以て之を責めるならば、盜殺晉鄙としなければならぬ。幸にして孔子に遭はなかつたから盜名を免れた。して見ると、世俗の呼んで屠兒とするのは、辱しめたことにはならないであらう。

次韻水官詩

水官の詩に次韻す

淨因大覺禪師以閻立本畫水官遺編禮公公既報之以詩謂某汝亦作某頓首再拜次韻仍錄一詩爲一卷獻之。

【訓讀】淨因大覺禪師、閻立本の畫ける水官を以て編禮公に遺る、公既に之に報するに詩を以てし、某に謂ふ、汝も亦作れと、某頓首再拜して韻に次す、仍て二詩を録して一卷となし之を獻す。

【字解】【一】水官 水神をいふ、蘇洵の詩に、水官騎蒼龍、龍行欲上天。【二】淨因院 宋の仁宗の皇祐中、勅建。明州の懷瑾禪師、詔に應じて之に住し、號を大覺禪師と賜はつた。【三】閻立本 唐朝名畫錄に、立本位居宰相、與兄立德齊名。【四】編禮公 蘇洵をいふ。宋史蘇洵傳に、嘉祐開除祕省校書郎、會太常修纂禮書、乃以爲霸州文安王溥、與項城令姚闢、同修爲太常因革禮一百卷。（太常は官名、宗廟禮儀を掌る）續通鑑長編に、嘉祐六年七月、蘇洵同編纂禮書。又、八年三月に、禮院編纂蘇洵貽書韓琦一言山陵事を載す。故に東坡の詩に編禮公と稱す。

高人豈學畫用筆乃其天。  
譬如善游人一一能操船。  
閻子本縫掖疇昔慕雲淵。  
丹青偶爲戲染指初嘗鼃。  
愛之不自己筆勢如風翻。  
傳聞貞觀中左衽解椎囊。

高人は豈畫を學ばんや、筆を用ゐるは乃ち其の天なり。  
譬へば善く遊ぶ人の、一一能く船を操るが如し。  
閻子は本縫掖、疇昔雲淵を慕ふ。  
丹青は偶々戲を爲すなり、指を染め初めて鼃を嘗む。  
之を愛して自ら已まず、筆勢は風の翻るが如し。  
傳へ聞く貞觀中、左衽椎囊を解く。



南夷羞白雉。佛國貢青蓮。  
 詔令擬王會。別殿寫戎蠻。  
 熊冠金絡額。豹袖擁旛旛。  
 傳入應門內。俯伏脫劍卷。  
 天姿儼龍鳳。雜沓朝鵬鱣。  
 神功與絕迹。後世兩莫扳。  
 自從李氏亡。羣盜竊山川。  
 長安三日火。至寶隨飛烟。  
 尙有脫身者。漂流出東關。  
 三官豈容獨。得此今已編。  
 吁嗟至神物。會合當有年。  
 京城諸權貴。欲取百計難。  
 贈以玉如意。豈能動高禪。  
 惟應一篇詩。皎若畫在前。

南夷は白雉を羞め、佛國は青蓮を貢す。  
 詔して王會に擬せしむ、別殿戎蠻を寫す。  
 熊冠金もて額を絡ひ、豹袖旛旛を擁し、  
 傳へて應門内に入る、俯伏して劍卷を脱す。  
 天姿儼として龍鳳、雜沓して鵬鱣を朝せしむ。  
 神功與に迹を絶ち、後世兩ながら扳くなし。  
 李氏の亡びしより、羣盜山川を竊み、  
 長安三日火あり、至寶は飛烟に隨ふ。  
 尙ほ身を脱せしものあり、漂流して東關を出づ。  
 三官は豈獨を容れんや、此を得て今已に編す。  
 吁嗟至神の物は、會合當に年あるべし。  
 京城の諸權貴、取らんと欲して百計難し。  
 贈るに玉如意を以てするも、豈能く高禪を動かさんや。  
 惟應に一篇の詩、皎として畫の前に在るが若し。

【字解】

【一】善游云云 莊子の達生篇に、顔淵問仲尼曰、吾嘗濟乎觶深之淵、津人操舟若神、吾問焉曰、操舟可學邪、曰可、善游者數能、若乃夫没人、則未嘗見舟、而便操之也。  
 【二】縫掖 儒者の服、禮記儒行篇に、孔子對哀公曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠。  
 【三】慕雲淵 江淹の別賦に、雖淵雲之墨妙、嚴樂之筆精。王子淵・楊子雲・嚴安・徐樂をいふ。一説に、漢書、終軍字子雲、王褒字子淵、二人合傳、故に東坡之を並稱す、楊子雲にあらずと。  
 【四】丹青偶爲戲 唐の太宗、侍臣と舟を春苑池に泛ぶ。異鳥の波に浴するを見て、上之を悦ぶ。坐者に詔して詩を賦せしめ、立本を召して畫かしむ。傳呼して畫師といふ。立本此時已に主爵郎中たり、歸つて其子を戒めて曰く、吾は少にして書を讀み、今、獨、畫を以て名あり。厮役等と等うせらる。汝曹、慎んで習ふこと勿れと。  
 【五】染指 指初嘗 左傳宣公四年に、楚人獻鼈於鄭靈公、子公之食指助、以示子家、曰、必嘗異味、及辛夫解鼈食大夫、召子公而弗與也、子公怒、染指於鼎、嘗之而出。  
 【六】左衽 論語憲問篇に、被髮左衽。夷狄の俗。  
 【七】椎髻 髻は總髻、唐書南蠻傳に、東謝蠻俗、椎髻、以絳垂於後。  
 【八】擬王會 貞觀三年に、東蠻の謝元深入朝す、中書侍郎顔師古奏す、昔周武王、治致太平、遠國歸款、乃集其事爲王會篇、可圖寫貽後以彰服遠之德と、之に従ひ、尙書圖立本に命じて之を畫かしむ。  
 【九】熊冠金絡額 舊唐書の東謝蠻傳に、貞觀三年、元深入朝、冠烏熊皮冠、以金銀絡額、身披毛毳。  
 【一〇】旛旛 釋名に旛、幡也。周禮に、通帛爲旛。應門、天子の正門。  
 【一一】俯伏脱劍卷 史記蘇秦傳に、俯伏侍取食。前漢司馬遷傳の註に、卷、弩弓也。  
 【一二】龍鳳 唐書太宗本紀に、龍鳳之姿、天日之表。  
 【一三】神功與絶迹 任昉の牋に、神功無紀。司馬相如の封禪文に、殊尤絶迹。  
 【一四】莫扳 扳は攀と同じ。  
 【一五】長安 漢書の地理志に、長安縣、高帝五年置。  
 【一六】三官 道家奉ずる所の神、天官、地官、水官。  
 【一七】玉如意 胡琮別傳に、吳時秣陵掘地、得白玉如意。

【題義】蘇老泉が大覺禪師に報じた詩といふのは、水官騎蒼龍、龍行欲上天、手攀時且住、浩若乘風船、不知幾何長、足尾猶在淵、下有二從臣、左右乘魚鼈、矍鑠相顧視、風舉衣袂翩、女子侍臣側、白頰垂雙鬢、手執雉尾扇、容如未開蓮、從者八九人、非鬼非戎蠻、出水未成列、先登揚旂旛、長刀擁旁牌、白羽注強弩、雖服甲與裳、狀貌猶鯨鱣、水獸不得從、仰面以手扳、空虛走



雷霆。雨電晦。九川、風師黑虎囊、面目昏。塵烟、翼從三神人、萬里朝天關。我從大覺師、得此詭怪編、畫者古閻子、於今三百年、見者誰不愛、予者誠已難、在子猶在子、此理寧非禪、報之以好詞、何必盡在前、である。此詩と東坡の詩と併せ觀て、題義を明にすることが出来る。

【詩意】閻立本は、位、宰相に居る、豈、屹屹として繪畫を學ばうぞ、丹青の巧みであるのは、其の天才である。善く遊ぶ人の水に親しむやうなものである。閻子は、もと儒生で、其の昔は終軍や王褒の文才を慕うたものである。丹青は、餘戯に過ぎない。一たび指を染めて廢められなく、筆勢は風の翻へるやうである。昔、唐の貞觀年間に、左衽の夷が椎鬢を解いて來朝し、又、南夷は白雉を、佛國は青蓮を各々貢獻した。詔して周の武王の時の故事に倣ひ、王會圖を作らしめたのである。そこで、別殿には戎蠻を寫す。烏熊の皮冠、金銀で額を絡うた。豹袖で旗を擁し、王宮正門内に入る。弓劍を脱して俯伏する。天姿は儼として龍鳳の衣をめされ、鵬鳥蛇鱷の象ある服を著けた卿大夫は雜沓して朝觀する。神功は比すべきなく、後世の及ぶ所でない。圖は之を寫したものである。唐朝が亡びて五代亂離の世となつて、羣盜が山川を竊む。此時に長安の火災で、至寶も焼けたが、此の圖は三官、即ち天神、地神、水神の力で、歸すべき所に歸する。京城の諸權貴は、之を手に入れやうとしても、それは難かしい。玉如意のやうな貴重品の品を贈つても、大覺禪師の心を動かすことは出来ない。ただ應に一篇の詩、皎として畫の前に至るが如し。これを贈物とする。

### 蘇東坡詩集 卷三

#### 古今體詩 五十二首

辛丑十一月十九日。既與子由別於鄭州西門之外。馬上賦詩一篇寄之

辛丑十一月十九日、既に子由と鄭州西門の外に別れ、馬上に詩一篇を賦して之に寄す

不飲胡爲醉兀兀。飲まざるに胡爲れぞ酔うて兀兀たる、  
此心已逐歸鞍發。此心已に歸鞍を逐うて發す。  
歸人猶自念庭闈。歸人猶ほ自ら庭闈を念ふ、  
今我何以慰寂寞。今我、何を以てか寂寞を慰せん。  
登高回首坡壠隔。高きに登りて首を回せば坡壠隔たり、  
但見烏帽出復沒。但見る烏帽の出で復沒するを。

【字解】(一) 鄭州 元和郡縣志に、春秋鄭國、晉置滎陽郡、開皇三年改鄭州。今の鄭縣、河南開封道に屬す。(二) 胡爲 なんすれぞと讀む。(三) 兀兀 酔へる狀、酒徳頌に、兀然而酔。白樂天の對酒詩に、所以劉阮輩、終年醉兀兀。又、不飲長如醉、加飧亦似飢。(四) 歸鞍



苦寒念爾衣裘薄。

苦寒念ふ爾の衣裘の薄く、

獨騎瘦馬踏殘月。

獨瘦馬に騎りて殘月を踏むを。

路人行歌居人樂。

路人は行歌し居人は樂しむ、

童僕怪我苦悽惻。

童僕我が苦だ悽惻するを怪しむ。

亦知人生要有別。

亦知る人生要するに別あるを、

但恐歲月去飄忽。

但恐る歲月去つて飄忽たるを。

寒燈相對記疇昔。

寒燈相對して疇昔を記す、

夜雨何時聽蕭瑟。

夜雨何れの時か蕭瑟を聽かん。

君知此意不可忘。

君此の意忘るべからざるを知らば、

慎勿苦愛高官職。

慎んで高官職を苦愛することなかれ。

【一】夜雨云云 東坡自註にいふ、嘗有夜雨對牀之言、故云爾と。韋蘇州が元常、全眞二生に與ふる詩に、寧知風雨夜、復此對牀眠とある。東坡、子由と懷遠驛に在り、嘗て韋詩を讀み、此句に至り惘然として之に感じ、早退共に閑居の樂を爲すを約したといふことである。【二】蕭瑟 寂しい貌。

【題義】辛丑、仁宗嘉祐六年(皇紀一七二二年、西曆一〇六一一年)東坡は年二十六で、制科に應じ大理寺評事簽書鳳翔府簽判(職官志に、大理寺評事正八品、諸州簽判從八品)を授けられ、任に赴く時、弟

子由は送つて鄭州に至り、其處で別れ、子由は京都に居る父(老泉、時に命を被り禮書を修めて、京師に留る)の許へ還つた。此詩は此時の作である。蘇氏兄弟の友愛に深かつたことが窺はれる。

【詩意】今、我は酒を飲まないのに、なぜ元元として酔ひたる時の心持であるか。(疑問を以て筆を起した。紀昀曰く、起得飄忽、と。)それは他ではない、我が心は既に弟子由の歸鞍を逐うて發したからである。さて、歸人、即ち弟の子由は、これから去つて、京都には父上が在り、其の側に侍つて歡びを承けるのであるから、淋しくはなかるべきも、我は子由と別れた後は、獨であるから、いかなることを以て此の寂寞を慰めやうぞ。それで、別れて後も、跡を追ひ、見送りする。山路のことであるから、堤や畔の隔りがある。子由の後姿は、帽子の見えたり隠れたりするのみ。それにつけても、思念に堪へないのは、此の寒天、爾の衣裘は薄く、殊に早曉の出發、瘦せ馬に騎つて、殘月を踏み行くのであるから、風邪に冒されなければよいがと只管懸念する。道上の旅人は、行くゆく歌ひ、家居の人は、團欒して楽しんで居るのに、我は弟に別れて、苦だしく悽惻せるさまであるから、我心を知らない召使ひたちは怪んで居る。併し思ひ返へすと、人生は結局、離別といふことを免れない。で、致方はないと諦めるより外はない。ただ氣遣はれるのは、歲月は飄忽と去つてしまひ、再會の期もいかになるかとの一事である。今、子由と別れたが、後日になつても昨夜、燈前、兄弟相對して語り明かしたことを思ひ起されるであらう。されば豫て約束したやうに、あまり年寄らないうちに、官を罷め、兄弟同居して、靜に夜雨を聽きながら話をして樂まうと思ふよ。何れの日にも、我が此の願が達せられ

張説の詩に、醉舞拂歸鞍。【五】

庭闈 父母の在す處、文選に、眷戀

庭闈。【六】坡壠 堤や畔。【七】

烏帽 隋書禮儀志に、帽、古野人之

服也、宋齊之間、天子宴私、著白高

帽、士庶以烏。又曰く、隱居道素之

士、被レ召謁見者、著黑介幘。又曰

く、幘、尊卑貴賤皆服之、文者長耳、

謂之介幘、武者短耳、謂之平上幘。

【八】行歌 列子天瑞篇に、拾穂行

歌。漢、朱買臣傳に、行歌負薪。

【九】飄忽 たちまちに去る、宋、劉

鑠の七夕詩に、飛光已飄忽。【一〇】

疇昔 禮記の檀弓に、疇昔之夜。



るであらう。子由よ此意を忘れないやうに。いつまでも官職に戀戀として居つては、此の望は遂げられない。切に高官高職を苦だしく愛するだけは慎まれない。(兄弟友愛の情、掬すべきである。)

【餘論】唐宋詩醇の評に、起句突兀有意味、前敍既別之深情、後敍昔年之舊約、亦知人生要有別、轉進一層、曲折適宕、軼是時年甫二十六、而詩格老成如此。とある。

和子由灑池懷舊

子由の灑池に舊を懷ふに和す

人生到處知何似。

人生到處知何似にか似たる、

應似飛鴻踏雪泥。

應に飛鴻の雪泥を踏むに似たるべし。

泥上偶然留指爪。

泥上偶然として指爪を留む、

鴻飛那復計東西。

鴻飛んで那ぞ復東西を計らん。

老僧已死成新塔。

老僧は已に死して新塔を成し、

壞壁無由見舊題。

壞壁舊題を見るに由なし。

往日崎嶇還記否。

往日の崎嶇、還記するや否や、

路長人困蹇驢嘶。

路長く人困し蹇驢嘶きしことを。

於二陵、騎蹇至灑池。【五】蹇驢、跛の驢馬。

【字解】灑池、戰國の韓邑、

漢は縣を置く、明、清は皆、河南河南

府に屬す。今の灑池縣、河南河洛道

に屬す。太平寰宇記に、灑池、即秦

趙所會之地、城與灑池水源相對。

【二】雪泥、鴻爪、跡かたののこらな

いに喩ふ。歐陽永叔の詩に、瘦馬尋

春踏雪泥。【三】舊題、子由詩の

註に、昔與子瞻應舉、過宿縣中

寺舍、題老僧奉閉之壁。【四】往日

崎嶇云云、東坡自註に、往歲、馬死

【題義】紀昀いふ、前四句單行入律、唐人舊格、而意境恣逸、則東坡本色、と。子由の懷灑池寄

子瞻兄詩にいふ、相携話別鄭原上、共道長途怕雪泥、歸騎還尋大梁陌、行人已度古嶠西、曾爲縣吏

君知否、舊宿僧房壁共題、遙想獨游佳味少、無言驢馬但鳴嘶。自註にいふ、轍曾爲此縣簿、未赴而

中第と。東坡は、此詩に和したのである。

【詩意】鴻の歸る、雪に爪して其の通過した所を記す。其の來るときは、雪が消えて痕が分らない。

人生は、雪泥鴻爪に異らない。我嘗て此地の佛寺に宿す。宿縁あつて復來れば、老僧は已に死し、舊

題した自分の詩もない。先年、旅行のとき、乗つた馬が途中で斃れたので、跛の驢馬に騎つて、やつ

とのことで、灑池に著いたあの時のことを思ひ出すかどうか。

次韻劉京兆石林亭之作石本唐苑中物散流

民間劉購得之

劉京兆石林亭の作に次韻す、石は本唐苑中の物、民間に散流す、劉購うて之を得

都城日荒廢。往事不可還。

都城日に荒廢し、往事還るべからず。

唯餘古苑石。漂散尙人間。

唯古苑の石を餘して、漂散す尙人間に。

公來始購蓄。不憚道里艱。

公來つて始めて購蓄し、道路の艱なるを憚らず。

古今體詩 和子由灑池懷舊 次韻劉京兆石林亭之作



忽從塵埃中來對冰雪顏。  
瘦骨拔凜凜蒼根漱潺潺。  
唐人唯奇章好石古莫攀。  
盡令屬牛氏刻鑿紛斑斑。  
嗟此本何常聚散實循環。  
人失亦人得要不出區寰。  
君看劉李末不能保河關。  
況此百株石鴻毛於泰山。  
但當對石飲萬事付等閑。

忽ち塵埃の中より、來り對す冰雪の顏。  
瘦骨拔んで凜凜、蒼根漱いで潺潺。  
唐人は唯奇章、石を好んで古も攀ぶることなし。  
盡く牛氏に屬せしめ、刻鑿して紛として斑斑。  
嗟此れ本何ぞ常あらん、聚散實に循環す。  
人失へば亦人得、要するに區寰を出でず。  
君看よ劉李の末、河關を保つこと能はず。  
況んや此の百株の石、鴻毛の泰山に於けるをや。  
但當に石に對して飲み、萬事等閑に付すべし。

【字解】【一】劉京兆 劉敞、字は原父、仁宗の嘉祐六年（皇紀一七二二年、西曆一〇六一一年）、翰林學士を以て出でて永興軍路安撫使となる。其の治は長安に在り。京兆府は即ち長安。【二】石林亭 麟游縣治の東に在る、宋の劉敞の詩、東坡の和した詩、石刻存す。【三】都城 文獻通考に、京兆府、乃周之舊都、凡周、秦、漢、晉、西魏、後周、隋至唐、並爲三帝都。【四】公來始購蓄 劉原父は博學にして古を好み、多く古器奇物を藏し、能く古文銘識を讀む、長安は、秦漢の故都であるから、時時發掘して得た所、原父は悉く購うて之を藏す。【五】瘦骨 河圖括地象（讖緯書の名）に、地以石爲骨。【六】奇章 奇章公牛僧孺をいふ。白樂天の太湖石記に、今丞相奇章公嗜石、於此物、獨不謙讓、東第南墅、列而置之、以甲乙丙丁下品之、各刻於石陰、曰、牛氏石、甲之上、丙之中、乙之下。【七】聚散實循環 白樂天の記に、噫是石也、百千載後、散在天壤之内、轉徙隱見誰復知之。【八】區寰

字内の義、錢起の詩に、未三必謝區寰。【九】劉李 劉は漢、李は唐を指す。【一〇】鴻毛於泰山 司馬遷報任安書に、死有重於泰山、或輕於鴻毛。【一一】萬事付等閑 張謂の詩に、眼前一樽又長滿、心中萬事如等閑。

【題義】紀昀は此の詩を評して、意境開拓、理趣亦極圓澈、と言つて居る。劉京兆は、長安に在つて、古器數十を得、其の款識文字の奇古なるを愛し、因て以て三代の制度、先儒の説く所と同じからざるものを考知したのである。乃ち自ら一書を著はし、先秦古器記と號けた。劉京兆の石林亭の詩といふのは、朝廷入忘返、山林往不還、念無高世資、聊處可否閒、築基傲崔巍、鞭石輕險艱、羣玉相磊落、萬峯正孱顏、種樹亦蒼蒼、激流復潺潺、渦渚歛在眼、崑閩若可攀、自我揆世網、爾來鬢毛斑、邱壑誠若喪、簿書常自環、及爾滅聞見、曠若遠塵寰、豈願同避世、庶幾善閉關、子牟固懷魏、謝傅悲祖山、茲焉可娛老、詎厭終歲間、である。子牟固懷魏といふは、莊子讓王篇に中山公子牟謂曰、瞻子、身在江海之上、心居魏闕之下、奈何、瞻子曰、重生、重生利輕、とある。【詩意】長安の都も日に荒れて、昔の盛は見られない。ただ古苑の石は、人間に散じて考古の資料となつて居る。劉京兆が長安に来て、苦心して之を購ひ蓄へた。塵埃の中から來て氷雪に對するやうである。瘦せた石は凜凜、青い根は潺湲、林石の趣がある。唐の宰相奇章公は奇石が大好きで、其の聚めた石は、甲乙丙丁の差等を立て、石陰に牛氏石、甲之上、丙之中、乙之下などと刻んだ。ああ此の石は本轉轉として聚散が定まらない。常に循環して、人之を失へば、他の人之を得、要するに此の世界を離れない。昔、楚の共王が出遊して其の烏號の弓を亡つた。左右之を求めんと請うたとき、王の



曰く、止めよ、楚の王、弓を失つて、楚の人之を得、又何を求めんと。孔子は之を聞き、惜いかな、其の大でなかつたことを。なせ、人が弓を遺しても、人が之を得るばかりと言はなかつたかと。看よ漢の天下も、唐の天下も、末路は河關を保つことが出来なかつたではないか。まして此の百株の石、物の數にもあらぬものをや。ただ當に眼前石に對して、酒杯を傾け、心中の萬事、等閑にすべきであらう。

和劉長安題薛周逸老亭周善飲酒未七十而致仕

劉長安が薛周の逸老亭に題するに和す、周は善く酒を飲む、未だ七十ならずして致仕す

近聞薛公子。早退驚常流。  
買園招野鶴。鑿井動潛蚪。  
自言酒中趣。一斗勝涼州。  
翻然拂衣去。親愛挽不留。  
隱居亦何樂。素志庶可求。  
所亡嗟無幾。所得不啻酬。

近ごろ聞く薛公子、早退して常流を驚かす。  
園を買ひて野鶴を招き、井を鑿りて潜蚪を動かす。  
自ら言ふ酒中の趣は、一斗涼州に勝ると。  
翻然として衣を拂つて去る、親愛挽けども留まらず。  
隱居亦何の樂かある、素志庶くは求むべからん。  
亡ふ所は嗟幾もなく、得る所雷に酬ゆるのみならず。

青春爲君好。白日爲君悠。  
山鳥奏琴筑。野花弄閒幽。  
雖辭功與名。其樂實素侯。  
至今清夜夢。尙驚冠壓頭。  
誰能載美酒。往以大白浮。  
之子雖不識。因公可與遊。

青春君の爲に好く、白日君の爲に悠なり。  
山鳥は琴筑を奏し、野花は閒幽を弄す。  
功と名とを辭すと雖も、其の樂は實に素侯。  
今に至るも清夜の夢、尙ほ驚く冠の頭を壓するを。  
誰か能く美酒を載せ、往いて大白を以て浮せん。  
之子識らずと雖も、公に因つて與に遊ぶべし。

【字解】 劉長安 前の劉徹字は原父である。 薛周 京兆府、萬年縣の人、駕部員外郎となる。中歳、事を謝して仕へず。 致仕 官を辭して退隱する、禮記曲禮に、大夫七十而致事。 早退驚常流 致仕の時、五六十と雖も、未だ七十ならざれば早速といふ。常流は常人に同じ、任昉の桓宣城碑に、擢奇取異不軌常流。 野鶴、潛蚪 晉書に、如野鶴之在雞羣。左思蜀都賦に、下高鶴出潛蚪。 酒中趣 晉書に、孟嘉好酣飲、愈多不亂、桓溫問、嘉酒有何好、而卿嗜之、嘉曰、公未得酒中趣耳。 一斗勝涼州 扶風の孟陀は、葡萄酒一斗を以て張讓に遣り、涼州刺史を得。 挽不留 晉書鄧攸傳に、吳人歌之曰、鄧侯挽不留、謝令推不去。 青春、白日 盧仝の詩に、天上白日悠悠懸。歐陽修の詩に、青春固非老者事、白日自爲閑人長。 素侯 史記貨殖傳に、太史公曰、今有無秩祿之奉、爵邑之入、而樂與之比者、命曰素封。又、千金之家、比一都之君、巨萬者、乃與王者同樂、豈所謂素封者耶。 以大白浮 說苑の善說篇に、魏文侯與大夫飲酒、使公乘不仁爲觸政、曰飲不釀者浮以大白、文侯不盡、不仁舉白浮君。浮は罰爵すること、白は罰爵の名。

【題義】 京兆の薛周は、早く官を退いた。薛周の至和二年（仁宗、至和二年は、皇紀一七一五年、西



曆一〇五五年十月二十九日留題樓觀といふ詩がある。薛周は能く酒を飲み、酒中の趣を解し、世の功名富貴を軽んずる。劉京兆を介して此の人と交りたいといふのが趣旨である。

【詩意】薛周は未だ七十にならないのに官を退いて、田園に野鶴を友とする。高官も一樽の酒に如かないといふのが、其の志である。友の挽くのも顧みず、翻然として衣を拂つて去つた。一體、世を遁れるのは、何の樂しみか、それは、素志が求められ、別に亡ふ所もなく、青春愛すべく、白日悠悠、山の鳥は妙音を奏し、野の花も美しいからである。功名を辭しても、其の樂しみは、封侯に劣らない。今に及るも、清夜の夢、ともすれば、冠冕の頭上を壓することもある。誰か能く美酒を載せ、往いて酒杯を飲ませるものぞ。薛周の高風は、人をして共鳴せしめる。どうか劉京兆を通して之と交りを結びたいものである。

驪山三絶句

驪山の三絶句

【字解】(一) 驪山 太平寰宇記

功成惟欲善持盈。

功成つて惟欲す善く盈を持するを。

に、驪山在昭應縣東南二里、温湯出山下。昔の藍田山、天寶元年に、名を會昌山と改めた。(二) 惟 一本に

可歎前王恃太平。

歎すべし前王の太平を恃むを。

雖に作る。(三) 持盈 十分の地位を保つて失ばない。宋史に、願陛下

辛苦驪山山下土。

辛苦す驪山山下の土。

持盈守成、慎終如始。(四) 阿房

阿房纔廢又華清。

阿房纔に廢すれば又華清。

房 秦始皇、阿房宮を築く、十五年にして始めて成る。山河の旁に在るを以て阿房といふ。元和郡縣志に、阿房宮在長安縣西北十四

里。【五】華清 開元十年に建つ。初名は温泉宮、天寶六載に華清宮と改む。長安志に、華清宮四面皆有繚牆、内有朝元閣、長生殿、翔鼓樓。宋の時、朝元閣猶ほ存す。東坡任を罷めて、長安に至り、陳陸と驪山に遊び、朝元閣上に飲む。

【題義】三詩は皆、唐の玄宗の事を詠じたものである。首章は華清宮をいひ、次章は上皇をいひ、末章は朝元閣をいふ。紀昀いふ、此種却有史論之嫌。

【詩意】功業が成就した上は、ただ満つるを持して成るを守り、終を慎む始の如くすべきである。回顧するに、前王が太平を恃んで、戒慎も恐懼もしなかつた爲め、驪山の下、秦の時の阿房宮はあのやうであつた。唐の時の華清宮も同じく亂階をなしたのである。玄宗は毎年十月、華清宮に幸し、歳盡きて歸るを例とした。

幾變雕牆幾變灰。幾びか雕牆に變じ幾びか灰に變ずる、

舉烽指鹿事悠哉。烽を舉げ鹿を指す事悠なるかな。

【字解】(一) 舉烽 周の幽王は、烽火を舉げて諸侯を會し、以て褒姒を悦ばした。(二) 指鹿 秦の趙高は鹿を指して馬となし、以て二世皇帝を欺いた。(三) 前車戒 漢書賈誼の傳に、前車覆、後車戒。

上皇不念前車戒。

上皇は前車の戒を念はず、

却怨驪山是禍胎。

却て怨む驪山は是れ禍胎と。

【四】禍胎 枚乘の書に、福生有基、福生有胎。

【詩意】榮枯盛衰は循環する。宮殿の雕牆も、忽ちに灰に化する。幽王、烽火を舉げて褒姒を悦ばしめたが、終に驪山の下で殺された。趙高は鹿を指して馬とし、秦の二世を欺いたが、子嬰の時に、族



せられた。玄宗皇帝は、幽王や始皇の前車の覆へつた戒を念はないで、却て驪山は是れ禍の胎と怨んで居られる。

海中方士覓三山。 海中の方士三山を覓む、

萬古明知去不還。 萬古明かに知る去つて還らざるを。

咫尺秦陵是商鑑。 咫尺の秦陵は是れ商鑑、

朝元何必苦躋攀。 朝元何ぞ必しも苦に躋攀せん。

【字解】(一) 覓三山 史記封

禪書に、始皇東游海上、祠八神、求

仙人羨門之屬。八神は、一、天主、二、

地主、三、兵主、四、陰主(祠三神)

五、陽主、六、月主、七、日主、八、

四時主。四の陰主の祠三神といふ

三神は、蓬萊、方丈、瀛洲。【二】商鑑 詩に殷鑑不遠。【三】躋攀 相傳ふ、朝元閣の階柱、貫くに紅錦組を以てし、宮女攀援して上る。

【詩意】海中の方士、三神山を覓める。煙は深し蓬萊仙子の家。神仙は遂に得られない。秦の始皇は驪山陵を治め、徒を役する七十萬人。其の殷鑑も遠からぬのに、驪山宮の朝元閣、土木の工を費すこと夥しく、西王母の像のあるところの御階の磴は、蓮花磚を以てする。慶曆の頃には、王母の像も失せ、御階の石柱も道士に焼かれて、既に灰となつてしまつた。

次韻子由岐下詩 并序 子由が岐下の詩に次韻す 并に序

予既至岐下逾月。於其廡宇之北隙地爲亭。亭前爲橫池。長三丈。池上爲短牆。屬之堂。分堂之北厦爲軒窗曲檻。俯瞰池上。出堂而南爲過廊。以屬之廳。廊之兩旁各爲一小池。皆引汧水種蓮。養魚於其中。池邊有桃李杏梨棗櫻桃石榴檉槐松檜柳三十餘株。又以斗酒易牡丹一叢於亭之北。子由以詩見寄。次韻和答。凡二十一首。

【訓讀】予既に岐下に至りて月を逾ゆ、其の廡宇の北隙地に於て亭を爲る、亭の前を横池となす、長さ三丈、池上に短牆を爲りて之を堂に屬す、堂の北厦を分ちて軒窗曲檻を爲り、俯して池上を瞰る、堂を出でて南に過廊を爲り、以て之を廳に屬す、廊の兩旁に、各一小池を爲る、皆汧水を引き、蓮を種る、魚を其中に養ふ、池邊には桃・李・杏・梨・棗・櫻桃・石榴・檉・槐・松・檜・柳三十餘株あり、又、斗酒を以て牡丹一叢に亭の北に易ふ、子由詩を以て寄せらる、韻に次し和答す、凡そ二十一首。

北亭 北亭

誰人築短牆。橫絕擁吾堂。 誰人か短牆を築き、横絶して吾が堂を擁する。

不作新亭檻。幽花爲誰香。 新亭檻を作らずんば、幽花誰が爲にか香しからん。



【字解】 短牆 東坡の自註に、舊堂北有牆、予始去之爲亭。北亭は即ち喜雨亭にして、斯時未だ名あらず。

【題義】 紀昀いふ、五絶分章、模山範水、如畫家有尺幅小景、其格倡自朝川（王維）爾後、輾轉相摹、漸成窠臼、流連光景、作似盡不盡之詞、似解不解之語、千人可共一詩、一詩可題千處、桃花作飯轉歸塵劫、此非翹始者過、而依草附木者過也、此二十一首、要自我行我法、固知豪傑之士、必不中依託門戶以炫俗也。東坡が鳳翔府に赴任したとき、官舎の北のあき地に亭を建て、研水を引き小池を爲る。池邊に花樹三十餘株あり、子由が詩を寄せられたので、次韻したものが此の二十一首である。

【詩意】 北亭は、其の後、喜雨亭と名けた。舊堂の北には牆があつて、多少見晴しを妨げた。そこで之を去つて新亭を築いた。新亭を築かないと、幽花も見られない。

横池

横池

明月入我池。皎皎鋪紵縞。

明月我が池に入る、皎皎として紵縞を鋪く。

何日變成緇。太玄吾嬾草。

何れの日か變じて緇とならん、太玄は吾草するに嬾し。

【字解】 紵縞 麻布と練絹、子由の詩に、池魚躍金碧、白鳥飛紵縞。 成緇 論衡に、白紗入緇、不染白黑。 太玄 揚雄が太玄を草すると、或人、玄の尙ほ白きを嘲ける。雄乃ち解嘲を作る。揚雄の解嘲に、吾默黙獨守吾太玄。

【詩意】 明月の池に映る、麻や練り絹を鋪いたやうである。白紗が緇に入れば、染めないでも自ら黒

い。此の麻や練り絹は、何れの日にか黒くなるであらう。昔、揚雄が太玄を草すると、或人は玄の尙ほ白きを嘲けた。そこで雄は解嘲といふ名高い文章を作つた。太玄は吾草するに嬾い。

短橋

短橋

誰能鋪白簟。永日臥朱橋。

誰か能く白簟を鋪き、永日朱橋に臥す。

樹影欄邊轉。波光版底搖。

樹影は欄邊に轉じ、波光は版底に搖ぐ。

【字解】 白簟 簟は竹や葦で編んだ敷物。 臥 朱橋 盧綸の詩に、朱橋夜掩津。杜牧之、阿房宮の賦に、長橋臥波。

【詩意】 竹や葦で編んだ白い敷物を美しい朱塗の橋に鋪いて臥すと、樹の影は欄干に移り、波の光は橋板の下で動いて居る。

軒窗

軒窗

東隣多白楊。夜作雨聲急。

東隣白楊多し、夜雨聲を作して急なり。

窗下獨無眠。秋蟲見燈入。

窗下に獨眠ることなければ、秋蟲は燈を見て入る。

【字解】 多 白楊 東坡の詩に、鄰舍何妨借樹涼の句あり。此の東鄰の白楊をいふ。

【詩意】 東坡の官舎は府治の東に在る。白楊が多い、従つて秋蟲も少くない。夜、楊柳が雨聲をなす